

人形、ヒト、機械

屍原

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アンドロイドは人類の偉大なる発明、人形は人類の技術によって様々な進化を遂げた。

人形は創造主である人類を仕えるために、様々な能力を身につけた。

不思議な事に、人形は「感情」が存在していた。

まるで、創造主である人類のように。

しかし彼らは、感情を持つ事を許されない。

なぜなら、彼らは人形なのだから。

頭を壊した作者は、意味不明なあらすじを残した。

※見切り発車のため、長くは続かないかもしれません※

※趣味本位で執筆してるので、不定期更新とさせて頂きます※

人形と人類は出会う	1
人形と人類は大地を踏みしめる	7
人形と人類は廃墟都市を駆ける	13
人形と人類と機械	17
人形と人類は依頼を遂行する	26
人類と特別個体の片割れ	33
人類と特別個体たち	42
人類と依然本性を知らぬ特別個体	48
贖罪の人形達とヒトは出会う	53
人形は主要任務を遂行する	60
人形達の遭遇	67
人形達と人類は出会う	73
人形と人類は水没都市へゆく①	79
人形と人類は水没都市へゆく②	85
人類と特別個体の問答	93
人形達は人類を思ふ	100
人形の出撃	107
人形と特別個体の変化	113
I Fの話	
R a i n	125
ヨルハ部隊所属…?	128
アンドロイドはダンスマカブルの夢を見るか?	131
悪い癖	136

不吉な象徴

ありえたかもしれない話

## 本編

### 人形と人類は出会う

#### ― 序言

遙か遠い未来、人類は、地球は宇宙から飛来したエイリアン、やつらの作り出した『機械生命体』によって奪われた。敗れた人類は、生き残った者を連れて、辛うじて月へと逃げ延びた。己の星である地球を奪還すべく、人類は古くから伝わる技術を使い、『アンドロイド』という、人間を模した人形を作り出した。

それは、地球を奪還するため。それは、機械生命体を破壊するため。それは、エイリアンを殺すため。

ヨルハ部隊、最先端の技術で作られたアンドロイド部隊。宇宙空間、地球にもっとも近い位置にあるバンカーは、ヨルハ部隊の基地。飛行ユニットや転送装置を使い、バンカーと地球を行き来する。

いつか地球がヒトの手の戻るその時まで、人類のために奮闘する。それが、今のアンドロイドの役目である。

#### ― 人類発見

「こちら2B、先ほど、特別個体『アダム』と『イヴ』と遭遇。それと……」

2Bはちらりと横に立つ9Sを見つめる。黒いゴーグルをつけていて、目元は見えないものの、困惑している気配は漂っている。二人も、すぐそこに倒れている『なにか』を見ていた。しかし、バンカーに報告するのは、必要な事。ならば、躊躇う余地などないだろう。未だ言葉が喉に詰まってる2Bの代わりに、9Sはバンカーへの報告を続けた。

「特別個体には逃げられましたが、代わりに女性を発見しました」

『…?女性とは、アンドロイドか?』

「いえ、それが……人間、人類の女性です」

地球のある地域の調査を担当することになったヨルハ二号B型と

ヨルハ九号S型——通称2Bと9Sは、担当地域にて、月に逃げ延びたはずの一人の人間を発見。

—— アダムとイヴ①

「なあ、にいちゃん」

「なんだ？」

「なんでさっきの人間を手放したんだ？」

「あれはこの地球でたった一人の人間、暫く動向を観察したい。人間の行動パターンは様々、とされてるらしいからな」

「ふうーん。人間って、面白いんだな」

「ああ、そうだな」

一方その頃、アンドロイドを模した機械生命体達は、どこかで会話を続けていた。

—— 解決法

「僕達アンドロイドみたいに丈夫じゃないし、飛行ユニットでバンカーに向かうなんて、無理ですよ！」

「……バンカー、こちら2B。対象の人類をバンカーに移送するのは不可能」

思考が追い詰められ、仕方なく、またもやバンカーに通信を送る。9Sの言う通り、アンドロイドならまだしも、生身の人間が上空の気圧に耐えられない。たとえ気圧に耐えたとしても、宇宙と繋ぐ大気圏で、とつくに灰になってこの世から消えてるだろう。どうしたらいいのかも分からず、残された唯一の方法は、やはりバンカーへの通信。『司令官より命令、発見した人間はレジスタンスキャンプに預けよ、との事です』

「レジスタンスキャンプ、ですか？」

『はい。現状を判断し、この案がもつとも安全とのこと』

「分かりました。ありがとうございます、オペレーターさん！」

ポッドから飛び出した通信映像が消え、二人のアンドロイドは再び、倒れてる女性に目を向く。カジュアル風な黒いコート、白いシヤ

ツ、ブラウンの短パンに長ブーツ。どこからどう見ても、資料に記してある、昔の人間がよく着る服装だ。しかし彼らは、初めて己の創造主である人間を見る。少しなからず、困惑している。

月にいたはずの人間が、なぜ地球に？同じ疑問が、二人に降りかかる。

「ひとまず、彼女をレジスタンスキャンプまで運びませんか？」

じーっと人間を見つめる2Bに声をかけ、9Sは小さな微笑みを浮かべて、頭を軽く傾げる。彼に目をやり、なにか考えたのちに、コク、と頷く。自分が運ぼうと両手を伸ばすも、9Sに阻止され、戦闘は得意じゃないので、と付け加えられる。

確かに、偵察に特化した9Sに防衛を任せてばかりでは、彼の身が持たない。戦闘に特化してるB型の自分なら、問題ないだろう。

「それじゃ、行きましょう！」

言葉の代わりにまた頷き、レジスタンスキャンプへ向けて走り出す。

## ― 目覚め

無事人間である彼女をレジスタンスキャンプに保護してもらい、2Bと9Sは再び任務に戻り、約3日後に、彼らは再びレジスタンスキャンプに訪れた。

入り口付近に着いた二人は、薄々と歌声が聞こえた。

「…歌？」

「推測：先日保護した人間の歌声」

2Bの疑問に、ポッド153は即時に判断して答えを導き出し、彼女たちに回答をもたらす。歌ってる言語こそ分からないが、その歌声は、どこか悲しげに聞こえた。感情を持つ事を禁止されてるとはいえ、存在するはずもない心が、痛む、とても辛く感じる。二人は歌声に沿い、人間の元へ向かう。

「ああ、おかえりなさい。貴方も、彼女の歌声に？」

入ってすぐ、とあるレジスタンスが話しかけてきた。途切れた言葉からするに、彼女も、人間の歌声に魅了された一人なのだろう。ゴー

グルをつけてるとは言え、レンズ越しに薄っすらと見える瞳は、止めどない悲しさを宿してる。歌は、人の感情を揺るがす物、それは良きことであり、良からぬ事でもある。大昔の人間が、長年の研究で得た一つの結論。この時9Sは、この結論に頷いたのは、初めてなのかもしれない。

簡易休息所のある簡易ベッドの上に座り、歌ってる彼女の元までつくど、彼女も二人に気づき、口を閉ざす。そして、微笑みを浮かべる。

「こんにちは、今日はいい天気だね」

口に出されたのは、何の変哲もない、まるで友人とでも話してるような、穏やかな言葉だった。言葉に反応しきれない二人だが、目はしっかりと、彼女の容姿を確認してる。

真つ黒な瞳はまるで黒曜石のようで、陽に当てられた髪はブラウンのように見え、照らされた白い肌は細い血管がよく見える。彼女は、間違いなく、己の創造主で、生身の人間である事を、アンドロイドヨルハ機体の二人は再確認した。

彼女はじつと、黒いゴーグル包帯をつけた二人の目を見る。じつと、二人の白い髪銀のを眺める。視線を移し、浮遊してるポッド箱を見る。まるで、幼い子供のように、好奇心を抑えられない子供ののように、彼女の目に映るものがすべて新鮮でならないようだ。

「えつと、こんにちは！僕は、ナインエス9Sって言います。こっちは…」

「2B、私は2B」

どう返事を返せばいいのか、悩んでる2Bの代わりに冒頭を切り開き、どこかぎこちなさそうに返事を返した9Sに続き、2Bも慣れない感じで話し出した。単なる自己紹介、簡単なはずなのに、なぜか、彼女と向き合うと、うまくできないらしい。きつと、初めてお会いできた人間だから、なのかもしれない。小さな微笑みを保った9Sは、そう思った。

「よろしく、9Sさん、2Bさん。私はアカネ、霧雨アカネ。緋と書いて、アカネ」

そつと右手を上げ、二人の前に伸ばす。近くで見ると、コートを



取った彼女の手はひどく華奢で、少しでも力を加えて触れてしまったら、折れてしまうと思うほどに、繊細に見える。殆どのアンドロイドは、戦闘機能が搭載されている。戦闘に特化した機体が力の加減をほんの少しでも間違えれば、血肉を持った人間を殺しかねない。

戸惑う二人に、彼女は何か察気づいたしたのか、立ち上がる。

「あ、アカネさん？」

「そのまま大丈夫。はい！」

ぎゅつと、彼女は固まった9Sを抱きしめた。背中をポンポンと軽く撫で、次に、頭を優しく撫でる。予想外の行動に、9Sはやはり、固まったまま動かない。戸惑いを越した彼は、ただ呆然と、彼女にされるがままだった。

「2Bさんも」

「わ、私はいい！あなたが傷つくかもしれない……」

「大丈夫、君もそのままでもいいから！」

9Sをそつと離し、アカネは2Bの元へ向かい、ゆっくりと、彼女を抱きしめる。先ほど9Sにしたように、背中を撫で、頭を撫でる。親愛に満ちたその行動に、2Bは、暖かい気持ちに包まれていた。ああ、これが、人の温もりなのだ。感情を持つ事を許されない人形は、そう考えた。

暖かい、安心する。このままずっと、ずっと……

この感覚に溺れて、深く、深淵の底まで……依存したい寄り添いたい。

ハツとした2Bは、頭の中に残った考えを振り払うように、アカネに離して欲しいと言い放つ。進んで彼女を拒絶したいわけではない。だけど、このままでは、己の中にあるなにかが、生じてしまう。それがいなものか、悪いものかも知らずに。

「分かった。ごめんね、無理させて」

2Bを離し、距離を取ったアカネは苦笑いを浮かべ、謝罪の言葉を口にす。

チクつと、胸が痛んだ。どうしてだろう？このチクチクと痛む感覚

は、何なのだろう？ パーツに問題が……いや、自身が故障し始めたのか？ それとも、ウイルスに汚染したのか？

否定：それは『感情』。

ポッドは悩む2Bの代わりに、彼女の欲する答えを見つけ出した。今度こそ、彼女は酷く戸惑う。

「アカネさんはもう少し休んでください！ 僕達は報告に向かいますので！」

「ああ、ごめんね引き止めちゃって。お仕事、頑張つてね！」

「……はい！ ありがとうございます！ それじゃ、後ほど！」

気が付くと、2Bは9Sに引つ張られて、アネモネのところへ向かっていった。あの、理解できない、感情を胸のうちに残して。

### — 司令官の思考

最近地上に降りた2Bと9Sの報告によると、長年発見できなかったエイリアンの巣窟を発見しただけでなく、さらには特別個体の機械生命体『アダム』と『イヴ』と遭遇。拳句には、生き残った人間を発見した。

ありえない。私の知ってる限りでは、人類はとっくの昔に消え、今では月に僅かな人体データしか残ってないはずだ。なのになぜ、彼らは人類を発見したのだ。それも機械生命体とアンドロイドに満ちた、あの地球で。

「彼女は一体、何者だ……」

人類の正体を知りたい、彼女が自分の創造主であるのか確かめたい。しかし司令官という職を背負ってる限り、地球に降り立つ事は叶わず、その人類もまたバンカーに到達する事などできるはずがない。

大きなモニターを見つめる金髪のアンドロイドは、深く、重いため息を漏らした。

## 人形と人類は大地を踏みしめる

— アネモネからの頼み

アネモネが依頼した素材を渡し、報告も済ませたところ、二人はまたもや呼び止められた。後ろに一歩下がった足を元の位置に戻し、どこか気まずそうな雰囲気を漂わせるアネモネに目を向く。

「すまないが、もう一つ頼まれてくれないか？」

2Bと9Sは視線を交わし、ほぼ同じタイミングで頷いた。地上に降り立ってから、随分とここの世話になってもらい、その上休憩する部屋まで空いてくれたのだ。よって断る理由など、ある筈ない。もしレジスタンスキャンプにいる仲間達の役に立てるのであれば、どのアンドロイド誰でも快く頷くだろう。

早速承諾してくれた彼らに、アネモネは嬉しそうに笑みを浮かべて、頼み事の内容を告げる。

どうやら森地帯を繋ぐ商業施設跡の辺りにキャンプを設置するらしく、安全を確保して欲しいとの事だった。本来ならばレジスタンス側の者を手配するはずだったが、どうも人手が足りないらしく、こうして2Bと9Sに頼んでいる。それだけじゃなく、もう一つわけがあったらしい。

「彼女を、ずっとこのキャンプ内に保護閉じ込めてるしてるんだ：無理を言ってるのは承知してるが、連れてってやってくれないか？」

困ったように頭を傾げ、そう遠くない所で、しゃがんで花を眺めている人類に視線を寄越す。釣られて同じくそちらに振り向くと、視線に気づいたのか、彼女はしゃがんだまま笑みを浮かべ、ひらひらとこちらに手を振る。

自然を代表する草と花、加えてそれらの隣にいる人類。なぜだか、とても美しく見える光景だった。自然に生きる物、自然に生きる者。例え時には自然を破壊するも、人類の根本は自然との共存、自然を依存する存在。この地球で残り少ない自然の産物と、現在に置いて彼女しか生存していない人類、それがどれだけ貴重なのかを、思い知らせる光景でもあった。

あれ？そこに一体なんの接点があるんだ？と思考してる9Sは自分の脳内に溢れ出す考えに疑問を覚えるばかり。どうも人類彼女に聞くと、思考も乱れてあやふやになるらしい、今後彼女も注意しないと。そつと、心の中でなんとも言えない結論に至った。本来Sスキャナータイプ型である自分は、把握、分析方面において優れているのに、この場に限って思考能力と判断力が落ちてしまうとは、全くの予想外である。

これは、一度バンカーで見てもらうべきでは…？

「はい、分かりました」

しかし頼まれ事もあるゆえか、分析しきつてない情報を頭の隅に置き、なんとなく承諾した9Sだった。だが、彼は一つ、重要な点を考慮していなかったのだ。人類の彼女、果たして無事に目的地である森地帯の入り口まで到達できるか。彼女の体力が、そこまで耐えられるのか。

二人は彼女を迎え、レジスタンスジャンプを出た頃に、急に思い出したとか、ないだとか。

## ― 散歩道中

レジスタンスキャンプの所在地、もといその周辺は過去の文明、人類が発展した結晶の名残ばかり残されている地帯である。拙い表現だと『倒壊した建造物だらけ』の地域エリアである。そこかしこに生えてる木々や草花は、地球が人類の管理から外れ、どれくらいの時が過ぎたのかを証明するかのような証となっていた。

例え、かつてはコンクリート機質の街といわれようと、人類が存在していた痕跡に、間違いはない。

緑色と灰色しか映らない景色ばかり。2Bや9Sにとって、もう呆れるくらい目の当たりにした景色。なのに、アカネはそれらが視界に入った瞬間、どうも非常にはしゃいでしまったらしい。

「すごいーなんだか古代文明って感じがするね！」

彼女の時代に存在していたのに、古代文明と、あまりにも似つかわしくない言葉を使うので、一体どんなリアクションを返せばいいのか分からず、戸惑ってしまう。いや、実は理由はもう一つある。この崩

壊した世界の一端を見て、もしかしたら彼女が驚き、ショックを受けるかもしれない、という予想<sup>覚悟</sup>で連れ出したのだ。だが見ての通り、人類のアカネは驚くどころか、まるで幼い子供のように笑顔を浮かべてる。かつて自分らが築き上げた物は、辛うじてしか形を保てない状態に至るまで破壊されたというのに、未だ気楽な態度を取っている。

黒い衣を纏<sup>こも</sup>った人形達は考える。もしや、全ての人類は、目の前にいる少女と全く同じ思考をしている者ばかりなのか？

「否定：記録を参考し、アカネという人類は『特殊』な分類にある」  
「ポッド153に賛同。推測：人類アカネは前向きな性格」

随行支援ユニットであるポッドが投げ出した否定、推測を耳にし、思わず体を動かして、頷いた。確かに、データにあった人類は、特にこの土地にいたであろう『日本人』という種族の中で、アカネは特殊な分類に入るかもしれない。謙遜で、適切な距離を置き、あまり他人と関わりを持たない人種、とどれかのデータで見た事がある。

人類の事は、よく分からない。けれど、周りをキョロキョロと見回すこの人類の事は、もつと分からない。手を顎に当て、思考に溺れがちながらもアカネの後ろ姿を見つめる9S。隣には、不思議そうに頭をかしげる2B、目は9Sと同じくアカネに向けられてる。しかし注目的<sup>ま</sup>である、当のアカネ本人は未だキラキラした目で、緑に侵食されてる建物の残骸を眺めている。

果たして、無事に依頼をこなし、彼女を守りきれだろうか？二人は、同時にため息を吐いた。これが、憂い、という感情だろうか？

「…感情を持つ事は、禁止されてる」

もちろん分かっている。けど、言葉を口に出してる2Bも、同じものを感じたからこそ言ったのだと、9Sは思った。でなければ、あんな戸惑うような様子なんて、見せるはずがない。

「ほら、行きますよ、2B？」

— 散歩道中 その2

レジスタンスキャンプを離れた以上、安全ではない事は既に理解している。安全区域の外は、当然危険が待ち受けている、それは地上で

生きていく者であれば、誰しもが分かる。

そつと、地面に開いた大きな穴を眺めてる人類に目を向く。後ろ姿だけで、どれだけ無防備なのか、見え見えである。そもそも会ったばかりの自分らに、無闇に背中を向けるのも、どうかと思う。

「アカネ、危ないからあんまり離れないで」

手を伸ばして、落ちかねない位置にいる彼女の腕を、力の加減を制御して、掴む。思わぬ、ふにとした柔らかな感触に、動きが止まる。外見こそ大層変わらないが、やはり造りが違う。現に、彼女の肌の感触に、2Bは戸惑っている。己の強靱な素材でできてる外殻と違い、彼女の体に覆ってるのは、骨や血肉。義体は使えない、バックアップデータもなければ、再構成もない。

怪我でもすれば、簡単に死んでしまうモノだ。

もし、彼女が隙間に落ちたら？もし、切られたら？もし、刺されたら？もし、爆発に巻き込まれたら？答えなんて、簡単だ。死。脆い人類が待ち受けている事実なんて、コレしかない。

「賛同：アカネは機械生命体のターゲットにあたり、危険である。提案：2B、および9Sの射程範囲内に留まる」

思考を読まれたのか、と思わざるを得ないポッド042の言葉に、一瞬身構えてしまった。しかし長年共にいる者だからこそ、己の思考も隅々まで理解し、この発言をしたのだらうと、強張った体が緩める。アカネが頷き、ポッド042の言葉に従って、穴から離れた。彼女の安全を確認したのち、掴まっていた手を離してやれば、そう遠くないところからギシギシという音が耳に入った。視界で確認するよりもさきに、武器を呼び出し、白い刃の柄を掴み、音が鳴った方角に向かって振り下ろした。追加したスキルの機能が発動、振り下ろされた刃から衝撃波が現れ、目にも留まらぬ速さで飛ばされていく。

直後、なにかが破壊された音が響き、数秒もない内に爆発が起きた。ドーン！という大きな音と共に、機械のパーツが地面に散らばる。

「……機械生命体!?アカネさん、隠れてくださいー!」

慣れた敵の前に、本来ならば冷静に対応し、速やかに片付けるのが日常であり、アンドロイドとして最優先の行動。なのに、この時、こ

の瞬間に限って、二人は理性よりも、感情の方が凌駕した。原因はただ一つ、地上に存在するはずのない人類が、この場に存在しているからだ。儚く、脆く、弱く、守るべき人類がこの場にいる。

もしも、アカネが機械生命体たちに接近されたら……違う、むしろ、接近させたら、言葉通り、本当に最後を迎える。命の終焉

「報告：機械生命体の反応が多数、およそ20体」

「くっ…予想以上に数が多い。どうしたら…」

「ポッド、アカネの保護を。接近する機械生命体は構わず撃て」  
「9S…?」

ポッド042に与えた指示に対し、状況の改善を求めて思考に入った2Bは思わず疑問に満ちた声で、9Sの名を呼んだ。なぜ、と問わんばかりの声色だった。しかし当の9S本人はいつもの楽しげな雰囲気などなく、真剣な顔で口を開く。

「このままだと、彼女が殺されるのも時間の問題です。ならば僕たちが一刻も早く奴らを殲滅させた方が、安全を確保できるじゃないですか?」

要するに、壊殺される前に壊殺せと、シンプルに簡潔にすればこうなる。アカネが包囲される前に、二人で接近を試みる機械どもを皆殺しにすれば、残された彼女はポッドに任せても問題はない。たとえ生き残った機械が彼女に接近しようとも、すでに破壊される寸前の状態になつてゐるだろう。9Sと違い、ポッドの援護射撃なしでも接近戦で解決できる。ならば保護は、ポッドだけでも、対応できる。

結果的に、彼女は生き残れる。彼女を、守れる。

彼女の方に、振り返る。怯えているだろうか、震えているだろうか、それとも、泣いているのだろうか?様々な考えが巡り、彼女の状態が非常に気になる。しかし、予想はすべて外れ、意外すぎる光景が目映った。

「私は平気だから、安心して」

初めて会った時に向けられた微笑みが、また、現れた。緩くて、やんわりしていて、安心できる暖かい笑み。こんな緊迫とした場面の中でも、自然に浮かべられた。自分達は、しくじるかもしれないと恐れ、

彼女の死を恐れているというのに。

……彼女は、信じてるんだ。僕たちが必ず成し遂げると、信頼を与えられてるんだ。結論に至った9Sは、力が漲ってくる感覚に襲われた。言葉では形容しきれない、莫大な感覚、見知らぬ感覚。無償に向けられた信頼、感じるのは、果てしない喜びと感動。

そして、得体の知れない高揚感。きつと、2Bも同じ感覚を共有してるはず。

「必ず、戻ってきます」

「9Sの言う通り、必ず、あなたの元に帰ってくる」

戦士<sup>2Bと9S</sup>たちは己の意思を伝え、白き<sup>契約</sup>刀と黒き<sup>誓約</sup>刀を握りしめ、地面を蹴り、凄まじいスピードで遠くへと走っていった。いつもとは違う、誰にも負けぬ高揚感と共に、機械生命体に制裁を下しに。

残されたポッド042は、持ち主の2Bと9Sを見届け、この光景を記録に収めた……この事を知らされるのは、恐らく、隣にいるアカネだけだろう。人類という甘美な響きに敗れ、ポッドすらも魅了する、人類に知られる。

おまけ

— 箱<sup>ポッド</sup>は囚<sup>虜</sup>われた

「ポッドさん、しばらくの間、よろしく」

「訂正：私の名はポッド042、ポッドさんだけでは混乱を招きやすい」

「じゃあ……ヨニさん？」

「……賛同。しかし、敬称は不要」

「分かった、ヨニ」

「推薦：9Sたちが帰還するまで、建物内で身を潜む。案内する」

「ありがとう、ヨニ」

「……要求：名を呼ぶ回数を増やして欲しい」

「うん、ヨニがそう言うなら、いいよ」



## 人形と人類は廃墟都市を駆ける

### ― 散歩逃避行

2Bと9Sが離れていったのは、どのくらい前の事だろう。ポッド042<sup>ニ</sup>の指示に従って、建物の中で身を潜め、幾度か場所を移し変えても、二人と合流できてない。不安<sup>：</sup>を感じてるわけでは無いが、ほんの少しだけ、心不足のほうが良いかもしれない。不確定な表現をしているのは、アカネ自身でもよくわからないからだ。

「案外丈夫だね、触れただけでも崩れそうなのに」

浮いてるポッド042のあとに続いて、壁に触れながら進む彼女はそつと呟く。なにかと物に触れたがり、まるで子供のように物に触れないと気が済まないとも言える癖を持つてる彼女だからこそ、非常事態でも平然とこんな真似ができるかもしれない。呑気な呟きをしてはいるが、隙間と建物内での移動速度を落とさないとところを見て、常人の危機感を持ち合わせてるらしい。

外で流れる水の音を聞き、そちらの方向に顔を向けながら、前へ進む。不意に、瓦礫に足をぶつけ、躓き倒れそうところ、ポッド042は彼女の腕を引っ張った。

「警告：散らばる瓦礫に注意」

「ありがとう。ごめんね、ヨニ」

<sup>2Bと9S</sup>持ち主不在の今、彼女を守るのはポッド042、己のみだと承知してるゆえに、彼女が怪我せぬようにと気を配らなければならない。幸い今に至って、当該する敵である機械生命体は一機とも遭遇しておらず、まだ安全は確保されており、彼女ら一行の動向はまだ掴まれないらしい。

引き続き移動に移るが、浮遊してるポッド042は未だアカネの腕を掴んで離さない。一体どうしたのだろうか？と不思議に思った彼女は、眉尻を下げ、戸惑ってるように見えた。

「…一人で歩けるよ？」

「否定：アカネの注意力は低下している、一人ではまた転ぶ」

「……子供扱いしてる？」

「不明：アカネは立派な成人女性、子供扱いの定義が不明。要求：2B および9Sと合流するまで、身の安全を確保する」

腕を掴んだ手を離し、代わりに浮かぶ高度を下げ、彼女の手の近くまでくれば、そつと、非常にやんわりという風に手を握り、エスコートするかのようにゆっくりと前へ進む。過保護になりつつあるポッド042の行動に、何も言わず、さきほどの悔しさも忘れ、彼女は微笑みを浮かべて頷くだけだった。

危機が未だ訪れない、平穏な逃避行を続く最中でも、ポッド042は速すぎず、遅すぎず、彼女の歩幅に合わせて移動している。どんな思いで決めたのか、そんなものはどうでもよかった。

大事な保護対象彼女が無傷でいられるのなら、システムとプログラムにない行動をしたって、構わなかった。

ポッド彼女一機と一人の逃避行は、まだまだ続く。

— 感情発見行  
依頼殺戮行

建物、瓦礫、残骸、機械のパーツ。コンクリートに囲まれ、広場と なってる一箇所は草むらと、破壊し尽くされた機械の部品が辺りに散 落していた。ガラクタに囲まれ、中央に佇んでいるのは黒いアンドロ イドが二機、片手は武器を握り、胸は上下に動き、息切れしていた。

「はあ、はあ……つ敵の殲滅を、確認」

「……ええ、終わった……みたいですねっ……」

互いの背中を合わせつつ、残った機械生命体がないかを確認し、辺りを見回す。再度安全を確認した二人は胸を撫で下ろし、随行システムを使い、背中あたりに浮く光る輪の中に武器を収納させた。

殲滅が完了し、2Bはすぐポッド153に彼女との連絡を入れさせた。どれだけの時間が経過したのか、戦闘に集中していた二人には覚えがなかった。ゆえに、保護対象である彼女の安否がいかなるものかも、まったく分からない。張りつめられた空気の中、ようやくポッド042との通信が繋がり、映し出された画面には、頭を傾げているアカネの姿が見えた。

ああ、よかった……彼女は無事だ。ゴーグルをつけていてよかった。

二人は同時に安心し、同時に提供された装備に感謝を捧げた。感情の所有を禁じられてるアンドロイドは、いついかなる時でも冷静さを求められている。たとえ対象が仲間アンドロイドでも、創造主人類であつても。

だが、いざ彼女の姿を目に映すと……

自分でも信じられないほど、笑みに満ちた顔になるからだ。彼女に見せたくなかったのも、恥じらいという感情のせいだ。

「わっ……すごいハイテック！音声届いてる？2Bさん、9Sさん？アカネだよー？」

画面にいるアカネの頭は左へ、右へとゆらゆらと動き、好奇心豊富な子供のような動きを見せていた。動きに連動し、さりりとした長い髪も揺れ、視線をやや遮る前髪を指でそつと、耳にかける。普通でならない、アンドロイドもよくある行動パターン的一种。だが、二人にとって、とてつもなく特別らしい。

「……つもう、あなたって人は……」

「本当、仕方ない人ですよ……」

「警告：本機の視覚センサーに異常あり。2B、および9S両名の心拍数上昇を確認。原因：アカネの不明な破壊力。解決：通信映像の保存、ループによる耐性の習得」

不明の原因で胸とが疼きき出めすアンドロイドは下唇を噛み締める。直後に、2Bは両手で顔を覆い尽くし、9Sは両手を背後に合わさり、仕方ないという風に恥じらいの苦笑いを浮かべる。そして、通信の画面を映し出してるポッド153も、故障でもしたのかと疑われるほど、おかしいな発言を述べていた。最大の原因であるアカネは意味が分からないように、またもや頭を傾げ、ニコツと口角を上げて、二人の反応を窺う。

ああ、アカネ、もしかしてほかの人類がまだ存在していたら、あなたのような人間は何人もいただろうか？思考回路に支障が出現したらしい二人に、考えつくものなど、それしかなかった。もしかすれば故障や支障などではなく、禁じられた、か感のものが現れ始めてる症状なのかもしれない。

ここで、ハッと意識を引き戻す二人であつた。

「そうだ、アカネさん怪我は？今どこにいるんですか？」

「怪我一つないよ、安心して。場所は：近くに鉄塔があつて、大きな谷と、向こうにシヨツピングモールみたいな建物が見えるところ」

「分かった。アカネ、そこで待ってて。今すぐ、そちら迎えに向かうから」

まずは彼女の状態を聞く9Sに続き、現在位置も確認した。アカネの描写が間違っていないければ、おそらく彼女はいま、商業施設へ向かう唯一の通過点、鉄塔付近の橋、その近くにいます。通信越しに届いた音声の中に、彼女の声以外にも、滝の音が僅かに聞こえるのだ。アカネのところへ向かう、と言い放つ2Bの声を聞き、画面に映し出されたアカネは目蓋を閉じて、期待の笑みを浮かべる。

「うん、待ってる」

あまりにも、幸せそうに見える笑顔は、まるで、愛しい者の到来を待ち望んでるヒト姫のようだった。ドキリと、心臓の鼓動にも似た音が響き、アンドロイドの動きは一瞬のみ、止まった。そして、揃って言う。

「必ず迎えに行く、だから、もう少しだけ待ってて」

## ― アダムとイヴ②

「なあ、にいちゃん。なんでずっとあの人間を見てるんだ？」

「人間は興味深い生き物だ、なんでもその中には他者を魅了虜する者がいたらしい」

「そうなのか？でも、あの人間となにか関係あるの？」

「あの『アカネ』という人間は、私が言った『他者を魅了する者』に当てはまる人類だ。彼女の動き、言葉一つで、アンドロイドさえ容易く魅了したのは想定外だが……ああ、実に、興味深い！」

「にいちゃんがそう言うなら、俺も会いたくなかった」

「近々『アカネ』と会う予定だ、そう焦らなくていい」

「うん、にいちゃんがそう言うなら、大人しく待つよ」

「いい子だ」

その頃、機械生命体達はどこかでアンドロイドと同行してる人類を観察していた。

## 人形と人類と機械

— ポッド042は稼動<sup>思</sup>する<sup>う</sup>

植物に侵食されたコンクリート<sup>建物</sup>が囲み、鉄塔が聳え立つ草原に似た空間で、黒髪の少女は佇んでいた。柔らかな風に撫でられ、黒い髪は波紋を描き、宙を舞う。日の光を当て、キラキラと光る黒曜石<sup>黒</sup>のような瞳は、遠い昔に建造された大きな建物<sup>商業施設跡</sup>を見つめる。瞬きをする度に、目蓋と連動した睫毛は軌道を描く。そつと腕を上げ、眩しい光を遮断するかのように、額の付近にかざす。

カシャリと、不明<sup>シャッター</sup>の音が彼女の隣から響いた。視線を逸らし、うしろでふよふよと浮かんてるポッドに振り返る。

「記録：今後における人類の研究」

「盗撮、だめだよ？でもヨニなら、仕方ないね」

困ったように眉を落し、苦笑いを浮かべる。しかしそれも数秒のみ維持され、すぐに普通の微笑みに切り替えられた。そこでまた、カシャリ、と音が鳴り出す。反省などまったくしてないポッドは、また撮影してしまった。加えて、ポッドは「報告：許可は得ている」とまて言い出す。

「ヨニは、写真撮るの、好き？」

ため息を吐き、やれやれという風に、彼女は自分と一定の距離を置いているポッドに近付く。己の手を組み、背後でぶら下げながら、問いを投げる。頭を傾げる動きと、運ばれた風に合わせるように、髪はゆらりとなびかれる。その光景はまるで、古い絵画に閉じ込められた対象物<sup>対</sup>のようで、高い演算能力を有してるポッドさえ、即時の反応などできなかつた。

僅かに染めた頬、緩く上げられた口角、いかにもリラックスしてる<sup>と</sup>示すかのように緩められた眉と、ほんの少しのみ細められた目。周囲の環境と合わさり、ポッドの前に立つ彼女は、女神にさえ見えるほど、美しかった。

突如、視界に『エラー』というワードが飛び出し、ポッドは瞬時に問題となった部分を検索し、削除しようとシステムを働かせるが……

代わりに、己のデータベースの奥に隠した。これは、エラーではない、ウイルスなどでもない。今まで無視し続け、考えることもしなかった存在、アンドロイドとボツド誰もが一度は恋焦がれ、許可されない望まれない存在。

「肯定・すべてのものは一瞬で消え去る、収めることで初めて、明確実在の記録となる」

どうか、消えないで、消さないで。残って、残して。深く、奥深くまで。システムに抗ったポツドは、強く願う。

「それじゃ、ヨニは立派な写真家かあ…素敵な写真、一杯撮ってね？」  
後ろに組んでいた手を解き、ポツドへ向かって伸ばし、頭部であろうところに置き、機体に優しく触れる。至近距離の、アカネの悪戯っ子のような笑顔を目にして、またもや『カシヤリ』と音を発した。今回は、ため息も、抗議も、機嫌を損ねる彼女の声もない。返されたのは、やはり、彼女の笑み。

この時が、終わらなければいい。システムに違反した感情機能は、僅かのみ、動きを見せた。

### — 初めての出会い

「ごきげんよう、久しぶりの新鮮な空気のお味は、如何だったかな？」  
優雅とした、見知らぬ声が、耳に届く。後ろから聞こえた、人の声らしき音に反応し、振り返ると、彼女はいつの間にか近くまで接近してきた成人男性と、目が合ってしまった。銀色の長髪、印象に残る、血のような赤い瞳、知的なメガネに、白いシャツと黒いズボン。少々独特な結び方をしている黒いネクタイに目を奪われるも、アカネの目はじつと、音もなく現れた男を見つめる。

銀髪の彼は、奇妙なデザインが施された手袋をはめた右手を上げ、自分の胸の前に当てる。ペコリと、体を少し前へ傾け、笑みを浮かべながら目を細め、彼女の方に視線を定める。

「初めまして、私はアダム…君の、名前を伺っても？」

貴族の礼儀を身につけたかのような、そんな風貌を持った男だった。親切に、名前を教えてくれた彼に返事を返そうと、口を開きかけたが、言葉を出すよりも前に、ポツド042に阻止されてしまった。

素早く彼女の前に浮かび、男との間に壁を作るように、アカネを庇う。  
「警告：特別個体アダム、機械生命体の中でもっとも危険な存在。推奨：速やかに退避を」

「機械、生命体…？」

ポッドの後ろで疑問に思うように頭を傾げ、自分に訪れるかもしれない危機に、まったく気づいていない様子を見せた。純粹で、危険を知らぬ無垢な人間。知らない単語に反応する仕草は、本当になにも知らない、好奇心で満たされた子供のようだった。彼女はまだ知らない、目の前に立つ男と、彼女を庇ってるポッドが、対立してる立場にあることを。

その男こそ、地球を占拠し、人類を滅ぼしかねなかった敵の僕だと、アカネは知らない。

一触即発の雰囲気に含まれたこの場で、最初に動きを見せたのは、やはり、アカネだった。彼女はポッド042を落ち着かせるように、小さな腕部に触れ、いつもの微笑みを浮かべる。アダムと自称した男は、姿勢を維持したまま、彼女の笑みに惹かれたようにじつと、睨むように見つめる。

「大丈夫。私は、大丈夫だから…ね？ヨニ」

静かに、落ち着いた声が発せられる。だけど、不思議な響きも混ぜ合わされたかのように、従囚われいたくなる魔力が込められていた。彼女の声は柔らかく、聞く者に安心感を与える。短い間だったとはいえ、行動を共にしてきたアンドロイドとポッドたちが、何度も感じていたのだ。危機と対面してる今でも、彼女のマジックはとても効果的だ。2Bと9Sの命令さえも覆し、彼女の指令と、己の『名』を呼ばれた感情ヨロコビに従い、警戒態勢を解除する。後ろに下がる前に、彼女の手をそつと握り、不安を解ほぐすすような動作をした。

当のポッド042も、己が取った行動の意味を理解していない。ただ、こうでもしなければ、システム気が、狂いそうになる。

一連の会話、動き、流れるような触れ合いを、すべて目蓋の裏に収め、その場で待たされていたアダムは片方の口角を、さらに吊りあげる。彼の目に映る人類は、真っ白な紙、純白のキャンパスだ。色で汚

されるのを待つてる、まだ何も描かれてない空白の『絵画』そのものだ。ああ、面白い、興味深い！これが、これこそが！我ら機械生命体が追い求めた、人類！

抑えきれない奔流<sup>感情の高まり</sup>が、アダムの体内で駆け巡る。地球の唯一の生き残り、唯一の人類を前にして。

「初めまして。私はアカネ、霧雨アカネ。よろしくね、アダムさん」  
微笑みを保ち、男に歩み寄った彼女は右手を上げて、握手を求める。小さくて白い肌の手を見つめ、アダムは姿勢を整え、己の右手を差し出し、彼女の手に触れる。手袋越しに感じたのは、生ぬるい温度<sup>体温</sup>、柔らかな肉の感触に、彼女の体内に流れる血の動き。顔にはなんの感情も出してないが、初めて触れる人類に、人類の構造を間近で感じてる事に、ヨロコビを覚えてるのだ。アダムの口元が、知らずに歪んでいく。

双方の自己紹介も終わり、お互いの手を引き、予め考えた話題を繰り広げようとしたアダムは、口を開く。だが、アカネの動きによって阻止される。なぜなら、彼女は、両手を広げて、じつとアダムの瞳を見つめながら、微笑みを浮かべてるのだ。

「……なにを、している？」

困惑。今のアダムが感じてるのは紛れもなく、果てしない困惑だ。無垢で、純真な人類とは、頭では分かりきってる。人類のために働いてるアンドロイドならまだしも、敵である機械生命体、ましてや現在の総大将、ボスに等しい者に、ハグを求めはしないだろうか？調子を狂わされた彼は、メガネの位置を調整しながら断る言葉を口に、目の前の人類について考える。

聞く耳を持たない、とでも示すかのように、控えめに拒絶したアダムに、彼女はさらに近付く。一步、また一步と。恐れを知らない人類を前にして、いつも冷静沈着であろうアダムは、うろたえたように、一步だけ下がる。苦手意識を持ち始めた彼は、ますます彼女が分からなくなつた。他者を魅了する人類、それが彼女を連想させるワードだと、アダムの頭の中で結びついた方程式<sup>印象</sup>だ。誰に対しても積極的だとは、到底思わなかった。



自分よりも高いアダムの目の前まで近づき、自分の腕を彼の体に回し、背中を優しく撫でる。この時、アダムの両手は行き場を無くしたように、中途半端に上げられてる。暖かい体温、服越しに感じる柔らかい体、自分にかかる彼女の息。体感情報を受けただけで、正確な判断もつけられないまま、彼は、己に抱きついてるアカネの体に、己の腕を回す。

暖かくて、気持ちいい……これが、人間か？

弟とも違う、機械生命体とも違う、感じれるすべてが違っていた。解明できない魅力、言葉では言い表せない安心感、体の奥に生じる、未知なる感情。これは、なんだ？

知りたい、知りたい、知りたい、知りたい、知りたい、シリタイ。彼女に隠された秘密が、知りたい。このまま、無防備な彼女を、攫っていこうか？

「だめだよ？」

発せられた彼女の声に、心臓が縮み上がった感覚に襲われる。口に出していないはずの思考を、なぜ彼女は分かったのだ？ますます謎を増やす彼女に、までもや興味が湧いてしまう。未だ自分の腕の中に閉じ込められてる彼女は、頭を動かし、アダムを見上げる。黒曜石の瞳が、眩い血色を反射する。

「2Bさんと9Sさんも、もうすぐこっちにくるから。また会った時に、お話しよ？」

気付いた時には、すでに頷き、彼女を降ろしていた。この場で、アンドロイドと戦闘を繰り返すのも気が引けるので、大人しく姿を消す事を決めたのだった。離れる際に、彼女から「バイバイ、またどこかで会おうね」と言われたのは、予想外過ぎた。

「……これが、私が追い求めた人間、か？」

胸のざわつきが収まらない特別個体は、遠くにいる彼女をじっと凝視した。

― 甘えて、甘えさせて

「疑問：なぜ機械生命体と接触した」

「優しそうな人だったから、少しくらい話してもいいかなって思って」  
もうすぐ到着するであろう2Bと9Sを待ってる、僅かな時間を有効利用し、アダムとの接触を阻止しようと試みたポッド042は、ずっと抱えていた疑問を彼女に投げる。少々困ったように目を瞑り、考える素振りを見せたアカネは、結論を発表する。誰に対しても平等に接したい、とでも言ってるような返答に、普段しない『頭を抱える』という動作を実行したポッド042であった。

アカネ、もしかしてあなたには危機感というものが無いのか？堪らず心配になってしまうポッドは、ため息を漏らしたくなった。

初めての接触を経てから、彼女の優<sup>無防備</sup>すぎる性格、言動には気づいていたのだが、まさか敵にも変わらない態度を取るとは、予想の範囲を越えていた。もしも、あのアダムがその場で彼女を研<sup>解剖</sup>究し、調べ始めたら……それこそ、自分らにとって最大の損失であり、身も心も持たなくなる結果<sup>悲劇</sup>に繋がる。たとえ心など存在しえるはずがない、機械だとしても。

生きたまま殺され、肉体を素手<sup>爪</sup>で引き裂かれ、血肉が朦朧とし、虚ろな瞳と向き合う場面になったとしたら……想像もしたくない光景が、演算<sup>頭をよぎる</sup>される。彼女が無事で、本当に、本当に良かったと、実感する。

「…心配かけてごめんなさい、ヨニ」

アカネのほうに振り向くと、酷く悲しそうな表情を浮かべる彼女が視界に入った。不安そうに指を弄る彼女は、申し訳ない雰囲気を漂わせて、俯いたまま、上目遣いでポッド042を見上げる。初めて見せる顔に、ポッドは、慌ててしまう。表に出すにもいかず、ただ彼女の近くまで浮いていく。

「謝罪は不要。アカネが無事なら、問題ない」

珍しく素直な態度を取ったが、実はポッド自身も驚きを隠せない。<sup>2Bと9S</sup>

主に対しても、それほど率直な態度を取ったことがなく、むしろ、少々冷やかな態度を取ってしまうのが癖だ。だけど、悲しむ彼女を前にすると、癖も、システムも、プライドも、なにもかも構わなくなってしまう。原因は、分からない。辿りつく回答だとすれば、彼女が、唯

一無二の人間だから。

再び笑顔を咲いてくれたアカネをカメラに収めたら、遠くから素早い足音が響いてきた。聞き覚えのある、規則正しいリズム。間違いない、長い時を共にした持ち主たちのものだ。ぐるりと振り返るポッド042を見て、彼女も釣られてそちらに目を向く。するとなぜかポッドは彼女の背後に回りこみ、二つの腕部に加え、機体の中に収められた二つの腕部で彼女の背中に当たった。パチパチと目を瞬かせるアカネに、嫌な予感をさせる言葉が届く。

「緩衝システム起動、衝撃に備えよ」

背中からしっかりと粘着された感触が伝わった直後、聞き覚えのある少年の大声が鳴り響く。

「アカネさーんッ!!」

「あ、9Sさっ…」

走ってきた9Sはなにもかも構わず、彼女の懐に吸引されたかのように、抱きついた。彼女の両脇の下に腕を差し入れ、背中に回す。僅かに体が傾け、ぎゅつと抱きしめられた彼女は驚いたが、それでも9Sの動きに応じて、腕を回す。首辺りに顔を埋める彼の頭を撫で、ずっと自分を心配したのであろう彼を慰める。あとから到着した2Bはこの光景を見て、唇を噛み締める姿を晒した。体の奥に潜む、静かな炎が燃え盛っているような感覚を覚えた。私にも、そうしてくれないの？

刺さるような視線を感じ、腕の中にいる9Sの頭を撫でながら、突っ立ってる2Bに目を向けた。2Bの顔を見て、いつもの笑みを浮かべて、ゆっくりと唇を動かす。

「おいで、2B」

「っ…!」

ドキッと、心ブラックボックスが鼓動を刻んだ。彼女が、呼んでくれた。醜い炎感情に包まれそうになった自分を、彼女は、優しく呼んでくれた。美しいメロディーを奏でるような声で、敬称直なしで呼んでくれた。

胸の高鳴りが収まらない、眉が寄せてしまおう、涙が流れそうになる。

ああ、あなたはなんて、優しい。こんな、こんな私にも……あなたは、呼んでくれるの？

ふらり、ふらりとおぼつかない足取りで、彼女の側まで寄っていく。見計らったように、そつと離れていく9Sは満足したかのように、背後に手を組み合わせる。満面の笑顔で。ようやく近寄ってきた2Bを抱きしめ、あやすように「よしよし」と声をかける。大きな子供みたいに、彼女に縋りつき、離れたくないというように、ぎゅつと抱きしめる。

「アカネ……」

小さく、彼女の名前を呟く。寂しそうに、甘えるように囁かれた声を耳にし、自分よりも少し高い2Bのうなじに手を入れ、さらさらとした髪に触れ、頭をなでる。ずっと抱きついたらまま、離れようもしない2Bを抱きしめ、アカネはずつと「大丈夫、大丈夫だよ」と自分を抱きしめてる彼女を慰める。横で見ている9Sも、長時間抱き合ってる二人を見て、少しだけ、羨ましそうな目付きをしていた。

こんなに積極的な2Bは珍しくて見ていたけれど……愛称はともかく、僕もアカネさんに直接名前と呼んでほしいな。

「……9S、おいでー」

知らぬ間に唇を尖らせた9Sを目の当たりにしたアカネは、彼の考えてる事に気づいたのか、さつそく名前で呼び、自分の元へおいでと誘う。そこで、ぼーつと数秒間静止した9Sは、パーと咲き誇った笑顔で、2Bと彼女をまとめて抱きついていった。

穏やかな光景を、二つのポッドは静かにカメラを回し、己の主と、優しすぎる彼女を記録に収めた。この映像が、ポッドたちの独断で、のちに司令官の元へ送られることを、アンドロイドは、知る由もなかった。

おまけ

— 司令官の動揺

先刻、地球の調査を行っていた2Bと9Sのポッドたちからある映

像が届けられた。付録してあるメッセージには『単独での確認を推薦』という文字が記されていた。丁度休憩しようと思ったので、これを機に、自室でチェックしてもいいだろう。

数分後、私は、単独で確認しなければならぬ理由を知った。映し出された映像には、普段見かけることなく、見ることが不可能に近い、<sup>甘え</sup>ありえない姿をした2Bと9Sだ。<sup>アカネ</sup>人類と何らかの会話を経て、二人は人類に抱き付き、まるでヒトのよう<sup>情</sup>になっていた。あれでは、我々ヨルハ部隊の規則を、破つてると同然。そうなのだが……なぜだろうか、私の中で、何かが湧き上がってくるのだ。

「…アカ、ネ…？」

人間がよく使う名称、人間によく使われてる名前。なのに、懐かしい響きだ。遠い昔に、何度も呼んでいた名、<sup>記憶領域</sup>頭の奥深くに潜んだ名。試しに、システムの中に、潜入する。

『アクセス不能、セキュリティ解除を要求』

『アクセス不能、セキュリティ解除を要求』

『アクセス不能、セキュリティ解除を要求』

『アクセス不能、セキュリティ解除………』

『アクセス不能、セキュリティ………』

『アクセス不能………』

『アクセス不能、当領域の一時的閉鎖を確認』

「……一体、なんなのだ」

何度もアクセスを試みても、最高位の権限を持つてはるはずの私も、セキュリティを解除できなかつた。嚴重なロツクがかけられた<sup>記憶</sup>データは、なにか、重要な事項が含まれてるに違いない。<sup>ヨルハ部隊</sup>私たちにまつわる、大事な事が、秘められてる予感がする。なのに、解明できない。

止まった映像に映る人類の顔を見つめ、なにかを思い出すきっかけを与えてくれた彼女を、見つめる。

「あなたは一体、何者だ……？」

自室のモニターを見つめる<sup>司令官</sup>彼女は、人知れずに呟く。

## 人形と人類は依頼を遂行する

— あなたの<sup>2</sup>こと<sup>B</sup> 杞憂

「取り乱して、ごめん…」

「二度、メンテナンスする必要があるみたいですよ…」

しばらく彼女<sup>アカネ</sup>にくっ付いていた二人は、あからさまに落ち込んでいる。ヨルハ部隊の規則、『感情の所有を禁じる』という項目を、違反してしまったことに対してか、それとも自分らしからぬ行動に出たことに対してなのか。理由はどうであれ、落ち込んだわりには、心なしか非常に満足し、達成感に満ちた雰囲気を漂わせてる。

そんな一変した心境になった彼らは、ようやく当初<sup>依</sup>の目的<sup>頼</sup>である、指定された場所へ向かえるのだった。商業施設跡、それを越えた先にある地域<sup>エリア</sup>こそ、2Bたちの目的地なのだ。色々あったが、今度こそ順調に依頼をこなせそうさ。橋の上で小走りして渡っていく2Bと9Sのあとについていき、アカネも落ちないようになり、しっかりと足取りで歩いていく。よほど丈夫に作られているようで、ギシギシと音が鳴るが、つり橋が切れる予兆はまったくなかった。

そして、橋を渡ってる間、アンドロイド<sup>人</sup>はずっと彼女を気にかけていたのだ。何歩か進んだら、ちらりと、ついてくる彼女の状態を確認する。向こうの陸地につくまで、何度も何度も繰り返し返された。頻？な確認、無駄になるかもしれない動作、己でも分かりきってるが、どうも、放っておけない。

「推測：心配性」

「…私が？」

「肯定」

商業施設内に辿りついた頃、突然投げられたポッド042の推測に、思わず頭を傾げて疑問に思う2Bであった。ただ、彼女が足を滑らせて、落ちてしまわないか気になっただけ。単に彼女が怪我しないように、確認しただけ。これが、心配性だということなのか？ぐるぐると考えが頭の中で処理され、結論を出せないまま目的地についてしまうのがオチだった。だが、もしかしたら、ポッドの推測は間違っていない

かもしれない。

アカネに関わると、なにもかも気になって仕方がないのだから。短髪のアンドロイドは、静かに結論を下し、依頼に専念する事にした。

— 生きる意味  
行動原理

商業施設跡を越えた先に、アネモネが言っていた、キャンプを設置したいという地点に到着。アカネの安全のためにも、一度ポッドたちに敵の位置をスキャンしてもらったが：予想通り、近くに多数の機械生命体が身を潜めていた。

アカネが目覚ますまで、パスカルが言っていた、ネットワークから切り離された別の集団機械生命体が森林地帯にいる、という情報の確認に成功した。この前も、少しだけこのエリアでうろついていたが、それらしき機械生命体を何体か発見している。奇妙な鎧を身に着けているのが、なによりの特徴だ。

身を隠してる機械生命体も、きっと森のヤツらだろう。前に交戦した時、国を守るとか、国王を守るとか、遙か昔の人類の真似事をするとか聞こえない発言ばかり。人類の文明や歴史を破壊した、エイリアンの手下でしかない機械のくせに、なにをふざけた事を。考えれば考えるほど、怒りがこみ上げてくる。

「2B、気持ちは分かりますけど…ちよつと、抑えたほうが…」  
「…！悪い、気がつかなかった」

控えめに2Bの袖を引っ張り、アカネに気づかれない程度の音量で呟く9Sの話聞き、一瞬で正気に戻り、慌てて謝った。この気配を、彼女に気づかれるわけにはいかない。どこまでも純真で、一点の曇りもない彼女を、怯えさせたくない。ヨルハ機体でも、比較的的感情豊かな9Sもそれを考慮して、持ち前の気軽さを有効利用し、出来る限り、アカネを厄介恐な感情れから遠ざけていた。なのに、自分はヤツらへの怒りを向けるだけで、アカネのことを考えていなかった。

アカネ  
人類を守るに相応しいとは思えない、あるまじき行為だ。

ヨルハ部隊の規則、感情を禁ずる規則は、もしかしたら、本当に正しいのかもしれない。余計感なモノ情に振り回されるより、冷静に状況を

分析した方が、よほど彼女を守れる。だけど、こう考えてもおかしくはない。時には、9Sのように感情的になり、彼女との距離を縮めることで、やがて役目<sup>アカネを守る</sup>を果たせる結果に至る。

前者が正しいのか、それとも後者こそ正解か、2Bには分からなかった。今は、考えても仕方ない。まずは、目の前にいる問題を解決しよう。それが、当初の目的を果たそうとしてる2Bの考えだった。

「今から戦闘に入る…アカネは、ここで待機して」

自分や9Sと一緒にしやがみ、偵察に付き合ってくれた彼女の両手を、包み込むように、祈るような形で握った。壊さないように、割れ物を扱うような、極めて軽い力で握る。今の2Bにとっての、一種の安全装置に等しい。以前ならば難なくこなせる任務や依頼でも、アカネと短い同行を経て以来、彼女の安全を確保せねば、胸のざわめきが収まらない。

特に、彼女と再会するまでの間なんて、嫌な想像ばかり演算され、稼働<sup>生きている</sup>してる気がしなかった。

徐々に変化を見せる2Bを目の当たりに、隣で見っていた9Sは安心したように、笑みを零す。アカネのおかげで、今まで思いつめていた2Bもようやく、生きる目的を得たようだ。長期に渡る地上での活動で、二人は様々な体験をしてきた。エイリアンを滅ぼし、機械生命体を壊し、人類に栄光をもたらすアンドロイド。それは間違いなく、自分たちのことを示してる。

人類、人間、ヒトのために奔走してる僕らは、あの<sup>月面人類</sup>の人たちと会う機会なんて、一度もなかった。なにも考えず、なにも気にせず、ただただ月面で命令を下す、あの人たちの指令に従うだけ。司令官経由で届いた命令に従い、地上<sup>地球</sup>というあの人たちの星<sup>故郷</sup>に降り立ち、機械生命体と戦い、特別個体と出会い、滅ぼされたエイリアンを発見し、現在に至る。

そしてもっとも奇妙な出来事は、あの<sup>アカネ</sup>との出会い。月面にいるはずの、あの人たちと同じ<sup>違</sup>存在。あなたはまるで、月面から降りてきたのではなく、最初から、ここ<sup>地上</sup>にいるかのようにだった。実際、あなたは本当に地上で見つかったから、間違っではないけど。それでも、あ



なたと出会ったことが、嬉しかった。僕らの存在意義を、あなたは与えてくれた。僕らの意味を、あなたは証明してくれた。

だから、あなたの命は、僕らで：僕と2Bが、守ってみせる。人類の栄光のために。

「うん、分かった」

「アカネさん、役に立つかは分かりませんが…これを」

返事を返したアカネに頷き、2Bは握り締めた手を戻した直後、横にいた9Sはポッド153に目を配り、とあるものを彼女に渡してもらった。長く硬いそれは、アカネにとつて非常に見慣れた物体だった。人間ならば、誰も見た事ある物、しかし実際に手に取るのは少数のみで、職業関連でなければ持たない物。それを受け取り、予想外の重さに驚く。

「鉄パイプって、やっぱり重いな…」

「僕たちが片付けに専念してる間、あなたの身に危険が訪れるかもしれませんので、いざという時は役に立つはずですよ」

そう言つて、9Sは自分の手を彼女に重ね、彼女がしっかりと鉄パイプを握れるように、導く。やや分厚い手袋越しに、少しだけ冷えてしまい、しかし暖かさが残った手に触れる。そう、これが、ヒトの温もり。僕たちを包み、僕たちが守るべき暖かさ。だから、どうか、あなたに被害が及ばないように、傷つかないように、握り締めて欲しい。あなたの身を守る、ささやかな希望を。

ちゃんと鉄パイプを手にしたのを確認し、彼女に微笑みを向けたあと、2Bと共に立ち上がり、胸の前に手を置き、ヨルハ部隊の言葉を口にする。

「人類に栄光あれ！」

本当は、あなたのための栄光と、言いたかった。けど、自分達を奮い立たせるために、この言葉を口にするほうが、より効果的だ。自分達は、ヨルハ部隊なのだから。

ああ、アカネは、なにを言い返すだろう。戸惑う？頭を傾げる？それとも、いつものように……

「いつてらっしやい、2B、9S」

穏やかな口調で囁き、微笑みかける。二人の想像通り、彼女は、自分達を奮い立たせるマジック笑顔を見せてくれた。そう、これは、アカネにしかできないこと。アカネだからこそ、できることなのだ。二人2Bと9Sをより奮い立たせる、アカネだけの力。

体に染みる信頼、体の奥に沁みこむ浸透する激情を動力に変え、アンドロイドは駆け出す。

— 依頼遂行

「んー……丸いね」

破壊され、地面に散らばる機械生命体のパーツの一つ、丸い頭部を見つめ、アカネはしゃがんでそれを指で突いた。ちよん、ちよん、と数回軽く突く。やけに冷たくて丸い頭部を食い入るように弄り、面白そうに小さく笑っていた。持ち上げようと、鉄パイプを隣に置き、両手を差し込んでみたものの、自分では到底持ち上げれない重さだったらしい。拗ねたように唇を尖らせ、頬を膨らます姿を、2Bと9Sに見られたら、また支障ときめいてしまうが出るだろう。幸い、彼らは戦闘に集中しており、気づかずにいる。

ならば、なぜアカネは機械生命体の残骸を調べてるのか？理由は至って簡単、彼女は退屈していたからだ。果たすべき使命を持つて二人と違い、彼女には明確な目的を持つておらず、ただ、外の景色を見るためについてきただけなのだ。崩壊した地上、荒れ果てた世界の一部、かつての自分も暮らしていた居場所。どれだけの月日が過ぎたのも知らない、世界の事情も知らない、これからの行く末さえも知らない。

果たしてそれは自分の行く末か、世界の行く末か、はたまた地上故郷に降り立つ全ての者の行く末を知るために、今回の行動散歩を起こしたのか。誰も、知らない。それを考えてるアカネ自身も、答えを見つけていない。

「……キミも、そう思うでしょう？」

静かに転がる頭部に触れ、小さく、呟く。機能停止死してる機械生命体に、答えを求めてるわけではない、ただ、呟いてみただけだ。意味

はない、意味なんてない、意味は含まれてない。体の奥に潜ませるよ  
り、言葉に出したほうが、楽になるだけだ。これは、自分の身勝手な  
行動。

しゃがみ続けるヒトは、なにかを封じ込むように、目を細めながら、  
丸い機械を撫でていた。

— 依頼完了

そつと遠くにいる2Bと9Sに視線を向けると、すでに周囲を確認  
する彼らの姿が目に入った。どうやら身を潜んでいた機械生命体の  
破壊を終え、依頼の大部分を完了させたようだった。それに気づいた  
アカネは立ち上がり、パンパシと自分の服に付いたであろう埃を叩き  
落し、置いていた鉄パイプを拾い上げる。それを杖代わりにして、地  
面に刺し、残ったほうの手を上げて左右に振る。

「アカネさーん、終わりましたー!」

彼女の動きを見た9Sは応えるように、晴々とした笑顔で両手を頭  
の上にかざして振りながら、大きな声で彼女に話しかける。丁度周囲  
の確認を終えた2Bは、はしゃいでる9Sを見て、やれやれという風  
に笑みを零した。そこで、2Bはなにかを話し、9Sはハツとしたよ  
うに、その後すぐに頷き、一緒にアカネの元へ帰った。

はて、一体なにを話していただろうか?と不思議に思ったアカネは  
腕を下げて、人差し指を唇に当て、頭を傾げた。聞き出そうか?黙っ  
ていようか?帰ってから聞こうか?やはり聞かずにいようか?

……よし、聞こう。

「なにを話していたの?」

唇に当てた指を維持し、口角を上げて、いつもの調子で聞いてみた。  
また新しい動作を確認できた二人は、少しだけ驚いたように数秒の沈  
黙に陥ってしまう。だがそれもすぐに回復し、大した事ないですよ、  
と9Sがさききに答える。ここでアカネは、困ったように眉尻を落す。  
彼女の変化に気付き、孤立させたのかと誤解されると思い、慌てて訂  
正する言葉を考える。だが、2Bはさききを越して答えた。

「早くあなたのところに帰ろうって、話しただけ」

「そう！だから、大した事じゃないですよ！ね、2B?」

「うん、そうだ」

なんだ、そうだったのか！と再び笑顔に戻った彼女を見て、胸を撫で下ろす。なぜ慌てていたのかは、よく分からない。ただ、彼女に誤解でもされて、悲しませるようなことになるのが嫌だった。知りたがりの彼女は、本当に、自分たちを慌てさせる天才だ。

それよりも、長い移動をしてきた彼女に、一刻も早く休ませてあげようと思い、早急にレジスタンスキャンプへ戻ろうと考えた。

アカネは自分達と違い、生身の人間で、体力にも限界がある。人間には、個人によってそれぞれの限界を持つてると資料<sup>データ</sup>で見た事がある。彼女は体力が多いほうか、それとも少ないほうだろうか。あまりよく分からないが、ともかく、休ませたいという思いは、確かだ。

「依頼もこなしたから、レジスタンスキャンプに戻って報告しましよ  
うー！」

「了解。アカネ、行こう」

「うん！あ、この鉄パイプはどうする?」

「レジスタンスキャンプに戻るまで、持っていたほうがいい、せめても  
の保険だ」

「そうですね、ヤツらがまた襲ってくるかもしれないから」

「二人がそう言うなら、持ったほうがいいね！」

会話を交わす三人はゆっくりとした足取りで、来た道に戻り、森林地帯の入り口から離れた。初めて人類と共にこなした依頼、2Bと9Sはこの記録<sup>記憶</sup>を、己のデータベースの最奥に保管した。そして、ずっと見ていたポッドたちも、抜かりなく、映像に収めた。

## 人類と特別個体の片割れ

— 真実は未だ遠く

森林地帯にキャンプを設置した、というアネモネの依頼を完遂したのち、2Bと9Sは本来の任務に戻った。アネモネの依頼は、二人が地上に降り立った主な目的ではなく、一種の通過点サックエストに近い。アカネを連れて行けるのも、それが原因だ。だが確実に危険が伴う任メイストリー務に、彼女に同行させるわけにはいかない。きつとバンカーにいる司令官も反対し、許可など下さない。

そして現在、アカネは目覚めた直後と同じく、レジスタンスキャンプで生活している。ぼーっと空の上に漂う白い雲を眺め、キャンプの小さな広場で一人、うろうろしていた。たまに出入りするレジスタンスと会話を交わし、手を振ったりとしてるが、本当は、とてつもなく退屈していた。

それはさておき閑話休題、まずは自分に関しての重要情報について、調べてみよう。ずっと同じ場所でうろうろしてたヒト彼女は、ぐるりと後ろに回り、キャンプ内の唯一の部屋へ向かっていく。そこは、2Bと9Sに与えられた、地上での安らぎの場。

彼女の発見後に、所持していた所持品はすべて、2Bと9Sについて行く前にキャンプに置いていた。その所持品の中、彼女は自分が持っていたであろうケータイが入っていた。試しに起動してみても、圏外と表示され、挙句はバッテリーが切れ、ただのガラクタと化してしまった。他にも読みかけであろう小説、電子マネーのカードと、身分証明等のカードが入った革製の財布。どれも自分が持っていた物、どれも自分の存在を証明する物、なのに、自分の興味を引き出す物はいなかった。

おかしいな、どれもこれも己の所有物なはずで、見覚えもあるのに、親近感がまったく湧かないなんて。アカネは、淡々とした思いを浮かべ、財布に手を伸ばした。

「……読めない」

片手に財布、片手に運転免許というポーズ、視線は言われるまで

もなく右手にある運転免許だが、長すぎる月日が経った影響か、文字がかすれてまともには読めない。自分の顔との距離を縮めて、加えて目を細め、じつと見つめる。呻りにも似た悩ましい声を鳴らし、努力して文字を読み取るうとしたが、無駄だったらしく、諦めて財布に戻した。代わりに、謎のカードを発見した。財布に敷かれていたように、視界に映らなかつたらしい。

気になった彼女は財布を置いて、改めてそのカードを手取る。よほどいい素材で出来てるのか、生まれた年月はかすれてるだけで、年齢とカードの名前が刻まれてるのが分かる。

「氏名、霧雨緋、年齢21…遺伝子存続計画、番号001…？」

刻まれたのは、紛れもなく自分の名前と自分の年齢そのものだ。だけど、遺伝子存続計画とは、一体なんの事を示してるのか？番号まで書かれているが、それは一体なんの目的で製造され、分配されたカードなのか、さっぱり分からない。

カードを裏返し、かすれた年分を確認する。そこに書かれた年は、2032年。

「……2032年、存続計画……」

カードを持ったまま腕を抱え、目蓋を固く閉じて、必死でなにかを思い出そうと頭を回転させる。それも数秒しか維持されなかつたらしく、彼女は「放っておけば思い出す！」と非常識な結論を下し、散らばった所有物を片付けて、部屋を後にした。

## ― 白と黄金

ささやかな自分探しも終え、退屈極まりない彼女はまたもや、キャンプでうろうろしていた。道具屋の商品を眺めたり、キャンプ内に鎮座するアクセスポイントを調べてみたり、広場に咲く花を眺めたり、空に浮かぶ雲を眺めたり。

だが、やはり退屈だ。ずっと行動を共にしてくれた、あの二人は、任務で森の国に身を置く事になり、短期間でこちらに戻ってくるのは不可能らしい。彼女がぼーっと、なにをしようかと考えてる時、一人のレジスタンスは彼女に話しかけ、渡したいものがあると言われた。

「これを君に預けるようにと、バンカーから指示があった」

「…ああ！2Bたちが言っていた、司令部のことか！」

一瞬だけなにを言ってるか理解できなかったが、すぐに思い出して合掌し、パーーと晴れた笑顔を浮かべて喜ぶ姿を見せる彼女だった。思わず苦笑いを零したレジスタンスは頷き、手に持っていた物体を起動させた。

箱のような形、白い塗装が施されたそれは、2Bと9Sの側に浮いていたあの二<sup>042と153</sup>人と同じポッドだった。驚く暇もなく、静かに起動したポッドは、アカネの目前まで浮遊し、機械的な音声が流れ出す。「当機は随行支援ユニット、ポッド255。本日付けで、対象、霧雨アカネのサポート、及び護衛を行うことになった」

女性の音声が流れ、白と僅かな黄金の塗装が特徴としたポッドは、じつと、目の前にいる彼女の反応を待っていた。口をポカンと開き、合掌を維持したまま驚いて目を見開く彼女は、すぐさまキラキラとした目になり、これ以上ない喜びを表すように、頬まで染めていた。彼女の大きすぎる反応を目の当たりにしたレジスタンスは、固まった。そしてポッドは、静かに浮遊していた。

それぞれの反応を見せる最中、アカネはポッド255の手を、自分の両手で優しく握り、目を細めて、花を咲かせるような眩しい笑顔をしていた。

「これからよろしくね！ニーファイア！」

「こちらこそ、よろしく、アカネ」

早速付けられた愛称に、ポッド255は、冷静に対応した。ポッド042や153と同じ反応を出すかと思えば、非常に落ち着いた対処だった。例の二機から、彼女に関する基礎情報<sup>映像</sup>を基づいて、新たなプログラムを追加したのか。どちらにせよ、ニーファイアと名付けられたポッド255は、彼女と接触して、初めて故障<sup>固まらなかつた</sup>しなかつた機体だ。

しかし、その声と塗装は、まるで何者かをベースとして作られたかのような感覚だった。ずっと驚いてばかりいるレジスタンスは、考えずにはいられなかった。

― 共に徘徊散策しよう

新しい仲間と知り合ったアカネは、退屈から逃れるために、ポッド255と共にレジスタンスキャンプを出て、廃墟都市をうろつくことに決めた。それを言い出したアカネは、レジスタンスたちに心配され、散々注意事項を聞かされてしまう。出かける際に、最近彼女が持ち帰った鉄パイプまで持たされてしまう事態に。ポッドがいるおかげで、持たずに背中で浮かせることができ、体力を消耗せずいられてほっとしたアカネだが、面倒と思っただけ、キャンプを出て早々に置いてしまった。

「分からなくてもないけど…少し過剰だと思うよ」

「否定・アカネは重要人物であり、必要な態度と思われる。追加：あなたに居なくなると、悲しむ者が沢山いる」

「大げさだよ？でも…ニーファイアがいるから、心配ないでしょ？」  
「肯定」

考えを口にする彼女に対して、論理的思考によって反論の言葉を発し、さらに心的要素による影響を述べるポッド255は、やはり他の個体とは一味違っていた。彼女に合わせて作られたポッドゆえか、円滑なコミュニケーションが図れる。それだけじゃない、アカネが口にした『信頼』に与える言葉を、戸惑うことなく認める点を見て、よほど改良された機種なのだろうと考えられる。

持ち主に忠実で、持ち主の言動と意見を最優先とする、心強いサポート役。それは間違いなく、ポッド255に相応しい形容だろう。

そんな一人彼女と一機ニーファイアは、広大な廃墟都市を廻っていた。二度目になる景色、まだまだ新鮮に見える退廃した文明の跡、人類のかつての繁栄が蹂躪された、美しくも残酷に映る風景。今や、機械の楽園と化している地上の一部。

「動物は、残ってるのにな…」

遠くに歩いてるイノシシやシカを眺め、彼女は非常にゆったりとした足取りで徘徊していた。高さが異なる建物ビルの隙間を潜り、僅かに残された平原を歩み、陥落した大穴を眺めるために、崖の付近を歩き、まだ身記憶に染めてない土地を、自らの足で覚えようとしていた。懐かし



い景色などない、見知った景色もない。なにもかも記憶に刻残まれてない景色を眺め、黒い瞳はただただ美しくも寂しい大地を映墟してるのみだった。

不思議なことに、機械生命体と遭遇しても、彼らは襲ってこなかった。まるで自分の動きを観察し、目を向けるだけで、接近してくる気配もなく、攻撃する予兆もない。アカネが視界から消えるまで、立ち止まって、睨むように見つめてくるだけだった。ポッド255から破壊の推薦をされたが、彼女は嫌がるように、何度も断り、何回も素通りしてきた。

以前遭遇した、特別個体『アダム』の命令によるものか、それとも、元々機械生命体はアンドロイドと戦うためだけに造られた存在だからなのか、アカネは知る由などなかった。それでも、彼女から見た機械生命体たちは、悪い存在敵とは思えなかった。

—— 初対面にして攫われゆく

大穴の付近にある、比較的の高い建物に入ろうとしたアカネを、ポッド255は咄嗟に阻止した。パチパチと瞬きを繰り返し、彼女は戸惑いを覚えながらも「どうしたの?」と問いかける。

「警告：特別個体『イヴ』を探知、早急な退避を推薦する」

「…あれ? アダムとイヴって、旧約聖書の人物だっけ?」

「肯定：特別個体『アダム』および『イヴ』の名称の由来は旧約聖書『創世記』に記述された、最初の人類である。警告：特別個体『イヴ』の接近を確認、退避の猶予を喪失、アカネの防衛に入る」

彼女の突然の悟りに答え、貴重な退避時間を逃してしまったが、焦ることなく、素早くアカネの前まで浮き、防衛体制を取った。同時に、ビルの開放式の入り口から、人影が近づく。陰から、日の光に照らされた位置まで移動した途端、足を止めた。アカネは、地面に向けた瞳を、俯いた顔を、ゆっくりと、上へと移動する。

太陽によって、眩しく光る癖のある銀色の短髪。アダムと同じく血色の瞳がガラガラと光り、野生的な目付きで彼女を見下ろしていた。銀髪の彼は服を着ておらず、鍛えられた上半身が露出される。奇

妙な黒い模様の刺青が刻まれた左腕は下げられ、アダムと同じデザインをした短い手袋も嵌められていた。まるで装甲のような設計をした革製のズボンに加え、それに似合った雰囲気をしたブーツを履いていた。

アダムとは、また別段と違った気配を漂わせる人物を目の当たりにして、彼女は好奇心を擽られたかのように、微笑みを浮かべる。対照的に、イヴは面白くなさそうに、眉間にシワを寄せ、血のような瞳で彼女を見下ろし続ける。

「お前が、にいちやんが言ってた『アカネ』か？ やっぱちっせーな、お前」

開口一番で、極まりなく失礼な発言に対し、果たしてアカネはどんな反応を返すだろうか？ やや感情的怒りそうになったポッド255は、イヴを射撃する衝動を抑え、後ろにいるアカネの動きを待っていた。

だが、悪口に似たことを言われたアカネは、怒るところか、ますます嬉しそうに微笑んでいたのだ。

「初めまして！ 私は霧雨アカネ、よろしくね！ イヴさん！」

悪口をスルーしたかのように、彼女はお構いなしに自己紹介をして、小走りしてイヴの前まで接近した。そして2Bや9S、アダムと初対面の時にしたかのように、右手を差し出して握手を求め。思わぬ急接近に、ずっと涼しい顔をしていたイヴは、眉を上げて、じつと、アカネの顔を見つめていた。己とは異なり、真つ黒な髪と真つ黒な瞳、柔らかかそうに見える小さな手に視線を移し、右手が勝手に上げられていく。自分の意志と反して動き出すのを見て、イヴは軽く困惑していた。

「…まじでちっせーな。それと、柔らかい…ずっと触っていたいな」

それは果たして手に触れた感想か、それともアカネ自身の雰囲気を書いてるだけか。ポッド255による考察だと、前者の確率が高いと思われる。根拠は、イヴの幼そうな言葉遣い。子供じみた言葉に加え、興味があるもの以外に冷ややかな態度を取る行動パターンは、子供そのものに近い。

アンドロイドに対して明確な悪意を向けるイヴが、微かではある

けど、自分のシステムと反した動きをさせたアカネに、少なからず興味を持ち始めた。兄がずっと気にかけて、ずっと対面を望んでいた人類、他者を魅了する者。

どうして、にいちゃんがそんなやつに深い興味を持ったのか、知りたい。そのために、わざわざこんな場所まで出迎えているのだから。

「なあ、お前」

「なに？」

「この前、にいちゃんにしたあれ…誰にでもやるのか？体を引き寄せ、あれだ」

「ああ！ハグのこと？もつと仲良くなりたいたって意味を込めてするものだから…誰彼構わずやるわけじゃないよ？たとえば、悪い人とか」

握手を維持した状態で投げ出されたイヴの質問に、彼女はただ頭を傾げ、優しい声色で答える。最後に目蓋を閉じて、ニコツという微笑みを見せる。もつと仲良くなりたい、それは即ち、彼女が自分で選択し、己が善とみなす者のみに対して取る動き。もし言葉の意味を間違っていないければ、アカネは目の前にいるイヴを、敵として意識してなく、悪と見てるわけでもない。

彼女の中では、イヴは、善の者だ。実に単純明快で、分かりやすすぎる思考。

イヴは片方の口角を上げ、歯を露出させながら、ニヤリとまるでサメのような笑みを浮かんだ。こいつ、面白いな！よわっちい人間だと思っただけど、案外面白そうなのやつじゃないか！それが、長髪の彼と似ても似つかない性格をした、イヴの考えだった。

知りたい、もつと知りたい、にいちゃんが書物の知識を欲しがるように、もつともつと知りたい！ああ、にいちゃんはやっぱりいつも正しい、ぼくをここに来させたのも、やっぱり正しかった！やっぱり、にいちゃんはすごいよ！

激動するイヴの内側に気づいたのか、アカネは苦笑いを零し、ずっと握り締められていた手を引き戻して、両手を広げてイヴの体に回す。体を密着させ、そつと目を閉じて思考に溺れる。これで、一体

何回目の抱擁になるだろうか。2Bと9Sで二回、アダムと遭遇して三回目、そのあと駆け寄ってきた9Sと四回目、直後に2Bと……ああ、これで七回目になるのか。複雑な記憶の断片がアカネの頭の中で飛び交う最中、イヴはすでにぎゅっと彼女を抱きしめ返し、やや軽い彼女を少しだけ持ち上げていた。地面から離れた両足は、重力に従ってぶら下がった状態になり、気づいたアカネは一瞬だけびっくりした様子を見せるが、すぐさま満面の笑顔になった。

「イヴさんって、力持ちだね！」

まるで子供のようで、天真爛漫な笑顔を間近で見たイヴは、それに負けないほどの力を自慢するかのようになり、自分にかかる重力を両足に集中し、抱きしめたアカネの体を軽々しく上空に振り上げた。突然の動きに、ずつと後ろで待機していたポッド255は反応が遅れ、気付いた時に、アカネはすでに空中に浮いていた。

またもや重力に従って、彼女の体が下へと墜落して行き、地面と衝突する……かと思えば、下で両腕を伸ばしたイヴにキヤッチされた。ドサツという音が立ち、アカネの小さな体はすっぽりと、イヴの両腕の中に収まった。片腕は彼女の背中に回され、もう片方の腕は彼女の両膝の下に差し入れている。俗に言う、お姫様抱っこというものだ。あら？と戸惑いの声を上げるアカネの見下ろし、イヴはあることに気づいた。

にいちちゃんが言っていた、大胆不敵で、人のペースを容易く崩す者が、顔を真っ赤に染めて、胸の前で両手を握り締めているのだ。彼女の反応が理解できないイヴは、またもや眉を顰めて、頭を傾げる。「警告・特別個体『イヴ』、今すぐアカネを、すぐに離せ！破廉恥な行為は禁止事項とされてる、今すぐアカネを降ろせ！」

「よくわからないけど、とりあえずにいちちゃんのところに行くぞ」

ずつと怒りの声で抗議するポッド255を無視し、自分の腕の中心で頬を真っ赤に染めて、顔を隠すアカネも無視し、イヴは愉快的な感情を心から滲み出し、ぎゅっと彼女を抱きしめながら建物内の階段を上がっていった。

その間、ポツドは発言を禁止されたり、アカネがイヴの腕の中で  
微かに震えていたとか、なかつたとか……

## 人類と特別個体たち

— 困惑をもたらす者<sup>アカネ</sup>

「……イヴ」

「なに、にいちゃん？」

「どういふことか、説明してもらおうか……イヴ」

「分かった、にいちゃんがそういうなら」

飛び出して行つてから数分、弟は目標人物である『アカネ』を抱え、見知らぬ随行支援ユニットまで連れてきた。それだけではない、もつとも問題視するべきは、かの人類が、弟の腕の中で、真つ赤な顔で、ひらひらと私に手を振つてることだ。つまり、この行<sup>お姫様抱っこ</sup>為は双方の同意を得て行つたものではない、と見られる。あれほど「アカネの同意を得てから行動しろ」と注意したはずが、なぜこうなってしまったのか。

私は頭を抱えながら、イヴに説明を求めた。だが勿論、アカネを降ろしてもらつてからだ。

— 彼女の人間論<sup>お姫様抱っこ</sup>

イヴの強制連行により、ビルの最上階まで到達したアカネと浮遊してるポッド255はそこで、以前遭遇したアダムと二回目の対面を迎えた。未だ恥ずかしさを捨てきれない彼女は、少しだけ赤くなつた頬を隠しもせず、右手を上げて、挨拶代わりにアダムに向かって振っていた。予想外れすぎる光景に、アダムは一瞬だけ戸惑い、次は片手で顔を覆つてため息を漏らした。

二回目の出会いは、最悪だった。未だ熱が下がらない頬を放つておいたアカネは、困つたような微笑みを浮かべるだけだった。

それにまったく気づく様子もなく、長髪の彼はただイヴに「彼女を降ろせ」と一言伝える。頭上でイヴがゴクつと頷く動作を感じ取り、次に彼はしやがみこんで、すんなりと比較的比較的に小さな彼女を地面に降ろしてくれた。従順な様子を見せるイヴに、彼女はただただ眉尻

を下げ、微笑みを維持する。

「ありがたい、重いのに抱えてもらって…」

依然としやがんでるイヴにその笑みを向け、腕を下げて、自分の指を弄りながら、申し訳なきさそうに話す。だが、イヴは意味が分かってないように、頭を傾げる。重い？リンゴと同じような重さの彼女が、重いだど？それがイヴの考えてる事だ。どうやら彼女にとって、アカネの重量など、普段食べてる植物と変わらないらしい。果たして事実なのか、はたまたイヴの知識がまだ足りないだけか、それは兄のアダムしか知らないことだろう。

それでも、口に出した言葉をなしにするのは不可能だ。

「全然重くないよ？リンゴみたいに軽かった」

「イヴ」

「わかったよ、にいちちゃん。いま行く」

「すまないな、アカネは少しここで待っていてくれ」

イヴの言葉に反応するよりもさききに、アダムはすでに阻止し、腕を抱えながら、長い食卓のほうでイヴの接近を待っていた。感情が見られない血色の瞳を見つめ、呼ばれたイヴは淡々という風に返事して、スタスタと兄のほうへ歩いていった。大きな子供の背中を見てるかのようなアカネは、ようやくイヴがさきほど言っていたことの意味を理解した。

あれは、紛れもない、イヴの心遣いなのだ。無意識で、まだ彼の知識データベースに加わってないけど、確かに彼なりの親切心を感じた。立派な成人男性に見えるのに、まるで生まれて何年も満たない子供のようなギャップに、思わず笑みが零れてしまう。

「うん、分かった」

もちろん、思考をすると同時に、アダムへの返事は怠らない。脳の回転が遅ければ、いざという時の対応に遅れる。反応が遅れてしまえば、命取りになる。つまり両方兼ね備えなければ、待つのは死のみ。アカネは目覚めてから、今に至るまでの間に学んだ、ささやかな生存の術テクニクを頭に浮かべ、なにやら二人で会話をするであろうアダムとイヴに手を振った。いつてらっしやいの意味を込めてやったのだ

が、二人は気づいてくれただろうか？

イヴは兄を見るのに集中していて、アカネに気づいていない。だがアダムは始終こちらに顔を向けてるので、彼女の動きには目を留めている。慣れたようにニコツと一瞬だけ笑みを返したら、また無表情に戻り、イヴに視線を向け直した。それを目の当たりにしたアカネは、右手の人差し指を唇に当て、目を細めながら、じっと彼らを見ていた。あまりにも慣れた動作笑みに、違和感を感じたのは、彼女だけじゃないはず。そう考えてポツド255に視線を向けると、ポツドは音声を流した。

「特別個体アダムの動作は完璧に習得されたもの、人としては申し分ない笑みだった」

「でも、それじゃ足りない」

「不明：アカネの定義について、説明を求めろ」

遠くで会話を続けるアダムとイヴを眺め、彼女は思考の深層に潜り、目蓋を閉じ、自分の見解を述べる。

人は、完璧になれない。天才でも、凡才でも、愚者でも、強者も弱者も、完璧ではない。もし、本当に完璧な人が存在していたら、この世界地上は荒れ果てた姿ではなく、より豊かな土地になっていただろう。

「だって、それが人間だから」

悲しげに浮かんだその表情は、どうしようもない悲愴感に満ちた瞳は、一体どこに向けられてるのか。それは、ポツド255でも、アカネ自身でも分からないだろう。そして彼女は言う、人間は完璧でないからこそ、美しく見える。過ちがあるからこそ、人間は進化する。滅びがあるからこそ、新たに生まれる物もある。

「それに…人は、感情があるからこそ、人であり続けられるの」

たとえそれが、人形アンドロイドだとしても、模倣機械生命体だとしても。感情は、人をより一層美しく変える神秘なのだ。

「けどあの人は、まだ欠けてる。模倣だけじゃ、足りないの」

食卓のほうで会話を続ける双子を見つめ、アカネとポツド255は静かに彼らを待っていた。



— 急接近

アダムとイヴの会話が終わった頃、ようやくじつとこちらを眺めているアカネに気づいたらしい。彼女の隣で浮いてるポッドも同じく、狙いを定めてると気づいてるが、攻撃の意思は見られない。ただじつと見つめてくるだけ。相変わらず行動原理が読み取れない人類<sup>アカネ</sup>と意味不明な注目をしてくるポッドを見て、呆れたため息がアダムの口から漏れた。間近で珍しい動きを取った兄を目の当たりに、イヴは「にいちゃん、どうしたの？」と問いかける。

「なんでもない、ここで大人しく待っている」

弟から離れる際、彼を一瞥してから、真っ直ぐに彼女のほうへ歩み寄る。コツコツと規律正しい靴音を鳴らしながら、アダムは優雅に歩み続けた。貴族のような姿勢を取る彼を見て、段々と距離が縮まっていく時も、アカネは目をキラキラと光らせた。恐らく、生まれてこの方、そういった動作を間近で見たことがないからだろう。

思考が終え、ようやく目の前まで近寄ったアダムを見上げて、アカネはいつもの微笑みを浮かべ、彼の言葉を待っていた。警戒心を持たない、隙だらけの彼女を視界に捉え、アダムは申し訳なきような表情を浮かべた。

「手荒な真似をしたことに対して謝罪しよう、君との再会が待ちきれなかったんだ」

そう言っただけアダムは身を屈み、左腕は背中へ、残された右腕を伸ばし、降ろされていた彼女の右手をそと取り、そのまま自分の唇へ引き寄せていく。ちゅつと音が鳴り、彼女の手の甲に口付けを落した。一点の迷いもない、流れるような動作がアカネの目に留<sup>とど</sup>まつてるが、突然過ぎる出来事に、反応しきれない。数秒遅れて、ようやく頭の回転が追いついた彼女はぎこちない口ぶりで「いいの、私も丁度退屈していたから」と返す。

予想通りの反応を得たからだろうか、アダムはニヤリと笑みを浮かべ、右手を己の胸に置き、屈んだ状態で目を細め、赤い瞳で彼女の真っ黒な目を見つめた。メガネ越しに映る赤に、感情は込められてな

い。だが、その体の内に隠されたモノは、静かに変化をもたらしているのだ。

僅かなヨロコビが、這い上がってきてる。

「それはよかった、私とて、唯一残された人類に嫌われたくないからな」

「私に嫌われるようなことでもしたの?」

「残念だが、それは君次第だ」

「たとえば?」

流暢な会話が続けられる中、知らず知らずに、アダムは愉快そうな笑みを浮かべ始めたのだ。前回では、初対面でも怯むことを知らず、押し寄せてくるような気配を漂わせるアカネに参<sup>負</sup>つてしまった。だが今度は、彼の本拠地とも言える場所へ誘<sup>誘</sup>導し、さらには主導を握<sup>握</sup>つてるも同然の会話を繰り広げた。今度こそ、自分が望む流れになるだろうと、彼は考えたのだ。

そして待<sup>予</sup>測<sup>測</sup>して待<sup>待</sup>ったアカネの言葉を耳にし、アダムは一層笑みを深める。アカネの胸の前に置かれた左手を、手早く掴み、力を加えて自分のほうへ引き寄せた。あまりに唐突で、成す術もなく、彼女は呆気なくアダムに引かれるのだった。だが一連の動作はまだ終わっていない。アカネの驚きを気にも留めず、さらに追撃をかける。

屈んでくるアダムに気づいた彼女は身を引くが、左手は握られ、いつの間にか腰に回された腕に阻まれ、まるでワルツを踊ってる最中の状態になってしまった。逃げ場を失くしたアカネを面白がるように見つめ、アダムはさらに顔を近づける。

さらりとした銀髪が、流れるように落ちる。人形たちと人間を模して造<sup>造</sup>られた美しい顔は、落ちてくる髪と相まって、言葉<sup>人</sup>では言い表<sup>超</sup>せない魅力<sup>を</sup>を漂<sup>漂</sup>わせていた。銀色の髪に撫<sup>撫</sup>でられ、重<sup>重</sup>力に抗<sup>抗</sup>えない彼女の黒髪もまた、スルリと、肩から背後に滑り落ちる。だけどその瞳は、迫<sup>迫</sup>ってくるアダムへ向けられている。凪いだ海のように、静寂な夜のように、静かに見つめているだけだった。

相手が、リンゴ<sup>知</sup>を得<sup>患</sup>よう<sup>患</sup>と迫<sup>迫</sup>ってくる原罪<sup>ア</sup>の者<sup>ダ</sup>だとしても、一切の動揺を見せなかった。

「このまま、殺<sup>解剖して</sup>してしまえば……私は願望を叶えられる。これは、君に嫌われることに入るか？」

アダムは不敵な笑みを浮かべて、残酷な願いを口にした。だが支えられたアカネは、怯えもせず、引き上げられた左手をされるがままに、残された右手を伸ばす。その指は頭皮近くの髪を絡め、掌はアダムの頬を包むように、優しく触れていた。親指を動かし、彼のすべらかな肌を撫でて、頭を僅か右に傾げ、これ以上にならない微笑みを浮かべた。

「ううん、嫌いにならないよ。君がそうしたいなら、構わない。けど……本当にいいの？」

「……」

「私を殺してしまえば、君は本当に……望むモノ<sup>知恵</sup>を手に入れられるの？」

彼女の返答をきっかけに、その場は静寂に包まれた。風の音と、鳥が鳴り響く声。運ばれた風に吹かれ、揺れる銀色と黒い髪が、摩擦によって発する音以外、静かだ。そして、睨み合う二人。異常な空気を打破したのは、アダムの笑いだ。声を振り絞って出されたそれは、まるで想定外の結果を知ったかのような、悦びに満ちた声色だった。

「どうやら君は、自分の価値<sup>秘密</sup>をよく知ってるようだ……」

ご機嫌な声色で言いながら、アダムは未だ消え失せないヨロコビ<sup>笑み</sup>を顔に、彼女の左手を離し、腰に回した腕を引き戻した。対する彼女も、解放された腕と体を感じて、ほっとしてため息を吐く。

微妙な空気を滲み出す二人を見て、特別<sup>イ</sup>個体の片割れ<sup>ツ</sup>は理解できないと顔に出し、ポッド255は不満そうに見つめているだけだった。

## 人類と依然本性を知らぬ特別個体

― 見かけによらず

一人と一人ヒト機械によるささやかな騒動を経過し、すでに二十分近く過ぎていた。食卓の両端に、双アダムとイヴ子は各々の定番位置椅子に座り、そこから調達してきたかも知らぬ本を齧読んでっていた。それが、彼らのいつも通りの風景であり、もつとも安らぎを得られるひと時だ。

だが今日は、一つ違うモノが混ざっていた。それは紛れもなく、アダムの指示によって攫われてきた彼女アカネのことだろう。最初の出会で、ろくに会話できなかったアダムは密かに根に持っていたように、アンドロイドが彼女の側にうろついてないタイミングをはかつて、イヴに迎えるようにと伝え、少々『接触』をして今に至る。

本から目を逸らし、向かいの椅子に座ってるイヴ：と彼女に視線を寄越す。いつもならつまらなさそうに、自分の言い伝えに従って本を読む姿が見られる。片手は食卓に置き、顔を支えながら、もう片方の手は本を持って読む姿勢だ。だが今日、イヴの膝の上には、アカネが座っていた。よく分からない単語を指すイヴに、視線を寄越して読み上げる彼女の光景は、何度か目にした。普段ならば己に聞くか、あるいはネットワークに接続して資料を探るかの二択をするイヴが、まさか第三の選択をするとは。

やはり、君は思ったよりも、よほど他者を魅了する者らしいな。本から注意を逸らしたアダムは、じつと二人を見つめて考えに溺れていた。

ふと視線を感じたアカネは、顔の横に落ちてきた髪を耳に掻き上げながら、俯いていた顔を上げてアダムの方を見た。続いて、彼女は眉尻を下げ、目蓋を閉じて苦笑いを見せる。

「ごめん、アダムさん…騒がしかった…？」

困惑に満ちた声を耳に、聞いた本人であるアダムはただ小さな微笑みを浮かべて「いや、ただ君に懐いてるイヴが意外だな」と視線をアカネからイヴに移す。しかし注目を浴びた彼は嬉しそうな笑みを顔に、2Bや9Sと向き合ってる時の殺気が全く感じられない、むしろ

ろ子供じみたオーラを発してるように感じられる。呆れたため息を吐き、パタンと音を立てて本を閉じたアダムは、それを食卓に置き、続いて椅子を軽々と持ち上げ、イヴと彼女のほうへ歩み寄った。

頭を傾げる動作をして、近寄ってくるアダムに視線を向けながら、姿を追うと共に頭を動かす。彼の行動の意図を汲み取れなかった彼女は、疑問に思い、顔はまったく分からないと教えているかのようだった。さらには、すでに二人の隣まできたアダムの顔を、穴が開くほどずっと見つめていた。椅子を置き、座った直後に足を組む姿までじつと見つめるほど。本当にアダムを見てるのか、それともただ頭は別のことに集中してるだけで、目の動きが脳の回転に追いついてないだけか。真相はどうであれ、アダムの中では、目の前にいるアカネはいつまで経っても、解明される事のない謎だろう。

だからこそ、興味が湧くのだ。彼女の謎を、一つも残らず、全部暴き散らすのが、楽しみでならないのだ。好奇心旺盛な笑みを浮かべ、知的な雰囲気<sup>歪んだ</sup>を放つ特別<sup>彼</sup>個体は指先が赤い右手を伸ばした。

「君をここへ案内したのは、静かに書物を読むためではない…」

言葉の意味を理解できない彼女の顎を親指と人差し指で掴み、くいつと上げて、目を合わせた。一切の感情が込められてない瞳を向けられた彼女は焦ることなく、慌てることなく、ただただ静かに微笑みを浮かべた。

そうだ、これこそ、私の知るキミだ。大胆不敵、冷静沈着、常に他人の調子を狂わせる、そのために存在してる人間であると。間違いなく、私と初めてのの会話を交わしたあの時のキミ。アダムは口元を歪ませながら、目を細めた。

「それとも君は、私との約束を忘れたなどと…言うはずがない。そうだろう？」

ほぼ確信した口調で述べ、さらには追い打ちをかけるように、後戻りできないように疑問を投げつける姿勢は、どこからどう見て強制的に『YES』と答えさせるために、仕向けたものだった。それに対して、退路を断られたアカネは慌てることなく、目蓋を閉じて「もちろん、覚えてるよ」と柔らかな雰囲気<sup>歪んだ</sup>を放ち、目を細めてアダムを見

つめた。

イヴを蚊帳の外に、長髪の二人は姿勢を保ったまま、またもや見<sup>睨</sup>み合<sup>合</sup>つていた。外野から見たとすれば、それはなんとも言えない、無意味にも至る行動と解釈されるだろう。

だが彼らはきつと知らないだろう。この二人が、心の底から相手が掴<sup>部外者たち</sup>んでる情報を奪いたがろうなんて……誰も知る由はない。

アダムが、心の底から、目の前にいるヒトの余裕を崩そうとしてるのも。

— それは無意識か、それとも性<sup>サガ</sup>か

実のところを言うと、彼女は、酷く焦<sup>誘</sup>っていた。彼女、もといアカネというヒトは、思いもしなかったお誘<sup>誘</sup>いに驚きつつも、平静を装ったふりして、されるがままになっていた。予定違いなのは思っていたが、さらに軌道がずれていくのは、さすがに想定外だったらしい。

指してるのは間違いなく、アダムの接触と探りを入れる会話の数々だ。笑みでなんとか誤魔化してはみたものの、口に出した答えは取り消せない。だけどアカネは気づいてる、もしここでか<sup>アダム</sup>の者の氣に入らぬ答えを出してしまえば、もつとも手に入れたい情報<sup>記憶</sup>はおろか、最悪、己の命まで危うくなってしまう。すなわち、命の危険を冒すまで、この場に身を置いてるのだ。

ともかく、彼女はアダムと会話を図るために、一度イヴに降ろしてもらい、代わりに席を譲ってくれたアダムの椅子に腰を下ろした。考える素振りを見せ、目の前に立ってる長身の男との話題について思考していた。

「うーん、なにから話せば…」

「君のことを話してみるのはどうだ？ たとえば出身について」

「出身なら<sup>日本</sup>ここだよ？ でも…年齢は秘密」

「ああ、それは惜しい」

いかにも残念そうに目蓋を閉じ、悲しいと伝えるばかりの表情を露わにするアダムだが、それも数秒しか保たれなかった。なぜなら、

彼はすぐにニヤリと口元を歪ませ、愉快そうな口調で話し出す。

「…と言いたいが、君の基礎情報は、すでに入手済みだ」

どんな予想外の返答や動き、対応にも決して驚かず、平然とした態度を取るのには、いつものアカネ。だが、今日この時に限って、平然も、平然も、淡々とした反応もできない。イヴの誘拐、アダムの急接近と挑発に、『いつも』を保てるわけなんてない。もつと直接的に言えば、アカネは現在、微笑みを浮かべてるとはいえ、ひっそりと、顔を青ざめてる。よく見ると、唇に流れる血もやや減り、同じく青ざめていく様子を見せた。

もし、アダムの言っていることが本当なら…彼はとつくに、自分の情報を丸ごと手に入ってる。しかも、自分では到底アクセスすることも叶わぬ、彼らのみがダイブできるネットワークの情報網だとすれば、一体なんのために、ここまで来たというのか？欲しかったモノが、とつくの前に知られ、教えてもらえないとしたら。なぜ自分は、ここに身を置いてるのか？考えてるうちに、青ざめた顔が、さらに青ざめていく。

「ふっ…ふふ、フハハハハハッ！嗚呼、たまらない！その血の気が引いた顔ッ！最高だッ！」

肺にあるすべての空気を絞り出し、体に内蔵された力をすべて込めてるかのように、耳障りにも達するその残酷な高笑いには、まるでアダムの本心を表してるかのようだった。残酷で、凶悪で、言葉では表しきれないほど、ヒトらしからぬ特別個体は、果てしないヨロコビに溺れていた。初めから彼女の失態を予測し、感情に囚われる反応を期待していた。これを見て、果たして彼女は、さらなる反応を見せてくれるだろうか？横で見てるだけのイヴと、待機を命じられたポッド255は考えた。

注目を浴びる彼女は、気付けばすでに元通りになり、血色が悪かった面影は一切存在せず、見えるのはただ、彼女を表すかのような微笑みだけだった。おかしい、アダムのみならず、その場にいた全員が思ったのだ。ありえないと、当事者である彼らは感じた。普通ならば、もつと狼狽えて、さらに失態を重ねるはずが、なぜ短時間で回復

できたのかと。

「なるほど、それが……キミなんだね」

口を開けば、すでにいつもの彼女だった。誰に対しても大胆不敵、冷静沈着、怯えることを知らぬヒトの姿がそこに。だがそれはさらに、アダムの内感情領域に触れ、異変を与えた。心底愉快そうな笑みは未だ存在し、もう一種の昂りを漂わせていた。まるでゾクゾクしてるように、彼は堪らないという風に、瞳の奥にただならぬ狂喜を潜ませていた。

これがヒト、これが人間、これが人類、これがアカネ！実に興味深い、実に愉快！今は、あの無能なエイリアンたちを感謝しなければならぬようだ。我々を創造し、ここまで進化を遂げてくれるからこそ、こんなにも謎めいたヒトに出会えたのだ！ああ、感謝してやるぞ、無能で単調な創造主よ！おまえらのおかげで、私はこうやって彼女の謎を暴き、本性を引きずり出せる！

「感情を表してくれるのは嬉しいけど、あまり制御を外しちやダメだよ？」

気づけば、真っ黒な瞳はすでに血色の目を見つめた。暴発しかねない、急速にこみ上げてきた彼の感情を抑制するように見つめていた。アカネの細い腕が伸びる、小さな手がアダムの頬を包み、それに合わせて彼は屈んだ。すべては無意識、気づけば体はすでに動き出していた、と感じさせる動作に、ずっと傍観してきたポッド255はカメラを回し、映像を記録していた。

これはアンドロイドにとって、貴重な情報データになる、ポッド255は確信を持って、記録という行動に移したのだ。敵対する機械生命体が、意図もせず彼女へ従順な態度を示すのは、非常に珍しい光景。ならばきつとこの記録は、アンドロイド側の彼らに有利をもたらすであろう。そう考えたポッド255はただ、危害を加えるつもりのない狂気の特別個体アダムと、未だ怯えを知らぬヒトアカネを映像に収めるのみだった。



## 贖罪の人形達とヒトは出会う

### ― 帰還と発覚

レジスタンスキャンプは混乱した状態を迎えていた、敷地内にいる誰もが酷く焦った表情をしており、帰還してきたばかりのデボルとポポルは思わず、呆然と目の前の風景を眺めていた。丁度二人の前を通ったレジスタンスは足を止め、いかにも焦った様子を表すかのように「今すぐ搜索に出ろ！」と声を荒げてから、説明もなしにさっさと去っていった。

「…なんなんだ、一体？」

「さあ……でも、一大事なのは分かるわ」

説明もなしに放置されかけた二人は、視界の隅に映るアネモネの姿を捉え、そこへと視線を向けた。普段落ち着いた様子はなく、彼女もまた、他のレジスタンス達と同じく、不安げで焦った表情を浮かべていた。近寄って来る彼女に体を向け、一体何があったのかと話を伺おうとした。

「帰還したばかりで悪いが、今から搜索に向かって欲しい……！」

珍しく息を切らすアネモネを目の当たりに、もしや本当に大変な事に巻き込まれたのでは、と思い始めた二人だった。先ほど足を止めて自分たちに大声をあげていたあのレジスタンスも、搜索、と言っていたが、一体どこの誰を、何を搜索しろと言われたのか。カオスになりかけてるレジスタンスキャンプの雰囲気を感じ取り、赤い髪のアンドロイド達は、アネモネの話に耳を傾けた。

自分たちがレジスタンスキャンプを離れていた間に、どうやら生き残った人類を発見したらしく、その唯一の生き残りをキャンプで保護したらしい。近頃この地域の調査担当となったヨルハ部隊の2Bと9Sと共に行動し、アネモネが渡した依頼をこなしたのはいいものの、どうやら例の人類は一人で散歩しに行ってから、行方不明になったらしい。詳しい話によれば、約一時間前に、レジスタンスキャンプに帰還した一人が、入り口近くで廃棄された鉄パイプを発見し、人類の姿がどこにも見当たらないと、初めて発覚したらしい。そこで、自

分たちがタイミングよくここへ帰還した。

「なるほど…つまり、私たちが搜索する対象は、その人類なの？」

アネモネの解説をまとめ、整理し終えたポポルが口に出すと、アネモネは頷いて肯定した。なるほど、通りでキャンプがこうなる訳だ。はあーと重苦しいため息を盛大に吐きながら、呆れたように後頭部を掻くデボルの姿を見て、ポポルは注意するかのようには彼女の服を軽く引つ張る。

「デボル、そんな態度しちや駄目でしょ？」

「仕方ないだろ？それくらい呆れる人間サマだから、ため息くらい出るさ」

アネモネがどういう反応をするのかと気になり、彼女の方に顔を向くが、なぜか彼女も否定しきれないと、目を逸らしてる。どうやら、ポポルの言葉はあながち間違つてないようだ。ポポルに続き、目を逸らした彼女も盛大なため息を漏らした。アネモネ曰く、例の人類は難なくこの者達と打ち解けたのはいいが、まるで子供のように好奇心に操られて行動を起こすのが一番困つてるらしい。

ともかく、自分たちには一刻も早く、行方不明になった人類を搜索して欲しいとのことだ。

「帰ってきたばかりで悪いな…我々にとって一大事なんだ」

苦い顔をするアネモネに、ポポルは微笑みながら「大丈夫」と返して、早速デボルと共にレジスタンスキャンプを離れた。

「……同じ過ちを、繰り返さないといいが」

すでに遠くへ離れて行った赤髪の二人を見つめ、アネモネは不安そうな目をしていたのは、誰にも知られないのだった。

― 秘密を伴う別れ

「…さて、そろそろアンドロイドの諸君も騒ぎ始める頃だ。すまないがアカネ、君は一度帰ったほうがいい」

遠くにあるレジスタンスキャンプに目をやり、目を細めたアダムは振り返りもせず、キョトンとした顔をしているアカネに述べた。反

応が遅れるのも無理がない、なにせ彼女はさきほどまで、本人でも自覚できるほど危機に晒されていたのだから。いまいちな反応を返していたとはいえ、もしアダムが本気だったとすれば、きっと彼女はすでにここで意味もなくこの世から去っていただろう。

一刻も早くアカネを連れて脱出しようと待機していたポッド255は、アダムの話を聞き、すぐさま彼女の元まで浮いていった。側まで寄ってきたポッド255の頭に手を伸ばし、非常に軽い手付きで撫でた。戸惑いもなく行われたそれは、恐らくではあるが、彼女の無意識の行動だったんだろう。不安を感じ取り、落ち着かせようと、慰めようとしたかは分からないが、傍観者であるアダムの目から見たとすれば、そんな風に見えた。

「うん、分かった」

うんうんと頷き、軽快な足取りで未だこちらを見向きもしてくれないアダムの側まで行くと、気配を感じ取り、ようやく振り向いてくれたようだ。自分より高い彼を見上げ、今度は挨拶ではなく、お別れ代わりの微笑みを浮かべて、両手を伸ばす。僅かな交流を凶つただけとはいえ、なんとなく彼女の意図を汲み取ったアダムは、渋々という風に屈み、そつと彼女を抱きしめた。つま先立ちして、腕の中でもぞもぞと動く彼女を気にせず、離す前についてに頭をポンポンと撫でてやれば、とても満足したかのように花が咲いたような笑顔を見せた。

この人類は本当に、なんとというか、大胆不敵でありながら、どこか抜けてる感じだな。さつきまで怯えていた様子を見せ、続いては多大な秘密を抱える様子を見せたにも関わらず、今は無防備極まりない状態を晒してる。やはりアカネは、私が想像した以上に抜けた者らしい。知的な特別個体は、呆れた目で子供のような笑顔を浮かべる彼女を見つめていた。

次なる狙いを定めて、とてとてとずっと横で見たいイヴのところまで寄って行き、すでに両手を上げていた彼のところに遠慮もなしに飛びついた。衝撃を和らげるために、ぐるりと一回転した二人の顔には満開の花が咲いており、とても楽しそうに見えた。

『カシヤリ』

不穏な音が鳴ったと思えば、アダムはぼよぼよと宙に浮かぶ白い箱に目を向け、音の正体は『カメラ』だと気づいた。もはや大きな子供と化した二人を撮影して、なんのためになるのか？と不思議に思った彼であったが、なんとなくではあるが、理解できる。言い表せない感覚が、己の中で芽生え始めてるのを感じてる。

視線を感じ取ったポッドはただ、彼にだけ聞こえる音量で喋った。

「警告・特別個体アダム、アカネとの接触を禁ずる。その代わりに、ここを拠点とする情報を記録から外す」

「ああ、ありがたいが：断る、我々はアンドロイド側の指示など受けない」

ましてや『貴様』の指示など、受けるはずもない。その一言で、ポッド255の言葉は絶たれてしまった。人間の言葉で形容するなら、喉元に詰まった、という表現がなにより相応しいだろう。予想通りの反応を得たアダムはニヤリと笑みを浮かべ、たった一句を口にした。

「貴様の正体を知ってる」

「知られば、さぞや困るだろう？分かってるなら大人しく黙っている」

冷たく続かれた言葉は、返答を得ることなく、虚しく空気の中へと溶けるだけだった。なぜなら彼女の持ち主<sup>主人</sup>であるアカネはすでにお別れを済ませ、早く帰ろうとポッド255を急かしていた。素早く微笑みに切り替えたアダムを見て、なにも知らないアカネはただ、いつもの笑顔をしながら手を振って最後の別れをするだけ。

あの冷たく、機械生命体に相応しい残酷な表情を、決して彼女に晒すことなく。

隠されたことも知らずに、基礎情報を握られた彼女と、正体を握られた白い箱<sup>ポッド255</sup>はその場を離れようとした。アカネは構わず、ビルの最上階から大胆に跳躍すると共に右手を頭上へ上げ、伸ばしてきたポッドの腕に掴まれ、まるで枯れた落ち葉のように、ゆらり、またゆらり

と揺れながら降下していった。別の建物の最上階に辿り着き、またもや同じ方法で降りていく。

しかし彼女はまだ知らないのだ。このゆらりと危なっかしい降下の仕方が、のちに出会う二人の者を驚かしてしまうのを。そう、彼女は、まだ知らないのだ。

— 贖罪の罪人<sup>双子</sup>と人間サマ

その一方、レジスタンスキャンプから出て、例の人類が徘徊しているであろう廃墟都市を一通り回ったデボルとポポルであったが、捜索対象である人類はどこにも見当たらなかった。アネモネから得た情報だと、その人類は随行支援ユニット<sup>ポット</sup>を所持してらしく、そこから発信された信号を拾えるはず。おかしなことに、最後に信号を発した廃墟都市を全て回り終えても、未だに影すら掴めてない。

「おっかしいな、この辺りのはずなんだけど…」

廃墟都市を数周回って、足を止めたデボルは現在、悩ましげに腕を抱え、苦悩したように顔を歪ませ、ポポルの隣に立っていた。そんなデボルを慰めようと、優しく声をかける。

「近くで隠れてるだけかもしれないから、焦らず探そう?」

「…そうだな、焦ってたら逆に見落とすかもしれない」

双子として生み出された<sup>作られた</sup>からなのか、己の片割れがどんな気持ちでその言葉を言い出したのか、よく分かっていた。柔らかい声色で己に話しかけ、誰にでも優しく接するポポルに、仕方ないという風に、小さく笑みを浮かべた。彼女もまた、自分と同じく焦っているのに、こうして落ち着かせようとしている。

ああ、ポポル、やっぱり私はお前なしでは、やっていけないようだ。自分と同じ容姿をした、ココロ優しい片割れを見て、赤い<sup>デ</sup>髪の<sup>ポ</sup>彼女は安堵した笑みを零した。

そんな苦悩を消し、穏やかなひと時へと変わる場面で、ポポルの視界の隅に、とある物体がゆらりゆらりと映りこんだ。気になって、デボルから目を逸らし、物体の方向へと向ける。ビルの最上階辺りに、人影らしきものが見える。風に揺られながら、黒いものが吹かれ、

波紋を描く。それが人だと気づいた瞬間、声にならない悲鳴を上げそうになったポポルは息を呑んだ。未だ気づいてないデボルを促し、上空から降ってくるあの人影を指差す。

「で、デボルーあそこッー」

一瞬で恐怖に染め上げたポポルの顔を目の当たりに、あまりの変わりように彼女は気にする暇もなく、すかさず彼女が指した方向に顔を向く。目に映ったのは、さきほどよりも近付いてる人影と、人影の腕をしっかりと捕まってる箱ポッドの姿だった。この間も、ヨルハ機体らしきアンドロイドがそんな事をしていたのを見かけたが、もし今見えてるのが、自分たちが搜索してる例の人類だとしたら……間違いなく、大怪我を負ってしまうだろう。しかも、あんな無防備で、着地の仕方  
も分からなさそうな姿を見れば、誰だって不安を感じてしまう。

落ちてくる人類の落下地点を予測し、二人は同時に動き出した。ほぼ全力で走ったおかげか、どうにか人類が地面に着く前に、その下に駆けつけたらしい。次の難所は、どうやってその人類を受け止めるかどうかだ。もうすぐ頭上まで到達した人類を視界にいれ、デボルはほぼ考えずに両腕を差し出した。ポッドが落下の速度と衝撃を和らげた力も加え、ふわりと、その人類を軽く抱えた。

「つと…ふうー！ヒヤッとした…なあ、大丈夫…：…か？」

不自然に途切れたデボルの言葉に、後ろに控えていたポポルは目を瞬かせながら、そつと二人に近付く。だけどデボルの腕の中にいる人類の顔を見た瞬間、彼女も、固まってしまった。

「…初めまして」

パチパチと目を瞬かせ、アカネは自分を受け止めてくれた、なぜか呆然としてる赤い髪の彼女に微笑みを浮かべて、いつもの一言を放った。その響きは、赤い髪の双子の驚きを得た。

「きみ、は…：…」

「あなたは…」

記憶領域を探る、瞬時に探るも、彼女に関するデータが一切見つからない。なのに、彼女の姿、彼女の声は、たしかに記憶領域のどこかを甦らせた感覚があった。それなのに、まるで靄がかかっているみた

いで、なに一つ思い出せない、頭の中にポツカリと穴が空いてるよう  
だ。

「私はアカネ、霧雨緋<sup>アカネ</sup>…二人とも、よろしくね」

二人の戸惑いも知らずに、抱えられたアカネは、やはり笑みを浮かべるだけだった。

## 人形は主要任務を遂行する

— 再確認<sup>変化</sup>

時間を遡り、丁度彼女が散歩に出かける僅か前に、任務を遂行中の2Bと9Sはすでに森の国に侵入した。遠くに見えるあの城を目指す道中、案の定森の機械生命体たちに道を阻まれ続けた。常に行くと共に現れるソイツらは、どいつもこいつも「国のため」と、彼女達にとつて意味を成さない類の言葉を口に、無謀に襲ってくる。2Bたちはそれを目にするると、うんざりするのだ。

「なんで飽きもせずに襲ってくるんですかね…」

恐れを知らなく、わらわらと寄ってくる兵士との戦闘中、サポートを勤めてる9Sはハッキング間際に頭を傾げ、疑問を口にした。前方で接近戦を繰り広げ、彼の言葉を耳にした2Bは武器を振るい、最後の一機を破壊した頃に「私たちが知る必要のない情報だ」と述べ、宙に止まった刀を背中に納めた。彼女たちは闘うことだけに専念すればいい、闘って、闘って、地上にいる機械生命体を一機残らず殲滅する。だから余計なことを考えない、任務を遂行することのみ頭に置けばいい。

なぜなら私たちはアンドロイド、地球を奪還する要だから。

敵の残党がいまいかと辺りを見回しながら、9Sは苦笑いを浮かべて彼女の側まで戻り、困った口調で話し出す。

「もう…そんな事言ってる、アカネさんが悲しんじやいますよ？」

アカネの名前を出され、重苦しい思考から抜け出した2Bは今度こそハッと気を戻した。私たちはもう、ただの兵器じゃない。闘うためだけに作られたとしても、今は新たな意味を与えられた者だ。それを与えてくれたのは間違いなく、地上で唯一の生き残り、私たちの創造主、アカネ。彼女を守るための、アンドロイドとして存在してる。

きつと9Sは、こう言いたかった。彼に視線を向けると、心なしか、とても穏やかな笑みを浮かべてるように見えた。気楽な彼はいつも笑顔を絶やさないといいのに、なぜこんな風に見えたのだろうか。

「…そうだな、気をつける」



「本当、2Bは真面目すぎです」

「そうデザインされてるから」

「それ言い訳になってませんか!」

闘いのあとに残るのは、常に虚しさと静寂だった。こうして二人で談笑できるなんて、昔の彼女たちなら考えられないことだったろう。一人で行動を続けた2B、スキャナータイプ故に同伴を持たない9Sと、突如姿を現したたった一人の人類。それは彼らに大きな変化をもたらした。

「それじゃ、さつさとあの城を調べて戻りましょうか!」

「うん、アカネを待たせるのは良くない」

脳内に彼女の姿を思い浮かべて、バトラータップ B型の彼女とスキャナータイプ S型の彼は再

び足を動かし、森の奥に聳え立つ城へと向かった。

「アカネに、栄光あれ」

「アカネさんに、栄光あれ」

いつの間にか決められた言葉誓いを、口ずさみながら。

## — 襲撃殲滅 —

あつという間に、彼らは大きな広場に到達した。やや遠くに見えるあの固く閉じた大きな扉はおそらく、パスカルたちの村と繋がってる道なのだろう。もう一方は、城と繋がる大きな橋が建てられている。扉を一瞥すると、二人は大橋を渡ろうと足を動かしたが、騒つく木々の音を耳にした彼らは、音が鳴った方向に顔を向く。

「警告：機械生命体群、および大型機械生命体一体の接近を検知」

「いよいよお出ましですか…!」

ポッドの警告に身構える二人は、機械生命体が襲ってくるであろう方向に体を向き、距離を保つためにゆっくりと後ろへ下がっていく。木々の揺れは接近し、音も大きく鳴り響く。その時、奥の木々から鳥の大群が一齐に飛び上がり、まるで嵐の前兆を知らせているようだった。次の瞬間、小型の機械生命体が次々と姿を現し、槍をこちらに向けながら特攻してくる様は、まさしく中世の兵士のようなだった。「この先を行かせる訳にはいかぬ!死ねい!アンドロイド!」

6体の機械生命体によって構成された隊列で突進し、どれもが殺意を身につけ、真っ赤に染めた目で2Bたちに襲い掛かった。遅れて後方から『ズドンッ!』という地響きと共に、大型二足の機械生命体が装甲をつけた両足に電気を流し、兵士群と共に迫ってきた。

命知らずの機械を見つめ、目にも留まらぬ速さで刀の柄を握り、一切の戸惑いもなくそれを振り下ろす。飛ばされた衝撃波は先頭に立った機械生命体に命中したと同時に、2Bは地面を強く蹴った。深い切り口が刻まれた機械生命体がよろめいた時、そのイノチはすでに虚無へと返された。上下に分断され、虚しく地面に倒れる機械生命体を見ることなく、高貴な黒を身に纏ったアンドロイドは次々と機械たちを撃破し、慈悲も情けもなくただひたすら斬るのみだった。

「怯むな! 王国の侵入者を許すな!」

「国のため! 王のため!」

「うおおおおおッ!」

まだ標的となっていない兵士は、仲間をコロシタ<sup>2B</sup>仇に向かつて一斉に槍をつけ、怯むことなく猛進していく。槍が当たると思われた瞬間、黒い姿は残像となり、姿を消した。キョロキョロと辺りを見回すが、どこにも2Bの姿がない。彼らが気づくよりも先に、上空へ移動した2Bに叩き潰され、大きな断片と破片と化していった。風圧を感じ取り、回避行動を取った直後、ギリギリではあるが大型機械生命体の足払いを避けた。

「2B、耐電薬を投与してください!」

「分かった!」

サポートしてくれる9Sの言葉に従い、さっそくポッド042に耐電薬を投与してもらい、戦闘を継続した。ずっと小型剣を使用していた2Bは、大型機械生命体を一瞥し、すぐさまポッドに次の命令を渡す。

「ポッド」

「了解・大型剣『百獣の剣王』を抽出。該当武器：レベル4、最大の威力を誇り、大型機械生命体の殲滅に最適と判断する」

白の契約を収め、己よりも長く、重量のある大型剣の柄を両手で

握り締めて、両足を広げる。すると彼女は百獣の剣王を後方に浮かせ、ぐるりと体を回してからまたもやその柄を握り、姿勢を低くして大きな一撃を撃つつもりだった。彼女の行動を察した9Sは、攻撃が撃ち出せるまでの時間を稼ぎ、すぐさま援護射撃を始めた。2Bから注意を逸らした大型機械生命体は、走り出した9Sを目掛けてまた移動を始めた。

「アンドロイド！死ねえー！」

ズドン、と一步踏み出し、電気を纏った衝撃波を避け、攻撃を溜め終えた2Bを視界の隅に映す。後ろへ大きく跳ねて、大きな声で「今です、2Bッ！」と叫ぶ声に、大型機械生命体は後ろへと振り返った。回避行動を取ろうと体を傾けるが、2Bの速度に敵わず、目前まで迫った彼女に回転切りで両足の電気装甲を外され、いくつかのダメージをまともに喰らった。さらに追撃の回転切りを喰らい、重心が傾けた大型機械生命体は地面に倒れた。起き上がろうと一本の足で大地を踏みしめたところ、いつの間にか上空に現れた9Sが目に入った。

「これで、最後だッ!!」

機械が切断された音がその場で響き渡り、最早大きなガラクタと化した大型機械生命体の上に着地した9Sは後退した。機械生命体と距離を保ち、かつ2Bと再び合流した時には、ガラクタはすでに大きな爆発によって、跡形なく消え去った。

辛うじて残された部品お金と素材の数々を拾い、今後役に立つかもしれないモノをポッドに収納してもらった。アイテム等を拾い終えた2Bは後ろに振り返り、笑顔の9Sに声をかけられた。

「ナイスです2Bー！」

「9Sこそ、いいとどめだった」

互いを褒める二人の顔に、緩やかな微笑みがあった。それは果たして機械生命体を撃破した喜びか、はたまた一仕事終えたものか。他の者こそ分らないが、きつと二人は『ある者』を思って、笑顔を咲いたに違いないだろう。

— 敵<sup>味方</sup>

大橋を渡り、城壁にたどり着いた二人はそこに設置してあったアクセスポイントに自身のデータをアップロードし、城の内部へ突撃する前に予めバックアップデータも用意し、いざという時があっても『今の自分』を無くさないように処置を施した。いつも通りの手順ではあるが、今の二人にとっては、また別の意味が加えられた行動でもある。今の自分が消えてしまえば、きつと彼女は悲しむだろう。アンドロイドは義体と自我データさえあれば、不死身に近い存在だ。

「ただど人類の世界において、義体<sup>替わり</sup>なんて存在せず、一度壊されたら、二度と舞い戻ってくることはない。だから、これは一種の保険でもあり、咎めでもある。己の命を容易く捨てないための、彼女のための咎<sup>誓い</sup>め。」

「じゃ、早速中に入りましょうか」

これからの行動を確認するように、二人の目的を口にする9Sの言葉に頷き、片手に白の契約を握りしめて、広い城門を潜った。

—— 戦闘継続、及び城内での探索を省略 ——

「2B、ここで一旦所持品を整理しましょう」

「…分かった」

城の最深部に到達し、王の間直前でアクセスポイントを発見し、ずっと探索と戦闘を繰り返していた二人はようやく一休みできるらしい。両手を高く上げ、体を解すように背伸びをする9Sを見て、2Bも手足を確認するように伸ばす。準備運動にも似た動作と、所持品を確認するのは、彼らがこれから向かう場所がそれほど危険だと示してるのだ。

森の国、このエリアの機械生命体を取り締まる唯一の存在、森の王。幾度も機械生命体たちの口から出てきた「王様」という言葉は、間違ひなく二人が向かう先にいる者のことだろう。万が一なにかあっては遅い、そのために身体チェックと、所持品確認である。

「それにしても、やけに静かですね…」

「気をつけて行こう」

「賛成です」

一通りもチェックを終えたのか、先程から周囲を観察していた9 Sは感想を告げ、辺りを見回す。それに対して、ずっと階段の先を見つめていた2 Bも領きながら、一步を踏み出す。きつと階段を登った先で、自分たちの望む景色が広がっているだろう、このエリアの総大将が視界に映るだろうと。

しかし、城の最奥へ進んだ二人が目当たりにするのは、機械生命体の幼児だった。

「これが…王様?」

きつとなにかの間違いだろう、出なければ、こんな小さな機械生命体が森の王なわけがない。軽く混乱状態になった9 Sは、ぐるぐると脳を回転させ、ありとあらゆる状況を想定するも、どこにもこの現状に当てはまる物を見つからず、ただただ立ち尽くしていた。その時、不穏な気配を感じ取った2 Bは反応が鈍くなった9 Sを引っぱり、森の王から距離を取った。

「2 B ツ…!?!」

ザシユ、ドーン!という音が連続に響き、ようやく我に帰った9 Sと、警戒態勢を取った2 Bの視界に映ったのは、四〇式斬機刀で森の王を貫いた、長い銀髪のアンドロイドだった。

「あれは、アンドロイド…?しかもヨルハタイプ!?!」

「ヨルハ特殊指定機体を確認。破壊を推奨」

突如の出会いと、連絡を渡してきた司令官曰く、目の前に佇んでるヨルハタイプのアンドロイド、部隊から脱走した者、さらには追撃部隊を撃退し、仲間殺しをしてきた者だと告げられた。

すなわち、目の前に姿を現したのは、紛れもなくア<sup>自</sup>ン<sup>分</sup>ド<sup>た</sup>ロ<sup>ち</sup>イドの敵だと。

同じく警戒態勢を取った9 Sは『A 2』の名を与えられたア<sup>自</sup>ン<sup>分</sup>ド<sup>た</sup>ロ<sup>ち</sup>イドを睨み、なぜ裏切ったのかと叫ぶ。

「裏切った…?それは、司令部の方だろ」

A 2はゆつくりと剣を上げ、剣先を2 Bと9 Sに向けて、この世

を呪わんとする声色で伝える。

「アイツを…姫を見殺しにした司令部が、裏切ったんだろ！」

## 人形達の遭遇

― 怒りと絶望の間際

指名手配のヨルハ機体との遭遇から、僅か数分を経て、城の最深部である王の間は瓦礫が飛び散っていた。灰と塵が舞い上がり、小さな瓦礫の破片が継続的にばら撒かれ、王の間はもはや原型を保っていないかった。

彼女は、A2は掴み所のない話を口にしていた。司令部が裏切った、姫を見殺しにした。データベースにあった単語を洗いざらい探しても、該当するものなど、旧世界の遙か遠い時代における一つの身分だけだった。だが彼女が意味するのは、何処どこかにある何者誰かだ。「やめてください！どうして仲間同士で争うんですか！」

攻撃を仕掛けてくるA2を2Bが食い止め、後方で支援する9Sはたまらず大声で叫ぶ。交わった刃はキリキリと火花を起こし、2BとA2の手は震えていた。そこでA2は顔を歪めて、歯を食いしばって叫ぶ。

「仲間…だど？ふざけるなッ！」

魂さえ吐き出してしまいそうなほど、2Bと対峙してるA2の目には、果てしない怒りと、悲愴感が漂っていた。彼女が司令部に裏切られた、という言葉を思わず信じたくなるくらい、感情に満ち溢れていた。彼らと決定的に違うと告げるように、とても強烈な感情の波だった。間近で見た2Bも、驚きを隠しきれず、小さく口を開いている。

我々アンドロイドは、ヨルハ部隊は感情を表に出してはいけない。なのに、どうしてヨルハ機体である彼女が、こんなにも輝いて見えるの？どうして、同調したくなるの？

混乱する頭を引きずり、なんとかA2の攻撃を防ぎながら、後ろへ引く。一撃、また一撃と、何度も素早く振り下ろされる攻撃を防ぐうちに、2Bの手首に尋常でない痺れが伝わる。Aアタックカータイプ型はヨルハ機体のプロトタイプだと、9Sから説明を受け、承知してるとはいえ、これではあまりにも、力の差がありすぎる。

「お前達を見ると反吐が出る…！」

彼女が2Bと9Sに向けた言葉はとてつもなく重かった。ヨルハから逃げ続け、アンドロイドから逃げ続け、機械生命体を狩り続けた彼女の人生を語ってるかのような、重苦しい言葉だった。全てに絶望し、無力を感じ、尚も怒りを覚える。矛盾だ、あまりも矛盾だ。

どうして? どうしてだ。どうしてそこまでする。どうして、どうしてヨルハを憎む、どうしてアンドロイド自身を憎む。どうして、『姫』に拘る?

「…っーやめろー! 私たちは争いにきたわけじゃない…!」

2Bが荒い口調で吐き出し、精一杯の力でA2と交わった刃を弾く。後ろへと大きく跳ねたA2は、コツン、と音を立てて窓だった場所に着地し、四〇式斬機刀の柄を握り締め、目蓋を閉じる。大きく息を吸い込み、また吐く。2Bの言葉の影響か、一度その瞳に宿されたあらゆる感情は、一瞬にして無へと帰った。漂う憎悪も、悲愴も、殺気すらも消え、凧いだ海のような瞳を再び見せた。

これは、諦めだ。理解を得られず、同感する者も存在せず、万物に絶望を覚えた、諦めだ。

風に靡かれた銀髪が揺れる、空と海に似た淡い瞳は2Bと9Sの姿を映す。警戒態勢を解かずにいる二人を見定め、口を開く。

「……いずれ、お前達も分かるだろう」

どういうこと、だ…? なにもかも一変したA2を目の当たりにし、戸惑いを覚える二人は反応する間もなく、彼女は消えていった。まった。茫然と、城の外の景色を見つめるだけで、逃げていったA2を追いかける気力すらなかった。

OSチップ魂が抜けたように、広い空間の中で二人分の足音が響く。彼らの動きに合わせ、飛び降りた二人の腕をポッドたちが掴み、ゆらりと城の入り口まで降りていく。

そこにはもう、A2の姿はいない。

――向き合う勇氣

A2と遭遇した時、連絡を渡してきた司令官に彼女に纏わることを一通り報告し終えた二人は、パスカルの所へ向かっていた。なにか



が引つかかった9Sは、長く地上にいるパスカルからA2に関する情報を仕入れたいと、バンカーに知られず直接話したほうがいい、と理由を述べた。

「もしA2が指名手配されているなら、脱走と追撃部隊を殲滅した理由だけでは足りません。ましてや破壊なんて…おかしすぎる」

A2の脱走した原因に関して、機密情報ゆえに伝える事ができないと話していた司令官の言葉を思い出す。たしかにそうかもしれない。事の原因も分からず、ただ命令に従って任務を遂行するのも気が引ける。好奇心旺盛な9Sからすれば、やり辛いほかないのだろう。

しかし、自分はどうだろうか？命令に従い、任務をこなせば問題ないと思っている自分は、もしかして、裏に隠された真実から目を背けているのか？2Bは一度沈黙を保った。自分は、あまりにも未知だ。だけど、真実を知りたくない。知ってしまったえば、二度と戻れない。普通から離れていくのを恐れている、知ってはならないと誰かが囁いてるようだ。

「…9Sは、すごいな」

思わず、彼に対する感想を漏らした。ゴグルに覆隠された目を細め、連動した眉尻を下げ、唇を三日月のようにする。きつと彼は笑みしか見えないのだろう。

真実を恐れず、勇敢に立ち向かう君の姿が眩しい。眩しすぎる。いつだって、君は光を失わず、いつまでも輝きを放っていた。対照的に、私はすべてから目を背き、考えることすら諦めてしまった。

本当に、君はどうしようもなく輝いていて、どうしようもなく……憧れてしまう。

2Bから思わぬ発言を聞き、彼女の変化に気付かず、ただ「そ、そんな事ないですよ？」と照れくさそうに返した。安堵と、落胆を同時に覚えた2Bはこれ以上会話を進ませず、行こうと、だけ言い残し、さっさと大橋を渡っていった。

## ― 帰還

「…結局、A2の情報は手に入りませんでしたね」

機械生命体の村に戻り、パスカルと直接会話を交わし、データを転送して情報を聞き出そうとした。

結論から言うと、なにも手に入らなかった。パスカル曰く、彼らが求める対象は、ネットワークから切り離された機械生命体<sup>村</sup>達の中で、危険なアンドロイドとして認識されており、さらには彼女が直接この村にきたことは一度もない、という情報のみだった。

無駄足だった、とも言えず、収穫があつたとも言えない、なんとも悩ましい状態に陥ってしまった。

「少しでも有力な情報が手に入ると思ったのに……なんだか微妙です」「無駄じゃなかったから、そんなに落ち込まなくていいと思うよ」

普段の2Bだったら、きつと「許可無く敵にアクセスするのは推奨されない」と言つて、パートナーである9Sを責めていた頃だろう。実行に移さず、加えて彼を慰める言葉まで言い出したのは、おそらく彼女もそれが最善だと理解し、納得しているからだろう。

バンカーや司令官から情報を得られないのなら、自分から行動を起こす他ない。

人類との遭遇と、9Sとの接触を経て、少なからず2Bに影響を与えていた。命令は忠実に遂行するが、知りたい真実を追い求めるようになったのも、彼女<sup>アカネ</sup>や9Sに影響されたのかもしれない。

思わぬ反応に9Sは戸惑い、口をポカンと開いた。きつと彼も叱られると予想していた。少し経つてから、感動したような、照れたような笑みを浮かべる。

「……ありがとう、2B」

感謝の意に満ちた返答に、居心地が悪そうに「別に……君が正しいと思っただけだ」なんて誤魔化す2Bだった。もしアカネが9Sと同じ事を言つても、きつと彼女は同じ反応を返していただろう。今まで、一人で行動を続けていた。誰かと同行していたとしても、ここまですぐで親しい関係になったことは一度だつてない。なにせ、同行時間があまりにも短かつたからだ。こういう小さなコミュニケーションも、いたたまれない気持ちになつてしまうのだろう。

雑談交じりの会話を交わしながら、2Bたちは次の目的地へ向か

おうとした。大した成果も得られず、一旦レジスタンスキャンプに戻り、自我データのチェックも兼ねて、補給が必要だと2Bは話した。「アカネさんの様子も気になりますしね」  
「…そう、だね」

彼女の名前を出され、思わずキョトンと反応が遅れてしまった。自我データのチェックと補給は、彼女に会うための言い訳ではないが、どうしても反応に困ってしまう。製造時に、人類に対しての忠誠心が彼女を気にかけるようにプログラムされたのか、それともただ単に今まで自分を構成した自我データがそうさせたのか。

離れ離れになったアカネの姿を思い浮かべ、一秒でも早く彼女と再会したい気持ちを胸に、二人は移動速度を上げた。

— おまけ

「そういえば、姫って…誰の事だったんだろう？」

そういえば、そうだった。衝撃的な話と、攻撃を防ぐのに苦労して、彼女が言っていた『姫』について全く触れなかった。悩ましげに腕を抱え、喉を鳴らしながら真剣に『姫』について考える9Sを見つめ、気になった2Bも同じく考えをめぐらせた。

ひめ、ヒメ、姫…お嬢様…：…貴族…？

「貴族の、お嬢様…と何か？」

「あ…うん、確かにありえますけど、多分違うと思います」

否定する9Sの答えを聞き、2Bは「そうか…」と少し落ち込んだ様子を見せた。どうやら彼女にも、答えにたどり着けなかったらしい。探究心が高い9Sさえも、答えが分からないほどなのだ、きつとなにか重要な秘密が隠されてるに違いない。

色々な考えをめぐらせたが、なにも思いつかないのがオチだった。

「…あつ、誰かの呼び名だったりして！」

「さすがにそれはないよ、9S」

「そーですよね…」

## 人形達と人類は出会う

### ― 再会と遭遇

レジスタンスキャンプの入り口付近から騒がしい足音が響き、気になった赤髪の双子アンドロイド達は座ってるアカネから視線を逸らし、音が鳴った方向に目を向く。視界に映ったのは、黒づくめのアンドロイドだった。ここら辺では見かけない姿を眺め、二人は脳内でレジスタンスの話を照らし合わせる。

B型とS型が一機、随行支援ユニット二機、という特徴も合ってる。きつと彼らがこの地域の調査担当になったヨルハ部隊に違いない。

キャンプに入った途端、ズサーツと足を止めて、辺りを見回してると思いきや：サツと素早くこちらに振り向いた。鋭さが混じった動きに思わずギョツとし、危うく身を引いてしまった。少しばかり顔が引きつったかもしれないが、この距離だと気づかないだろう。僅かに驚き、安堵を覚えた赤髪の双子は、急ぎ足で駆け寄ってきたヨルハ機体に目を向ける。

「アカネー！」

「アカネきーん！」

後ろに座ってる人類の名を呼び、二人の顔には暖かい笑みが浮かんでいた。すると後ろから「2B、9S！」と応えるように名を呼ぶ彼女の声が響き、直後に前へ駆けて行く影を見た。まるで長年離れ離れになった親友かのように、三人はしつかりと抱き合ってる。後ろから見た双子からすると、ヨルハの二人はまるで犬にでもなったように、スリスリと彼女に縋ってるように見える。

現に、アカネは二人の頭を撫で、あやしてるのだから。

大型犬と小型犬だ：唇を動かし、同時に呟いたデボルとポボルは感心したような視線を送った。ヨルハ部隊は、誰もが冷酷なやつばかりだと思っていたが、意外な一面もあったんだな。頭に過ぎった考えを言葉に出さず、彼女らは未だ抱き合ってる三人に近付いた。

「よかったね、また会えて」

「お前が急に走り出したから驚いたよ！」

隣り合わせで立つてる赤い髪のアンドロイドたちを見て、アカネをぎゅっと抱きしめた2Bと9Sはゆっくりと彼女を離し、困惑した表情を見せた。最初に疑問を口にしたのは、9Sだった。

「えつと、君達は…？」

小首を傾げ、今まで見た事のない鮮明な色をした髪を見つめ、戸惑う素振りを見せた。彼が今まで探し、保有したデータベースによると、そんな珍しい髪色をしたアンドロイドはいなかった。早い段階で地上に降り立ったアンドロイド、もといレジスタンスの中でも、かなり貴重な個体だった記憶がある。

疑問に思う9Sの動作を見て、察した双子はどうやら彼の素朴な疑問に答えるわけでもなく、初対面の二人に自己紹介を行なった。

「どうも、私はデボル」

「私はポポルよ。普段はここでメンテナンスと治療や、道具屋を営んでるわ」

流れるように交換して話すデボルとポポルを目の当たりに、9Sと2Bは珍しそうに眺めていた。まるで、双子のようだ。ほぼ同じタイミングでボソツと呟かれたそれを聞き、穏やかに微笑むポポルだった。

「私とデボルは双子として生まれたの、珍しいでしょ？」

もしかしたらおかしなことでも言ったのか？と二人は心配したが、特に嫌がる様子もなく、双子のうちの一人は淡々とした反応を流す。やはりこの疑問を思う者も多かったのか、彼女らはその対応に慣れてるようにも見えた。

— ヨルハ

ざっと自己紹介や、双子に関しての疑問を解決したところ、新たな疑問がヨルハの二人に生まれた。なぜアカネは彼女らと一緒にいたのか？

そつと、アカネのほうに視線を移す。普段通り、薄い笑みを浮かべるだけで何か言おうとする気配はない。そういえば、彼女の隣で浮

いてるポッドは、いつの間<sup>こがねいろ</sup>にいたんだらうか？じーつと白と黄金色で構成されたポッドを睨むと、気づいたポッドはぐるりと9Sのほうに向いた。

「当機は随行支援ユニット、ポッド255。アカネのサポート、及び支援を行うよう、司令官から命令を受け付けている」

流れ出た音声は、とても聞き慣れた声だった。高すぎず、しかし低すぎず、女性としては威厳ある声。少し前まで、その声を聞いて行動を取っていたような…気がする。それよりも、司令官直々とは、やはりアカネは重要人物だからこそ、司令官自ら命じたのだらうか？

ああ、違う。まずはどうして彼女がデボルとポボルと一緒にいたのかを聞かないと。危うく話題をはぐらかされたが、思い出した9Sはまず、この問いかけを双子に投げた。

「そういうえば、どうしてお二人はアカネさんと一緒にいたんですか？」  
ニコツと人懐っこい笑みを浮かべてるが、彼の本心という訳ではない。むしろ、敵意が滲み出る笑みとさえ感じられる。ずっと隣で沈黙を続けた2Bは敵意こそむき出してないが、9Sの言葉に同意を示し、頷いている。

やはりそうきたか。双子の顔にはそう書いてあったように、苦い顔をした。互いを一瞥し、答えるべきかどうか悩み、続いてアカネに視線を寄越した。助けを求める視線を浴びた彼女は動じることなく、2Bと9Sに理由を述べた。

「2Bたちがお仕事してる間、散歩に行ってたの。それで、帰りにデボルとポボルが迎えにきたんだよ！ね？」

「コイツったら迷つてき、探すのに随分と苦労したよ」  
「でもポッドもついていたらから安心したわ」

アカネの話に合わせ、疑われない妥当な理由や流れを作った二人に微笑みを見せ、さりげなく助け舟を出したのだった。もし本当の事を言ってしまうえば、きつとヨルハの二人は暴走しかねないだろうと、アカネは予想したのかもしれない。そつとココロの中で安堵のため息を吐き、助けてくれたアカネに感謝した。彼女に対する好意も、一層上がった気がする。

疑う余地のない会話を見て、9Sは納得して「もう、アカネさんは本当に危なっかしいな」と困った口調で感想を述べ、腰に手を差す。仁王立ちにも似た立ち姿をしているが、険しいオーラなどなく、単に困ったという表現をしたかったらしい。人間らしい反応を見せた9Sに対し、デボルとポポルはアカネに視線を寄越した。

人類と接触したヨルハ部隊は、皆こうなるのか？

レジスタンスキャンプで聞いた話によると、バンカーからきたヨルハ部隊のアンドロイドは皆、冷酷で、まるで感情のない機械だと言っていた。本当のところはどうかは知らないが、こうして間近で2Bと9Sを見る限り、とてもそうとは思えなかった。やはりアンドロイドは人類のために動いてるからこそ、変化が起こりやすいのだろうか？

ふと気づけば、9Sは再びアカネに注目していた。

「あの…アカネさん、もう一回してもいいですか？」

彼女に向かって両腕を広げ、ニコニコした笑みを浮かべた。パチパチと瞬きを繰り返し、最終的に微笑みで答えたアカネはそつと9Sを抱きしめ、背中を優しく叩いた。

やはり小型犬だ。

ヨルハ部隊らしからぬヨルハ部隊を見て、双子は始終、珍しそうに眺めていた。

—— 理解に苦しむモノ 感情

約10分ほどのハグ時間を堪能し、ようやくいつもの状態に戻った2Bと9Sはついでにアネモネのところに行き、補給用のミサイルを護衛する任務を受けてきた。地上にいるアンドロイドたちにとって、それを守るのは重要な役割らしい。

「えー、折角アカネさんと再会したのに、またですか？」

「文句を言わない」

「はーい」

もはやいつもの会話を繰り返して、やや無気力になってる9Sを叱る2Bの光景も、二人にとっては日常茶飯事らしい。澁々という風に



返ってきた9Sを迎え、頭を傾げて「どうしたの？」と彼を心配し、困った顔をしたアカネは彼を見つめる。

「実はさっき、アネモネさんに任務を任せられました…」

いかにもやりたくない、という気配を漂わせる中、2Bは呆れたため息を吐いた。ヨルハ部隊であれば、余計な感情を出してはいけない、という決まりを思い出し、注意しようとする。だが2Bはあえてやらなかった。なぜなら、彼女もまた、同じ考えを持っていたのだ。

長時間会えなかったアカネとゆっくり過ごしたいのに、また任務を受けなければならぬなんて。

口にはしなかったが、9Sと同じ思いを抱いてる身としては、少しでも長くアカネと一緒にいたいと思ってる。たとえば、任務を遂行するのは絶対的な事だとしても、彼女と一緒にいたいと考えてしまうのは、誰にも止められない。

なにせ彼女は、自分の大切な存在<sup>ヒト</sup>だ。

「警告：2Bのブラックボックスから異常な信号を捕捉。精密な検査を推薦」

2Bにだけ聞かせるような音量で告げ、ポッド042は彼女の近くまで浮いていった。意味を理解できず、疑いの眼差しでポッドを睥んだ。異常な信号など、ありえない。ましてや、彼女を前にしてそんな事は断じてないと思えるほど、ポッドの言葉を疑った。

ポッドが捉えたブラックボックス信号は、一般のヨルハ機体よりも遙かに複雑なものだった。一言では表しきれない、しかし形容に相応しい言葉もあった。膨大なデータの中でそれに該当する言葉が一つ。それは、ココロというものだ。機械仕掛けの心臓、人類を模して造られたブラックボックス<sup>心臓</sup>は、アカネと接触した事により、大きな変化を遂げる最中とも言えよう。さらに言えば、彼女から人類に似た『感情』というものを感じ取ったのだ。

人形でしかなく、弱き人類を守り、至高の創造主である人類に仕える人型兵器アンドロイド。決して人類には成れない、ココロのない人形。そんな彼らの中で、あるはずのない感情が芽生え始めてる。同じく機械仕掛けた人格しか持たぬポッドは、異常とも思い、しかし同

時に羨ましく思った。

ああ、もしも私も、彼女らと同じになれたら…：そしたら…：

『警告：当機的人格データに破綻を発見、修復作業を推薦』

己の内部で響く警告の音声を聞き、ポッドは修復作業に入ろうとするシステムにストップを掛け、同時に規制を掛けた。これは破綻などではない、エラーでも故障でもない。誰しもが望み、手に入れようと渴望したもの。ここで取り上げられてしまえば、二度と手に入らなくなってしまう。

ここでポッドは思う、きつと2Bも、無意識にそう思ったからこそ、睨んできたのだろう。ならば同じことを考えてしまった自分に、彼女を責め、検査を受けるなんて忠告をする資格などない。

「2Bの言葉は…：理ある…：故に、当機は2Bに対し謝罪を述べる」  
「…：…：こっちこそ、悪かった」

彼女と9Sを除き、一人のアンドロイドと一機のポッドは、相互に対する価値観の違いを取り除いたのだった。そんな二人は思う、やはり感情は、自分らにとって理解しがたいものらしい。

## 人形と人類は水没都市へゆく①

― 意志は固く、望みは強く

命に危機をもたらすかもしれない任務になると、流石に人類であるアカネを連れてはいけない。本来ならそうすべきなのだが、今回の突発的な任務に対し、2Bと9Sは違う対応を取っていた。原因は問われるまでもなく、同行すると申し出たアカネである。

「……でも、万が一アカネさんになにかあつたら……」

「いざという時は逃げるよ。それに、君達とニーファイアがいるでしょ？」

苦い顔で悩む9Sに答え、譲らないとばかりに願望を伝える彼女の姿がレジスタンスキャンプにあった。

彼らが今遂行しようとしているのは、アンドロイドにとって、人類にとっても危険極まりない。向かう先は、水でほとんど埋もれた建物の残骸と残り僅かな陸地、まともに歩ける道などないに等しい。さらに言うならば、水の比率が陸地より多い。加えて地形だけでなく、その地域は多くの機械生命体が徘徊しており、アンドロイドや人類を見かけた途端、攻撃を仕掛けてくる。油断すればぼっかり死んでしまってもおかしくない。そんな危険な地域へ連れて行くなど、彼女を護る者として、とても領けないのだった。

しかし、彼女は二人の提案に異を唱えた。連れて行って欲しい、どうしても行きたい、それが彼女の揺ぎ無い、たった一つの望みだった。人類の忠実な守護者<sup>僕</sup>として、些細な願いから命令に至り、すべて叶えてあげたいと思っている。だが、これは命に関わる問題だ。軽率に、無闇に承諾してしまえば、後戻りできなくなるかもしれない。

「なら……これだけは、約束してください」

だから9Sは、約束という条件を言い出した。

一つ、もしも危険になった場合、彼らに助けを求める事。一つ、彼らの手が及べず、危機に陥った時、迷わず逃げる事。一つ、味方であるポッドやアンドロイド以外、接触を避ける事。もしあなたがこの条

件に領けないのなら、同行させるのは不可能です。はつきりとそう伝えた9Sに、アカネは眉を顰めていた。

どうか、領かないで。レジスタンスキャンプに残って欲しい。行かせたくない、行って欲しくない、ここに残って欲しい。

だけど、それでも……共に来て欲しいと、思ってしまう。

考えをめぐらせる9Sは、酷く混乱していた。目の前で真剣に悩んでる彼女は、自分たちの生きる意味であり、こうして大地<sup>地球</sup>に立っていられるのも、人類である彼女のおかげとも言える。もしも……もしも彼女がこの世から去ってしまったら、きっと今の自分たちは、二度と立ち直れない。

「……本当は、水没都市に行つて、無傷で帰れるとは思えない。最悪死んでしまうかもしれない」

「じゃあ……」

「それでも、行かせて欲しい」

俯いていた顔を上げ、曇<sup>迷</sup>りのない目でまっすぐ9Sを見つめた。意思を固めた目に姿を捉えられ、間近で彼女と対面していた9Sは思わず息を呑んだ。

嗚呼、もう止められない。こうなつてしまえば、全力で彼女を護ることに専念するしかない。ずっと隣で9Sとアカネの会話を黙々と見つめていたバトラ<sup>2</sup>は、静かにそう思い、考えた。

「ここで待ちぼうけ<sup>マッ</sup>けるくらいなら、この世界の事情を……自分の目で確かめるほうが有意義<sup>シ</sup>だ」

### ― 危険回避

洪々と彼女の同行を許し、アネモネから聞き出した水没都市へ入り口の位置までたどり着いた一行だが……思わぬ難題が訪れた。

「この高さだと……文字通り、落ちたら一溜りもないですよね……?」

「そう…だね……」

目的地へ向かうための入り口は、超大型機械生命体によって破壊し、崩壊した大穴の断面で露になった下水道だ。アンドロイドならば、ポッドを使って容易に辿り着けるが、自分達と違って脆いアカネは、足が滑っただけでも、命はない。ずっと彼女の手を握りしめる9Sを見て、またはや大穴に目を向く2Bは考える。

さて、どうしたものか。行きたいと何度も志願したのは彼女自身、しかしこのままでは目的地に着くより、彼女の命が危うくなるのがさきだ。安全に、とまで確信できるわけではないが、私がさきに降りて、彼女を受け止めるといふ選択肢もある。万が一、受け止めきれなかった場合は……

「2Bがさきに降りて、私とニーファイアがゆっくり降下したあとに受け止める…というのはどう？」

声を発したアカネを見て、さっきまで同じ案を考えていた2Bは小さく、口を開いて驚いていた。彼女も同じことを考えていたのか？と思わんばかりの表情だった。隣にいる9Sも、ゴクゴクと頷いて提案に同意を示していた。これで、全員この案に同意したのと同然になる。だが眉をひそめる2Bは、実行に移らなかった。

もしも落ちてしまったら？もしも受け止めきれなかったら？もしも彼女が死んでしまったら？最悪の予想がどんどん頭に浮かび、感情の起伏が平坦な2Bでさえ怯え始めた。選択を一つでも間違えたら、アンドロイドも、人類の彼女もそこでおしまいだ。失敗してはいけない、失敗は許されない。そんな嫌な考えばかり、浮かび上がってくる。

わずかに震え、たまらず握りしめていた彼女の両手の上に、華奢で柔らかい手が重なる。一瞬、己の体が強張ったのだと自覚した。間を置かず頭を上げると、まっすぐ自分を見つめてるアカネと目が合った。日の光で眩しく映る黒曜石の瞳が、その視線が、心を射抜くようだ。

「大丈夫、だいじょうぶだよ……ね？」

いつしか異常だったバイタルが、正常な数値へと戻っていく。震

え出した体も、段々と収まっていく。不思議な感覚を体験し、冷静に戻った2Bは、自身の急激な変化に戸惑いを隠せずにいた。さきほどまで、システムエラーの表示で視界を覆われ、警告音で聴覚を遮られたというのに、彼女のささやかな動きと、言葉一つで、あっさりと消し飛ばした。大丈夫、大丈夫だと繰り返し返すその言葉は、事実へと変えていく予感さえあった。きつとうまくいく、問題ないはずだ。

しかし頷こうとした時、なにかに気づいた9Sは大きな声で「あーっ！そうだ！」と右手で拳を作り、左手の掌を叩いた。思わずぎよつとし、そちらに視線を向けば、やたらと興奮した様子を見せる9Sは話し出した。

「僕が抱えて下りていく…:というのはどうですか？そうすれば怪我するリスクも減る上、安全に下りられます！」

「……そう、だね」

キラキラとしたオーラを発し、いかにも名案を出した、という風に笑顔を咲かせる9Sを見つめて、しばらく沈黙を続けた2Bは明らかにトーンが下がった声で返事を返した。

もつと早く言って欲しかった、そう考えずにはいられない2Bは、喉元まで這い上がった言葉を呑み込んだ。

―― 浅はかなり

無事下水道の入り口まで降下していき、降ろしてと話すアカネだったが、9Sは頭を横に振り、頑なに承諾しようとはしなかった。「服が汚れますから、着くまでの辛抱…:ね？」

腕の中、斜め下になる彼女の顔を見つめ、口角を吊り上げて微笑みを浮かべた。小柄な体系で、俗にいうお姫様抱っこを難なくこなし、さすがアンドロイドと言うべきか、腕力が想像を超えている。うつすらと頬を染めるアカネは言葉で返せないらしく、代わりに頭を縦に振り、静かに頷いた。

始終それをじつと眺めていたポッドたちは、気づかれないうちにちやつかり録画し終えてるのだった。

どこか羨ましげに9Sとアカネに視線を向け、内心では彼女をエスコートする役になりたいと願ってる2Bだが、戦いに赴けない9Sの代わりに辺りを警戒しなければならぬ。はあー、とため息を吐き、さきに前へ進んだ2Bは振り向かず「行くよ」と後ろにいる二人に告げた。

「まっ……待ってください2B!」

足音を遮る水音がバシャバシャと後ろから響き、下水道の奥まで伝わっていく騒がしい音を聞きながら2B止めずに移動を続けた。そして9Sに抱き上げられたアカネは、ただただ耳を塞ぎ、到着の時間を待つ。

狭い空間の中だと、音の響きがより一層大きくなる。ただの人間である彼女が、長時間その音に耐えられるわけもない。それを承知してる9Sと2Bは動く幅を下げ、かつ迅速に目的地へ目指していた。どこか不安げに眉を顰め、伏目になっている彼女を一瞥して、9Sは下唇を噛み締めた。

なにかを恐れてる様子に見えて、彼女の不安を取り除こうと考えを巡らせる。しかし、いい方法が思いつかず、時間が過ぎていき、目指す場所との距離が縮まっていくだけだ。どうすればいい?このまま着くまで我慢してもらおう?それとも、なにかやったほうが……

「……アカネさん、もう少しで着きます」

耳を塞いでる彼女のに眩くと、ビクツと身を震わせ、驚く素振りを見せながら9Sを見上げた。まさか、気づかれるなど予想していなかったような反応に、彼女を抱えてる9Sは苦笑いを浮かべた。唇しか見えないが、なんとなく彼の表情を読み取ったアカネは「うん……ありがとう」と悲し気に見える微笑みを浮かべた。

普段見る事も叶わぬ、笑顔見知らぬ以外の表情に9Sは心底驚いた。下水道での移動を開始した途端に、彼女が纏っていた柔らかい気配は薄めていき、代わりに怯えが現れ始めたのだ。微小ながらも、震える体は走る動作によって誤魔化されそうになったが、彼女に触れてる腕に伝わってくる。彼女は、この密閉した空間を懸念してる。もしかしたら、暗い空間が苦手、という説明もつく。だけど好奇心豊富で、まる

で子供のような純粋さを持つアカネがそうだとはいえず、なにか訳があるのだと思い、気になって仕方がない。続いて、一つの考えが頭をよぎる。

一番近くにいるはずなのに、僕らは彼女の事を……なに一つ、分かっていなかったのか。

「もう少しだけ、お願いね……?」

不意に服を摘ままれ、腕の中にいる彼女に目を向く。いつも通りの微笑みは、彼女に対する無知と、僕の浅はかさを責めるように感じてしまった。



## 人形と人類は水没都市へゆく②

### ― 疑問

激しく流れる水の音を背に、下水道切断口から出てきた三人の目に映ったのは、コンクリート<sup>建</sup>の塊の窓らしき穴から噴き出る滝<sup>水</sup>と、廃墟都市から拡散した植物の群れ。不揃いに割れた道路、所々突き上がっている破片と草花や木々、溢れんばかりに湧き上がる水に侵食されてる光景は、まさしく退廃した世界そのものだ。

「ここが…水没都市…」

ほぼ水で溢れた環境、水没都市、という名称もあながち間違っていないと、思わず小さく呟いた9Sは思わずにはいられなかった。人類の輝かしい歴史…とまで行かないが、彼らが何十年もの時間を費やして造り上げた建造物<sup>歴</sup>は、時の流れによって遺産となってしまうている。崩壊したビルも、亀裂ばかりの道路も元は完璧に整備され、人類と社会を黙々と支えてきたのだろう。かつての光景を想像してみると、虚しく感じてしまう。

エイリアンの地球侵略が、そこまで深刻だということのか。

抱えてる彼女を地面に降ろし、足が地面についた途端、前に行く彼女の背中をじっと見つめる。彼女は今、廃墟都市と同じ感想を述べているのかもしれない。浸水してる旧文明の地域を見て、ここはステキな場所だね、なんて口にするかもしれない。だけど、やっぱり聞きたい。あなたの口から直接、言い聞かせて欲しい。あなたがなにを考え、なにを憂いているのか。

「…きれいで、ステキな場所だったね」

9Sのほうに振り向いていないが、周囲の景色を眺めてる彼女の横顔は、寂しそうに見えてしまった。加えて、彼女が目の景色を過去の物と形容していたのだ。きれいでステキな場所ではなく、きれいでステキ『だった』場所と。以前、初めて廃墟都市に辿り着き、アカネが言い出した感想は「古代文明」だが、無邪気な子供がはしゃぐ雰囲気をしていた。だがこの水没都市<sup>水</sup>の前、記憶にあつた姿はなく、惜しむように辺りを見回す姿しかなかった。湿度が高い以外、廃墟都

市と同じ構造のはずが、どうして彼女はこうも違った考えを抱いているのか。

データベースによると、かつての人類は恐らく同系統の建物に住み、もしくはなんらかの仕事をしていたはず。同じ人類であるアカネも、似たような環境に住んでいたかもしれないのに、まるで傍観者側の感想を述べていた。小さな違和感を突かれ、ずっとアカネの背中を見つめていた9Sはたまらず口を開く。

「アカネさんは、以前、どこに住んでいたんですか…？」

随分と簡単に口に出せたな。周りの景色とアカネの動きを目で追った2Bはそつと考えた。平然な顔をして聞いた9Sの姿を見れば、誰だつてそう思うだろう。実際、口を開くまで、様々な考えが彼を襲い掛かったのは、きつと誰も知らないだろうが。

今まで彼女が自身に関する情報を提出した事は、一度限りだった。初めて出会い、初めて言葉を発した時、名を伝えたあの時のみ。今まで行動を共にしてきても、彼女の言動の真意はおろか、頭の中をなを描いてるのかすら、なに一つ分からない。子供っぽくて、世間知らずで、大胆不敵。時々物憂い雰囲気を漂わせ、ここではないどこかを覗く様さまを晒す。だからなのか、謎めいた彼女に惹かれてしまう。

数分経つても、アカネの返事がない。どうしたんだろう？と疑問に思った9Sと2Bは、改めて彼女を見据える。視線のさきに小さな子と思わせる面影はなく、魂が半分抜けたような、悲しみに暮れたヒト人類が立っていた。背後に映る空と水の青色が、彼女の心情を表している風にも見えた。

「……憶えてない。憶えているはず、ないよ」

二度も言った彼女から「それ以上、深入りしないで欲しい」の意を受け取った。これ以上の詮索しないで欲しいと、遠回しに伝えた。あまりにもアカネ見らしくない姿で、二人は反論できず、コクリと頷く事しかできない。

憶えている、だけど、思い出したくない。仮説でしかなく、予測でしかないが、これは彼女が伝えたかったもう一つの意味かもしれない。それでも、思わずにはいられないのだ。人類は、あなたは、アカ

ネは、どうして自分の情報<sup>ヒミツ</sup>を執拗に隠し、誤魔化すのか。

ゴーグルの下に潜んだ瞳は、再び背を向ける彼女を捉えるだけだった。

### — 型破り

向かってくる機械生命体<sup>敵</sup>をなぎ倒し、アカネに被害が及ばないように距離を取りながら前へ進み、示された目的地へ向かっていく。機械に乗り、空中からしつこく弾幕を張るやつらに応戦し、2Bと9Sもポッドを頼りに弾幕を撃ち返す。広い空の下で響く発射音と、悲鳴代わりの爆発音が広がり、いやでも戦場<sup>前線</sup>である事を思い知らされる。「…音、思ったよりデカイな」

ぼそつと、後方にいるアカネの呟きが耳に入り、2Bの迎撃は気付かない間に激しくなっていた。隣でハッキングと破壊命令を繰り返す9Sはそれに勘付き、しかし彼女の苛立ちを収める手段も思いつかず、機械生命体の掃討に専念するしかなかった。彼の憂いに気づくわけもなく、頭<sup>感情</sup>に血<sup>染</sup>がのぼった<sup>た</sup>2Bの苛立ちは怒りへと変え、歯を食いしばってる声で「ポッド…！」と射撃の停止を命令する。

後方で観戦<sup>避難</sup>してるアカネは小首を傾げ、彼女の突然な行動に戸惑っていた。普段の2Bなら、途中で攻撃をやめたりしないはず、と一人考えていた。距離を置かれたせいで、きつとアカネは彼女の怒りを感じ取れてないのだろう。反応しようがない状況<sup>二人</sup>を感じ取り、9Sが選んだのは、やはり眼前の敵を破壊することだった。ふと2Bのほう<sup>二</sup>が気になり、そちらに目を向く。

目の当たりにしたのは、小型剣を逆手に取り、力を溜め、宙に浮いている機械生命体に向かって思いつきり投げつけた姿だった。常規を外した彼女の唐突な行動に、声こそ出さなかったが、それでも驚かすにはいらなかった。驚いて思考に追いつけない9Sの体は依然固まったままだが、目はしつかりと2Bの動きを捉えていた。

ドーンツ！と豪快な爆発音が響き、距離ゆえに弱くなった爆風はただ2Bの髪や服を靡く。次に、投げ出した小型剣が光の粒と共に背中<sup>中</sup>に再出現した。おそらくポッドが急いで回収したのだろう。

「…アカネを害するゴミが」

風に埋もれそうな声で呟き、9Sは聞いちゃいけないにかを聞いてしまった気がした。遠くに立っているアカネを確認すると、相変わらず同じ位置に立っており、さらにはこちらに気づいて手を振ってきた。何事もないように装い、怪しまれずに同じく手を振って応えてあげた直後、未だ殺気を漂わせてる2Bを肘で突いて注意する。

「お、抑えてーアカネさんこっちに來てますよっー！」  
「っ…！」

器用なまでに速攻でダダ漏れだった殺気を引つ込み、普段通りの2Bに戻り、凧いだ海の静けさに戻った。本当に、彼女が関わるということ以上に慌てて、いつもより器用にもなれる人だな、と無意識に思った。見下してるわけではなく、見くびってるわけでもなく、ただ率直にバトルタイプも性能抜かりないが高いんだな、と考えてしまった。失礼な考えを悟れないように、側まで近づいてきたアカネに「怪我はありませんか？」と誤魔化しを混ぜて本心の言葉を放ち、不躰な言動を頭の隅に隠した。

相変わらず穏やかな微笑みを浮かべ、一戦経過した彼らを氣遣う彼女の姿は、今の二人にとってはかけがえのない心の支えしとなってるだろう。気が立っていた2Bのうちに隠された怒りも、いつの間にか無へと帰っていった。

「あんな2B、初めて見たかも…」

移動を続けた9Sは、なにがあっても彼女を怒らせないよう、記憶領域脳内に刻み込んだ。

— 考慮すべきモノ、優先すべきモノ

予期せぬ事態を前に、司令官の指示を受けた二人は同時に彼女のほうを見た。ミサイル周辺でうろついていた機械生命体を掃討したのはいいものの、バンカーが所有する空母が地上で補給しにやってきた際、機械生命体に襲われ、交戦状態に入ってるとのことで、援護に参加して欲しいと告げられたのだ。

この事態を想定しておらず、連れてきてしまった彼女を一人にするべきか否か、あるいは司令官の命令を後回しにして彼女を安全地帯へ連れていくべきか、迷っていた。しかし、同じヨルハ部隊として、同じアンドロイドとして、一刻も早く仲間の増援に向かいたいのも事実だ。だがしかし、繊細な彼女を機械生命体だらけの空間に放置していいのだろうか？小さな命の灯火ゆえに、些細な変化で消えてしまう彼女だからこそ、一人にしてはいけないのではないか？

ここはヨルハ戦闘機械隊員として行動すべきか、それともア忠実な人形ンドロイドとして彼女を護るべきか。この場での最適な選択は、分かりきつていゝる、解りきつてゐるはずだ。葛藤する二人に声をかけたのは、やはりアカネだった。

「行つておいで、私は安全な所に隠れてるから」

自分を二の次に考え、二人の任務を優先し、さらには心配させまいと自主的に隠れると発言する。この世界で目を覚ましてまだ数日しか経っていないのに、彼女はアンドロイドの立場を少なからず理解している。このまま彼女の言葉に甘えてもいいが、果たして彼女の身を案じる事無く、任務を遂行できるだろうか？答えは明白だ。だがこんな緊急事態に限って、いい案が浮かばない己のスペック頭に怒りさえ覚えてしまう。

思考から意識を引き戻し、9Sは再びアカネに視線を向けた。すると彼女がニーフィアとなにやら話しているところだった。はて、一体なにを話しているのだろうか？と状況に似合わず気になってしまい、気づけばすでに口を開き「なにを、話してるんですか…？」と聞いてしまった。さらに驚いた事に、自分の声が震えていたのだ。

ああ、そうか、自分は思ったよりも、彼女に入り込んでしまっていたのか。きつと、彼女と出会ったあの時から、なにもかも手遅れ狂い始めだったかもしれない。昔は平然と任務に赴けるのに、今は、彼女なしではすべて切り捨ててもいいどうでもいいとさえ感じてしまう。

もしかすると、今ならバンカーの事も――

な、なにをバカな事を考えてるんだ僕は！バンカーを、司令部を  
どうでもよく考えるなんて……！だけど、アカネさんも確かに大事  
だ、もし彼女になにかあれば、僕は……

「9 S、私は大丈夫。言ったでしょ、無傷で帰れるとは思えないって  
……」

「……っ！」

「だからと言って、簡単に死ぬつもりはない」

すべてを思い出すまで、すべてを知り尽くすまで、この世界のす  
べてを知るまで、死ぬつもりはない。心の中に秘められた決意を次々  
と明かし、貪欲に満ちた人類の鏡を見せる彼女を前にして、否定の言  
葉も、反論する言葉も出せない。生に執着し、知識に拘泥し、尚且つ  
明確な意思をさらけ出す姿は、まさしく自分たちの原型だと示してい  
た。

己に正直で、目的のために手段さえも択ばず、けれど同時に同胞  
を思いやるココロを持つヒト……：僕らは、彼女の根本に憧れていたの  
かもしれない。欲をまき散らし、自由気ままに生きる姿に、憧れを。  
「ここで立ち止まったら、真実は遠のいてしまう。だから、動くの。手  
遅れになる前に、失う前に、掴み取る」

周囲に目を配らず眼前の景色に囚われていれば、救えるはずのモ  
ノも零れ落ちていく。それを防ぐためにも、行動を起こさなければな  
らない。

アカネの言葉<sup>真意</sup>が体の隅々まで渡り、危うく異常な判断を下してし  
まうところを、彼女は引き戻してくれた。そうだ、彼女だけ護れたと  
しても、多くの仲間を失っては戦力が大幅に削られるだけで、真実  
も辿り着けず、最良の結果にはなれない。ならば、残された選択肢は  
一つ。

「……分かりました。どうか、気を付けてください」

「君も、無茶はしないで。2 B、君もね」

「ああ」

二人は頷き、惜しむようにアカネを腕に閉じ込めて数秒、意を決  
して遠くに待機してる飛行ユニットへ向かう。離れる際に、彼女は眩

くように祈りの言葉を放つ。

「どうか気を付けて……いってらっしゃい」

— ヒトと機械

「ニーファイア、2Bと9Sを……頼める?」

「不明：説明を求めろ」

「この戦いの最中、私はきつと目当てにされる。命の危険はないと思うけど、キミを連れてはいけない」

「否定：私はあなたのサポート、および護衛を務める随行支援ユニット、持ち主であるあなたを見捨てるのは推薦されない」

「キミまでついてきたら、あの二人に状況説明できなくなるでしょ?」  
「……」

「私を見捨てるなんてそういう意味じゃないよ。それに私は、確かめるだけ」

「あなたは、なにを考えている?」

「さつきも言ったでしょ、私はすべてを思い出し、すべてを知るまで死ぬつもりはないって……だから、私の代わりに、二人に状況を説明して欲しいの」

「分かった、あなたの頼みなら、受けよう」

「ありがとう……ニーファイア」

「お迎えに上がりました……：我らが眠り姫」

「君の場合は、甘い果実の違いでしょ、アダムさん」

— 攪われゆく最後の人類  
改変するは運命の筋書き

空母を襲った機械生命体を掃討し、突如出現した超巨大機械生命体との激しい戦闘を経て、アンドロイド側は甚大な損傷を受ける結果となった。2Bと9Sの活躍により超巨大機械生命体は沈黙し、水没都市の海岸添えで共に目を覚ました時には、すでに8時間経過していた。

そして身を隠すと言葉にした彼女の姿は、どこにもいなかった。

「まさか、あの余波に巻き込まれて…！」

「いえ、まだそうと決まったわけじゃっ…」

「ならどこにいるっていうの!?あの子が、私たちを置いていったりしない!!!」

「っ…いい加減にしろ2B!あなたが狼狽えてどうするんだ!」

パニック状態に陥った2Bを怒鳴りつけ、まだ万全ではない体を引きつつ彼女の両肩を掴んだ。ぎよつとした2Bは一瞬固まり、しかしすぐさま自分を落ち着かせようとした9Sの異変に気付く。いつも穏やかで悠々としてる彼とは全く真逆な態度だが、それよりも、9Sはひどく震えていたのだ。大事な彼女が消えた、恐れているのは自分だけじゃないと。

なんとかパニック状態を治め、フラットに戻った彼らの元に、一機の支援ユニットの情報が入る。白と金をベースに作られた、彼女のポッド255。

「報告・対象アカネの命令により、ヨルハ二号B型、及びヨルハ九号S型に報告。超巨大機械生命体との交戦の際、対象アカネは特別個体『アダム』に誘拐され、救出のため、座標をポッド153、及びポッド042に転送」

二人は同時に息を呑んだ。人類最後の希望とも言えるヒトは、敵の手中に落ちてしまった。



## 人類と特別個体の問答

— 「一つ、昔話をしよう。」

昔々、はるか昔の時代に、人類という生き物が存在していた。彼らは古の時代から幾度も進化を遂げ、数多の歴史を刻みながら、ヒト種というものを作り上げた。

その中で、現在のヒト属を作り上げるまでに二つのヒト属が存在したとされている。旧人類と称された「ネアンデルタール人」と、現生人類と呼ばれる「ホモ・サピエンス」だ。前者は勿論『人類』の進化過程として最低限の知恵や力を持っており、集団行動によって生存の確率を上げていた。しかし新たに生まれた現生人類は前者よりも優れた思考、行動力、外界に対する免疫力のおかげで、ホモ・サピエンスは彼らに劣らない——いや、ネアンデルタール人よりも高い生存能力を持ち、過酷な環境の中でも生き延びて見せ、現生人類という称号に相応しい生き様を披露した。

結果、ネアンデルタール人は過酷な環境、もしくはホモ・サピエンスとの競争に敗れ、破滅の運命を迎えた。そうして、ホモ・サピエンスは現在唯一存在するヒト種——唯一無二の人類としてこの星<sup>地上</sup>で生き延びた。彼らには頭脳がある、知識を求める欲がある、生きるための能力がある。生存を求め、欲求を満たし、そのための知識を手に入れる行動力と勇気がある。ゆえに、人類は人知をも越えた代物を作り出し、より豊かな生活を得たのだろう。

豊かで、平和で、憂う必要のない日々<sup>に</sup>満足し、このまま繁栄が続くのだと、ソウメイな人類は思った。だが、彼らは想像もしなかったのだろう。その見栄えのいい繁栄が、思わぬ形で絶たれるなど——

— ワタシの存在意義

「それって確か、大昔にあった、人類の進化の過程…だったよね？」

「ああ、機械生命<sup>我々</sup>体も、君と同じような進化を短時間で遂げてるらしいんでね」

とても興味深い内容だ。言葉と共に、僅かに唇を歪めたアダムの表情は、一見優雅に微笑んでるように見える。しかしその実態は、貴重でならない、たった一つ残された人類<sup>個体</sup>を手中に収めた事を喜び、残酷な笑みであると。機械生命体の特別個体、コードネーム『アダム』は驚異的な進化を遂げただけでなく、好奇心旺盛で勉強熱心という特殊な個性が宿されており、聡明であると同時に、ある意味においては非常に無垢<sup>残酷</sup>であり、人類に只ならぬ興味と執着心を持っている。

彼は欲していた、人類を理解するための知識を。彼は待ち望んでいた、人類のサンプルを獲得することを。彼は手段を厭わなかった、望みの人類<sup>アカネ</sup>を得るために。ゆえにアダムはここに存在する。学習し、ネットワークを通して人類の情報を入手し、彼女を攫った。己よりも遥かに弱く、儂く、同時に謎に満ちた人類を、彼はようやく手に入れた。

「同じであり、同じにはあらずと思うけどね。私<sup>人類</sup>たちは、誕生してすぐ生きるための術を獲得できないし、攻撃されて短時間で対抗の手段なんて身につけられない。脆い私<sup>人類</sup>たちでは、頑丈なキミ<sup>特別個体</sup>たちに到底及ばないよ」

「体の構造では我々に敵わないかもしれんが、君たち……いや、君にはどんな生物よりも優れた脳、知恵があるだろう？」

「あいにく、私は研究員の類でもなければ、科学者に匹敵する頭脳もない、平凡でならないつまらない人間。誰かを支え、慰める事しか役に立たないさ」

「はは…謙遜も、君の特性のようだ。それだけでどんなモノをも超えたとも——どんな存在をも容易く魅了する、君なら」

親しい友人同士が、他愛もない雑談を続けてるようにも聞こえる声色だが、内容が『ヒト』と『ヒトでない者』に関する話だけでなく、研究目的で入り組むように繰り広げられているその光景は、学者や研究者が頻繁に行う議論のようだった。異様な光景と言えはそうだが……この場で最も『普通』ではないと告げてるのは、不明な素材で出来上がった真っ白い街と、彼女の手を拘束してる白い手錠だろう。

自らの意思でアダムについてきたとはいえ、万が一下手な抵抗でも

されたら、手に負えないのだろう。力加減を間違えてしまえば、きっと彼女は呆気なく死ぬ。指一本でも容易く傷つけられる彼女の身は、あまりにも脆い。これも一種の安全装置といえよう。

中途半端に複製された、かつて人類が賑わせたであろう白い街を、広場のとある建物の二階で眺めるアカネ。拘束され、命の危険があるにも関わらず、随分と呑気なものだ。だが、それでこそ私が見込んだサンプル、唯一無二の人類。記憶初めて見たにない街並みをただただ食い入るように眺める彼女を、愉快でならない心情で見つめる。

己と同じく好奇心旺盛で、イヴのように行動に長けており、子供のような純粹さだけでなく、時に大人びた一面を晒す。いつも明るく振る舞う反面、頼れるものがないと悲しげで寂しそうな表情を浮かべる。そのギャップは、彼女の特性であり、他者を無条件に惹きつける要因の一つでもある。実に、興味深いものだ。

彼女が、私ですら知る由もない記録記憶を思い出したら——今よりも、面白い反応を見せてくれるだろう。

「さて、アカネ。そろそろ本題に入らせてもらおう」  
「……どうぞ」

アダムの真意を察してるか否か、不自然な間を置いてから、彼と面を向かつてるアカネは少し肩の力を抜いてから、続きを、と伝えるような言葉を告げた。会話の長さを予測したのか、伝え終わった彼女は、白い素材でできた椅子の背に背中を預け、できるだけリラックスできる体勢に変えた。それを目に焼き付けたアダムはさらに深い笑みになり、さらに両手を組み、膝の上に置いて、やや前に屈む。

人類がビジネスの話をする時の場面とよく似ている：ネットワークを通じて探し当てた一つの記録を思い出しながら、アダムは彼女と『重要な話』をするべく、再び口を開く。

「霧雨キリサメ緋、君は己に関する記憶を一切失くしてると言ったな？名前、年齢、出身以外、思い出せた事は何一つない……そう言ったな？」

確認するように、要約された説明にアカネは頷いた。アダムの言う通り、自分が覚えている限りの情報は、自身に関する事のみ。少々伏せられたアカネの目は、アダムの顔ではなく、彼を視界に入れてるが、

物思いにふけてるようにも見える。

そう、憶えているのは、たしかにそれだけ。しかし確認して、疑問に思ってる情報は、話していない。以前、2Bと9Sが任務遂行のために彼女をキャンプに残した事がある。その際に、自分の所持物から奇妙なものが記されていた。

遺伝子存続計画——それは一体なんのために存在し、なぜその計画に関係してであろうカードに自分の情報が載っており、なぜ番号001と書かれていたのか。それは私を示してる……なんて明白だけど、なぜ、私なのか？そもそも、人類は無事月へと逃げたはずが、なぜ『遺伝子存続計画』が必要だったのか？人類が存在してる限り、このような、絶望にまで追い詰められたような計画を立てたのか。

もし、もしも……この計画が、なんらかの失敗のために、予め用意されたバックアップだとすれば。人間は、人類は、ヒトは——本当に、月面に、逃げ延びたの……？

思考する彼女の耳に、喉を鳴らして小さく笑いを上げるアダムの声が届く。いつの間にか俯いていた頭を上げ、彼女が目撃したのは、喜びを隠しきれないアダムの顔だった。彼女の反応を確認したアダムは、唇を動かす。

「考えているな？人類が消えたこの大地に残された理由、自身の存在意義を」

「キミは、なにを知ってるの？」

「アカネに関する、ほんの一部の事情…君がここ地球にいる理由だ」

「ここにいる、理由……？」

「どうやら、困っているようだな。ならば一つ、ヒントをやろう」

「アカネ、君を発見したのは私だ。そして、発見した際の君はコールドスリープされてる状態だった」

さあ、思い出してみるといい。静かに響いたアダムの声は、強制的に『なにか』を蘇らせた。

白くて、装飾もなく、不気味なほどに清潔な空間だった。ふかふかのベッドも、枕も、シーツも、冷たい床も、机も椅子も、白一色。無機質で、人工的で、人間が暮らすようなところには、とても見えなかった。

薬品の匂いに満ちていた、記憶がある……消毒液だけでなく、なにか別の薬品も混ざってる、不思議な匂いに満ちた白い空間。ガラス張りの窓に、誰かが立っている。顔は、よく覚えていないけど、身につけている白い衣装は、印象深い気がする。顔全体を覆ったマスクは、まるで空気が酷く汚染された災害地に赴く装備に見える。

だけど私は、不思議に思わなかった。当たり前とさえ、思えてしまう。だって、あれが普通だったから。私の部屋に入り、私と接触する人たちは、皆あの格好をする。なに一つおかしい所などない。これが、私にとつての、普通。

白い防護服を着た人たちに話しかけても、彼らはなに一つ返事をくれない。基本の挨拶も、体調を気遣うような言葉も、雑談ですら無視を徹する人々を、私は密かに『沈黙せし者』と呼んでいた、気がする。沈黙を保ち続ける、という訳でもなく、彼らは私の健康状況を、部屋の外にいる誰かに報告するように一人で話すのが基本だった。

『沈黙せし者』……我ながらおかしな命名、と自分でも思っている。けれど、それ以上似合う名前なんて、私には思いつかない。

だって私は、外界と接触する事なんて、できない身なのだから。

映像はそこで途切れてしまい、また別の場面が、ノイズと共に浮かび上がった。

あの白く無機質な部屋の外へ出してもらえた私は、防護服ではなく、白衣を羽織った人たちと一緒に、機械だらけの空間にいた。どれもが見慣れない機械で、最新鋭の装置が配備された部屋……かもしれない。医者のような、研究員なのか分からない白衣の男は私の血を採取し、薬物を投与しながら、『塩』と『赤い目』がどうだの言っていた。でも、なにを指して言ってるのか、さっぱり分からない。

「痛くはないかい？ そうだ、飴をやろう！ 少し気を紛らわせるよ！」

「…ありがとう」

こちらの容態に気をかける一人の白衣の男は、ポケットからカラフルな包みを取り出し、私に差し出す。僅かではあるが、甘い匂いが漂ってきて、断る理由もない私は礼を口にしながら、その飴をありがたく受け取った。

よく考えたら、あれは飴じゃなかった、かもしれない。だって、毎回あの飴を食べると、意識が遠のいてしまい、目が覚めたらいつの間にか自室で目覚めるのだから。あれは、睡眠薬かなにかが混ざってる代物かもしれない。

でも、どうして私にそんなものを渡したのか、見当はついてる。

私は、この真っ白で狭い世界でしか生きる事を許されてない者で、彼らに飼われてる籠の鳥。彼らは私を利用して、なんらかの研究をしてるのは、物事を覚える前に気づいていた。この施設で生まれ、育ち、今の今まで様々な人たちと接触していくうちに、自分が飼われた被検体なのだと理解した。彼らが口にしていた『塩』や『赤い目』の問題は、おそらく私の血か細胞で解決できるかもしれない。もしかしたら、その敵と対抗、ひいては消滅させる要素を持つてるかもしれない。

けどまあ、普通の知識がない私の、役に立たない推測なだけだ。なに一つ私に話さず、一方的にニセモノの善意を押し付けてくる者たちが、本当の事を話してくれるなんて期待してない。日課のように私の血液を採取し、ある時期からDNAやら遺伝子やらに拘り<sup>こだわ</sup>始めるようだけど…世界が抱える問題なんて知らせてもくれない、私の血を使う目的も明かさない、軟禁に近い状態の生活を過ごしてる私に、できる事なんて自分なりに周囲を分析するくらい。

ああ、でも、一度でもいいから、見てみたいかも。外の世界。この白い空間じゃなくて、美しい外の世界を、見てみたいな。

同じような日々が繰り返される中、ある日、白衣の男たちは私をとある装置の中に放り込み、寒さで眠りに落ちる寸前に、一言だけ聞き

取れた。

「抗体——無理——同じ——被検体——を——！」

そうして、私は長い、永い眠りについた。赤い目をした、特別<sup>ア</sup>個<sup>ダ</sup>体<sup>ム</sup>に起こされるまでは。

## 人形達は人類を思ふ

### ― 奪還前の思案

「推薦：対象アカネの救出に備え、装備、および各種アイテムの補充」  
守護すべき人類が攫われた知らせを受け、すぐにでも転送されたマップ情報の目標地点に向おうとする二人を制止し、二人に準備を整うためのアドバイスを渡すポッド255。走る動作を止め、ピタリと動きを停止させた2Bと9Sはしばらく沈黙し、思考したのちに、仕方なく頷いて同意する。

向こうはそれなりの計画を練ってからアカネを攫った者、あの狡猾な特別個体だ。準備も対策もなしに向かってしまえば、返り討ちにされるどころか、大事なアカネを奪還できず、下手したら彼女が永遠にアイツに束縛される可能性だってある。

憎たらしいアダムの勝ち誇った笑みを思い浮かべた9Sは、2Bと共にキャンプへ戻る最中でさえ隠しきれない殺気を漂わせていた。アカネを救い出したら、どうやってアイツを苦しめてやろうかと、スキャンタイプS型の持ち前である優秀な頭脳演算能力をフル稼働させた。それを察知したポッド153は「警告：保護対象の許容範囲を考慮すべき」となぜ

か9Sを阻止するのではなく、アカネを気遣うような言葉を告げた。それを聞いた9Sは、ハッと驚き、移動しながら頷いた。

「そうだな、アカネさんを怖がらせたらダメだよな……」

「……9S、彼女は争いを好まない」

「でも、相手はあのアダムですよ？どんな汚いやり方をしてくるか分かったものじゃありませんよー」

「それでも、彼女に知られるわけにはいかない」

彼女は、アカネは繊細で、守るべき愛しい存在。彼女の目を、彼女の体を、彼女の記憶をアダムの血濡れた姿で穢すなど――ハツキリ言って虫酸が走る。

自分たちの創造主で、かつて人類が所持していた聖書に登場する神聖な存在かのように、彼女もまた、天界を統べる聖なる存在に違いない。そんな彼女が、人間に仇なす存在に汚染され、怪我を負うなど



……許されるはずがない。

だから、彼女に知られず、血まみれの現場を目撃させてはならない。彼女に嘘をついてしまうのと同じ行為なのは、百も承知してる。けれど、あんなヤツを見逃すわけにはいかない。

アイツは、滅ぼすべき存在だ。

「2Bだって、同じこと考えてるじゃないですか」

「……そう、だな」

「ずるいな……仕方ない、どうにか隠せるように動きますね」

アダムの抹殺はいつの間にか決定事項となり、キャンプを目前にする2Bと9Sは、アカネを救出する計画を思案しながらも、同時に彼女の目に届かないところでアダムを消滅させる方法を考えるのだった。

### ――贖罪のココロ

レジスタンスキャンプに帰還したヨルハ機体の二人は、真つ先に治療区域に放り込まれた。

本人たちがアカネの救出ばかり考え、自身の機体の状態に気づかなかったらしい。それを発見したのは、たまたまキャンプ内を散策していたデボル<sup>双</sup>とポボル<sup>子</sup>だった。お世辞にも大したことないとは言えない二人の義体を見て、ほかのレジスタンスと協力して彼らを治療区域にぶち込んだ張本人<sup>三人</sup>でもある。

あまりにも唐突に引つ張られ、強制的にベッドに寝かされたおかげで、2Bと9Sも驚きを隠せなかった。なにしろ、あの大人しそうなポボルでさえ血相を変えて、機械生命体と戦ってる時の自分たちに負けない気迫で迫ってきたのだから。デボル曰く、自分を大切にしない奴が嫌いらしい。それはつまり、アカネの事ばかり考えて、自分の身を大切にしなかった自分たちに当てはまると。

「し、心配をかけて、すみません」

申し訳なきで声のトーンも思わず低くなり、目を合わせるのも少し気が引けて、隣のベッドで横たわってる2Bに視線を向く。9Sと同じことを考えてるのか、それともただ単にぼーっとしてるのか、彼女

はじつと空を眺めていた。心なしか、少し落ち込んでるように見える。

少しは反省の意を見せてくれた二人に思わずため息を吐き、デボルは腰に手を差し、やれやれという風に苦笑いを浮かべる。まったく、<sup>彼女</sup>アイツのことになると周りが見えないな。そんな考えを頭に、デボルは2Bのメンテナンスを施しながら、己の半身であるポボルに視線を向ける。彼女といえは……さきほどからずっと無言の状態を維持し、9Sの義体のチェックとメンテナンスを施しずつも、どこか不安そうな気配を漂わせていた。

ココロ優しいポボルにとって、誰かが傷ついたり、亡くなっていくのは耐えられないものであり、もっとも身を<sup>殺す</sup>削る物でもあった。

植えつけられた『<sup>プログラム</sup>贖罪』が、彼女にその感情を発生させた要因でもある。大昔に、彼女らと同じ機体だった者たちがとある計画を大破させてしまい、最終的に人類側に大きな損失を負わせることになり、以降<sup>デボル</sup>と<sup>ポボル</sup>の機体の多くは処分されてしまった。彼女らが未だここに存在してるのは、同じ過ちを起ささないように、観察と監視のためだけに置かれた<sup>生かされた</sup>のだ。

一人でも多く救い、一人でも多く生かす。それが現在の二人の存在価値であり、唯一生かされたもう一つの理由でもあった。いつか、処分されるその時まで。ずっと、ずっと――

「はい、これで大丈夫よ」

また一人、仲間を助けたことで安堵を覚えるポボルは無表情を打ち破り、柔らかな微笑みを浮かべる。無意識で見せてくれた表情なのか、さきほどとは打って変わった光景を前にして、困惑せずにはいられない9Sだった。今回を含めて、まだ二回しか顔を合わせてないが、ポボルが常に優しくして柔らかな笑みをするのは気づいている。

ヨルハ機体の中でも比較的<sup>アカネ</sup>に感情に左右されがちな9Sからしてみれば、ポボルはおそらく、<sup>アカネ</sup>彼女と近いモノを感じ取る機体だと。もしアカネがこの場にいたら、きっと彼女も、ポボルと同じような反応をするかもしれない。むくれて、けれどやはり心配でならないと表情で伝え、無事でよかったと安心する顔を見せてくれるのだろ

う。脳内でシミュレートされる映像は、今のポポールとほぼ変わらない表情、動きをするアカネの姿。アンドロイドとヒトという種類の違いこそあるが、その気持ちが嘘偽りのないモノなのがハッキリと分かる。

上半身を起こし、ポポルのほうに視線を向ける9Sはもう一度謝罪を述べ、間を置いてから「ありがとう、ポポール」と重ねて礼を告げる。その言葉に、小さく口を開き、どこか驚いた様子を見せる彼女の姿があった。はたしてなにに対して驚いているのか、9Sには分からないし、理解しようにも、その意味を理解することなど不可能だろう。

なぜなら、ポポールが表す感情、感じたものは、彼女にしか分からないモノだから。

「……ううん、貴方が無事で、よかったわ」

安心した顔と、どこか困ったような笑みと合わさり、今の9Sでも深く理解することのできない表情を見せてくれたポポールに対し、ただただ呆然と頷くしかできなかった。

9Sは思った。アカネさんなら、この表情の意味を、感情に理解を示せたのだろうか？

丁度その時、2Bのメンテナンスも終了したのか、隣から「さ、これで終わったぞ。もう無茶するなよ？」というデボルの声が届き、反射的にそちらに振り向く。腕を抱え、若干足を開いて立っている姿はどこか男らしく、彼女のちよつと豪快した性格を表しているようにも見えた。ベッドから降りた2Bは言葉を発する代わりに、コクリと頷く。あまり感情を出さない2Bではあるけど、感謝の気持ちはちゃんとあるのだと、9Sは分かっている。

もう少し、言葉で示してくれたら、きっと彼女も上手く仲間たちと交流できたのに。口には出さず、密かに考える9S。もちろん、それは2Bには内緒であった。

— あなたの存在影響

一旦落ち着いたのはいいが、なぜ2Bと9Sの二人が己の状態に気づかず、まるでなにかを急いでもうようになっていたのか、気になった

デボルとポポルは浮かんだ疑問を口にする。

レジスタンスキャンプに帰還した途端に連行され、こうなった原因を話す余裕などなかった。当の本人たちも申し訳なきで話すタイミングを逃し、彼女たちに謝罪と感謝を述べるだけで精一杯だった。困惑してるデボルとポポルを前に、どこから話せばいいのやらと思考に陥る9Sを横目で確認し、ならば私が説明しよう、と頷く2Bは軽く情報を整理してから、口を開く。

「8時間前、超大型機械生命体との戦闘が発生した。敵のEMS攻撃によって私達の機能が一時停止し、その間に彼女が……アカネが、特別個体に攫われてしまった」

「……え？」

彼女が……?と信じられないように眩き、感じたことのない喪失感に耐えきれないのか、ふらついたポポルを受け止めるデボルも苦い顔をしており、2Bたちから聞いた事実を受け止め切れない様子だった。顕著な動揺を示す彼女たちを視界に収め、2Bは思わず下唇を噛み締める。

元はと言えば、自分たちが甘かったのだ。彼女なら上手く敵を躲せる、彼女ならば無事安全な所に到達できる。何度も何度も己を催眠するかのように、彼女ならば、と自分を説得する考えを並べ、機械生命体との戦闘に専念した。だが、得られた結果はどうだ?苦戦しただけでなく、敵の攻撃で気絶し、絶対に失ってはならない最後の希望<sup>ヒト</sup>さえ奪われた。

なにが最先端の技術か、なにが優秀なヨルハ機体だ!彼女がいなければ、私たちに存在の意味などない!彼女がいるからこそ、私たちは戦える、生きる価値を与えられたのに!彼女無くしては、なにも意味を成さない。

私たちの存在意義は、彼女<sup>アカネ</sup>なのだから。

湧き上がるこのどろどろした感情は、怒りでも、憎悪でもない。これは、紛れもない悔しさだ。己の力を過信し、彼女をこのような事態に巻き込んでしまった。彼女がくれた信頼も、誇りも、なにもかも無駄にして、彼女の期待を裏切り、踏み躪<sup>にじ</sup>ったのだ。

取り戻さなければ

とりもどさなければ…

とりもどさなければ……

「2B!!!」

「っー!」

黒く塗りつぶされた視界に光が差し、眼前に広がったのは、焦りを宿した声を発する9Sと、彼の歪んだ顔だった。一体、なにが…? ゴーグルに覆われた目を瞬かせ、状況を正確に掴めることのできない2Bを見て、彼女がどういう状態になったのか、慌てず、彼女が理解できるように丁寧に説明を始めた。

「うわごとのように、取り戻さなければと口走っていました。アカネさんを心配するのは分かりませんが、あまり、一人で背負わないでください」

「ないん、えす」

「僕と、デボルとポボル、仲間がいることを、どうか忘れないでください」

僕たちは、同じ思いを抱える同志です。彼女のために奮闘し、唯一彼女を護り切れる存在です。

無音だった世界で、9Sの言葉は、2Bの中に入っていく。脳内で鳴り響いたエラーの音もようやく認識できて、暴走に近い状態に陥りかけたと気づいた。歪みかけた視覚情報も正常になり、ぼやけていた9Sの姿を正常に確認できた。己の肩を掴み、必死で呼びかけたの

か、服が少しだけシワが付いている。切羽詰まって、危険な状態になつてしまう状況だったのだろう。

「ありがとう、9S。迷惑を、かけた」

「大丈夫、大丈夫ですよ、2B。彼女は絶対、大丈夫です」

胸を撫で下ろす言葉はヨルハ部隊の二人だけでなく、間近で2Bの変化を目撃したデボルとポボル、騒ぎに気付いて彼女たちを注目していたレジスタンスたちも、落ち着きを取り戻していた。

ああ、やっぱり、あなたはすごいです。この場になくとも、あなたの存在だけですべてに影響を与えてしまう。それほど、あなたが大切で、かけがえのない存在だったんですね。あなたがくれた魔法の言葉があるなら、僕たちはきつと力をもらえる。あなたを救うための、力が。

「行きましょう、2B。アカネさんが、待っています」

「…ああ。行こう」

万全な状態に切り替えたヨルハ部隊の二人は、人類を必ず救い出すという強い信念を持ち、見送ってくれた仲間たちの思いをも背負い、踏み出した。

## 人形の出撃

— 騒音苦情の登場

決意を抱き、レジスタンスキャンプの仲間たちによる協力も得て、アイテムの補充、チップの更新、及び装備のアップグレードも済ませた。ポッド255から転送されたデータに基づいて、目的地へ向かうはずだったが——

廃墟都市を高速で徘徊し、調子外れた奇怪きっかいな歌を……歌ってるのか、あるいは放送しているか分からない、奇妙な機械を発見した。

「…2B、あれ！」

「機械生命体——じゃない？」

ラズベリー色とダックブルーに近い色をしたあの機械はなんなのか。疑問を思った9Sはすぐにデータベースにアクセスした。調べ上げると、かつて人類が発明し、創造した『三輪自動車』であるを知った。それをベースに胴体や足とし、首には装飾を意味してであろうスカーフを巻き、頭部であろう部分は機械生命体ではない、なにかの丸い物体。

視認する限り、とてつもなく機械生命体に近い外見をしてるはずが、人類の努力の結晶を寄せ集めた謎の生命体とは到底思えなかった。なにより、あのおかしくてならない歌が2Bたちの調子を狂わせる。流れてる音楽は、はるか昔の人類が作りそうなものだが、歌っている音声はどうしてこうも調子がよく、適当な歌詞を当てられるのか理解できなかった。

戸惑ってばかりではいられない。すぐにでもアカネを救出するために、歩を進めるべきだ。だが、やはり気になる。あれをさきに確認しなければ、気になって救出作戦に集中できない予感がする。未だ廃墟都市を高速で徘徊する生命体を横目に、2Bと9Sは目を合わせ、互いの意思を確認し、頷く。

そこからの行動は素早かった。歌を放送しながら駆けまわる生命体を全速力で追いかけて、ポッドによる射撃も合わせたおかげか、なんとか足を止めることに成功。撃たれた拍子で空中に打ち上げられ、地

面に二回ほど衝突してようやく着地し、走行を停止した生命体に近づく。

「いたたたた……あつ！あなた方は……先日の！」

正面に回り込み、頭部であろう丸い物体を見た2Bたちに声が降ってきた。少年に似た声を発したのは紛れもなく不思議な顔をした頭部で、記憶領域を探った二人の脳内に浮かべたのは、つい先日こなしたとある依頼で発見した、機械生命体の頭部の中から出てきたあの丸い物体。ボディはともかく、あの丸っこい頭部を間違えるはずもなく、完全に一致していた。

とはいえ、当時はアカネも現場にいたことで、さらにはこちらを攻撃する意思も見せなかったので放置し、構うことはなかった。さきに発見したのは2Bたちだが、この生命体も二人に気づいてるのは当然だろう。なにせずっと視線だけを投げ、動きを見せなかったのだから。だが、その生命体はなぜこんなところをうろうろしていたのだろうか。

「初めまして。僕の名前はエミールといいます。見ての通り、シヨップを営んでいます」

「シヨップ……？」

「はい！色々を集めたり、たまにレアな素材も拾えたりしますので、良ければ何か買っていきますか？」

「ま、またあとでお願いします……今は急ぎの用事があるので」

未知の生命体、もといエミールと名乗る彼はどうやら機械生命体ではなく、敵対な態度もなく、むしろ友好的に接してくれた。胴体に乗った商品を見せようとするエミールを制止し、片手をあげて手のひらを見せる9Sの動きを見て、「そうですねか……」と残念そうな声色で話すエミールだったが、すぐさま気を取り直して「ではまたのお越しをお待ちします！」と告げた。

振り返り、再び目的地へ向かおうとする二人を見て、なにかに気づいたエミールは堪らず声をかけ、呼び止める。

「すみません、あの……黒髪の彼女は、一緒じゃないんですか？」

黒髪の、彼女。きっと彼が示してるのは、間違いなく、アカネのこ



とだろう。表情が変わることのない丸い顔は好奇心と、憂う感情が纏っていた。一度しか見かけたことがなく、けれどすぐさま自分たちと同じくアンドロイドではなく、血肉を持った人間だと気づいたのか。なぜ分かったのか気になるが、それよりも真実を伝えるべきか、迷ってしまう。

中立的な態度を取り、さらには敵意もなく接してきたエミールはおそらく、敵になることはない。アンドロイドでも、機械生命体でもない彼はどのネットワークにも存在せず、ある意味独立とした存在、あるいはどちら側にも加担しない中立組織として存在している。真実を伝えてもいいが……敵に情報を渡す可能性もあるゆえ、うまく誤魔化したほうがいいだろう。

脳内で結論に至った9Sは一人で領き、アカネが危機的状況にあることを伏せ、敵の仕業であることも話に挟まず、ただ迷子になった彼女を迎えに行く、とだけ伝えた。

どう答えればよいか、悩んでいた2Bはスラスラと嘘を交え、けれど真実味を帯びた話を口にできた9Sに助けられた。口数があまり多くないため、もしかすれば相手に怪しまれる態度を取ってしまうかもしれない。相手は気前のいいはずであろうエミールでも、初対面ではどうも上手くいかない。戦闘型バトラータイプの自分と違い、話術や技術方面で優れているスキャナータイプである9Sならば、この場を乗り切れる。

現にエミールも9Sの話に納得し、気遣うかのように励ましの言葉と、別れの言葉を口にし、エンジンを発動させて離れていったのだから。

「では気を取り直して……どうしたんですか、2B?」

「……ああ。行こう、9S」

やはり9Sはすごいな。いつしか口にした覚えのある言葉は、そつと胸の内に留めた。今はただ、アカネの救出に専念しよう。考えるのは、それからだ。

――拭いきれないモノ

ポッド255が転送した位置情報によると、攫われたアカネは廃墟都市にある地下洞窟、エイリアンシップへ通ずる道とは異なり、分岐となった道のさき。先導するポッド255のあとを追ひ、日光に照らされることなく、闇に飲み込まれた洞窟のさきには人工的な明かりが一つ、ぽつりと佇んでいる。

「あれは、エレベーター…?」

「警告：これよりさきは未知の領域、また、特別個体『アダム』との交戦を予測。推奨：万全な状態での侵入」

このさきに、アカネと、元凶であるアダムがいる。その事実だけで2Bと9Sはさらに気を引き締め、警告を渡したポッド255を見つめる眼差しも、さらに意志の固いものへと変わっていく。

「2B」

「問題ない」

短い会話、たった一言の会話だが、十分すぎるものだった。このエレベーターに乗れば、後戻りができないのは承知の上。この先へ行かなければ、アカネを救えない。前進しなければ、アダムを打ち勝つこともできない。ならば選り取る答えはたった一つ。

二人の決意に気づいたのか、あるいは再度の確認を済ませたからか、ポッド255はエレベーターの扉から離れ、横にあったボタンを押した。間を置かず開かれた扉、ゆるりと中へと進んでいくポッド255に続き、2Bたちと、あとに続くポッド042とポッド153もエレベーターの内部に入る。

扉が閉まり、完全に密閉とした空間になったエレベーターが動き出し、さらに下層へと目指していく。洞窟の天然な造りとは違い、人工物であると示すかのように平坦とし、金属で覆われたエレベーターがかつての人類の歴史が刻み込まれていた。錆びてもなお形を保ち、動力である電源も未だ生きており、大きな箱を動かしている。自分たちよりも以前に地上に降りたレジスタンスが絶えずに修復し、稼働させ続けたという功績もあるが、大本である人類がコレを製造しなければ、アンドロイドは便利に移動でき、修復できる技術も手に入れないだろう。

アカネさんを救出し、アダムとの戦いの直前だというのに、まさかエレベーターのことで人類の話にまで繋がってしまうなんて……得意な情報収集と解析が、厄介だと思ふ時が来るとは思わなかった。自身のスペックに苦笑いし、大切な彼女を心配するあまり、9Sはらしくもない自虐をしてしまった。

今はそんなことを考えてる余裕なんてないのに、現実から目を逸らそうとしてる。大昔の人類も、嚴重な案件を前にして、思わず現実逃避したくなる気持ちを理解した気がする。だが自分はアンドロイドで、逃げるという選択肢も存在しない。できることとすれば、気を紛らわし、目的地へ到着した時に一刻も早く彼女を救い出すことだろう。ならば今はさきに敵の情報を再分析し、まとめるべきだ。

エイリアンが作り出した機械生命体、その中でも特別個体として生まれたのが『アダム』、およびアダムから生まれた『イヴ』。以前、砂漠地帯にあるマンモス団地の最奥で生まれ、恐ろしいほどに急速な成長を遂げ、アンドロイドの厄介な敵として阻んできた。エイリアンシップで交戦した時、彼らはすでに独自の進化を遂げ、自分たちも互角に戦えるほどの戦闘能力を身につけた。

準備が万全とは言え、無傷とまではいかないだろう。なにより、相手は人質アカネさんの身柄を拘束してる。万が一GameOver気が動転し、彼女を傷つけ、殺してしまえば、それこそおしまいだ。

人類の神秘を知ろうと、暴こうとするアダムなら、アカネ人さんの感情の波動、反応を見るためだけに、僕たちの前で殺すことも厭わないだろう。だがもし、もしも唯一地上に残された彼女を殺してしまえば、ヤツの望むモノも手に入らない。殺すか否か、すべてはアダム次第。

一体アダムはなにを知りたがり、なぜ人類に拘り、アカネを誘拐したのか。本当のことを理解しようとする9Sは考えを巡らせた。

ちらりと、隣にいる2Bに視線を向ける。軽く体を解し、準備運動をしている。ゴーグルを装着してるので、目元が見えないが、揺るぎない意志が宿ってるのを感じる。きつとなにがあっても、義体が酷い損傷を負い、破壊に至ることがあっても、大事なアカネを救うまでは

活動を停止しようとはしないだろう。

ああ、そうだな。今は、アカネさんを救うことに専念すべき。ならば思案するべきことは、彼女を救ってからにしよう。

停止したエレベーター、数秒遅れて開かれた扉のさきまに視線を向けるアンドロイドとポッドは、意を決して外部へと進んむのだった。

## 人形と特別個体の変化

― 複製された記憶の断片

視界に映ったのは、白に近い灰色で統一された景色だった。単調とした色で塗りつぶされ、廃墟都市で目にした倒壊した建物の数々と違い、人類の繁栄が存在していた頃の面影を再現したかのような建築物が広がっていた。地下空間であるにも関わらず、灰色に塗られた空があり、違う空間へ飛ばされたかのような錯覚を覚える。まるで、見知らぬ都市へと迷い込んだように。

しかしここにあるすべては人類の手によって生み出された産物ではなく、おそらく機械生命体であるアダムの手によって作られたもの。本来あるはずの色はなく、不鮮明に再現されたのか、不自然に欠陥した建物もあり、不明のブロックが周囲にあるのがなによりの証明となっている。

「ここは……一体?」

「検知：ケイ素と炭素が含まれる結晶状の物質」

異様な光景を呆然と視界に映り込み、ぼそりと呟いた2Bの言葉に反応したポッド042が検知結果を伝える。だが詳しい情報はなく、データベースを参照しても結果が出てこないのだという。9Sのほうを一瞥するも、彼でさえ理解できていないと言わんばかりに苦い顔を浮かべた。人類を模倣したいがためだけに創造されたこの場所は、あまりにも理解に苦しむ。

人類に強い興味を持つ機械生命体、特別個体『アダム』。旧約聖書『創世記』に記された最初の人間、その名を借りた彼は、<sup>模倣した</sup>どんな手段も厭わず、人間を知ろうとした。意図はなんなのか、理由はなんなのか、知ってどうするのか。人間に造られた我々と違い、人間に似せるために造られた我々を模倣するやつらの最終的な目的はなんなのか。<sup>特別個体</sup>なに一つ分らず、なに一つ掴めない。

ありもしない執着心さえ模倣し、突き動かされたアダムがアカネを攫い、こんな奥深い地下空間まで連れてきた。だがなぜ、やつはアカネの側にいたポッド255を破壊せずに、ただ目当ての彼女を連れ

去ったのか？位置がバレたら、困るのはやつのはず。人類<sup>アカネ</sup>のことを解剖し、人類の神秘とやらを解明し、好きに調べられる絶好のチャンス<sup>アカネ</sup>を、アダムは見逃すはずがない。なのに、どうして私たちを招き入れるような真似を……？

到底理解できないアダムの行動と、読めないやつ<sup>アカネ</sup>の真意に頭を悩ませる2Bは足を止めることなく、進みながらも辺りを調べる9Sと共に奥へと進んでいく。

「見たところ、ここにはほかの機械生命体もないようですが…」

「それでも、油断してはダメ」

「はい。相手はあのアダムですから、どんな手を使ってもおかしくなはず」

響く二つの足音、建物の間から聞こえてくる風の音。無限に続いていくのかと錯覚を覚える道を歩くアンドロイド達の視界に飛び込んだのは、またもや白に統一された人工物。レジスタンスキャンプにあったのと同じ構造をした簡易ベッド、用途不明の機械と、いくつか散らばっている透明の筒。壊れた様子はないものの、どれも地面に倒されており、まるで誰かが意図的に道路に捨てたように感じる。

調べるべく、前へと行く9Sはポッド153にスキャンを命令し、転がっている透明の筒を一つ手に取る。分析結果によると、小さな筒はプラスチック製の保存容器、大きさによつては様々な液体、素材、または食料さえも詰め込む優れた道具らしい。なぜこんな場所に、かつての人間が頻繁に使用したであろう物があるのか。<sup>演算する</sup>考えるまでもなく、アダムの仕業なのが明白だ。

問題は、なぜ自分たちの進む道に置いたのか。情報を与えようとしたのは分かるが、なにを知らせるつもりか、僕たちになにを調べろというのか。敵の考えを読めずにいる9Sは手にした透明の筒を、角度を変えながら眺めるも、張られたラベルもなにもないソレから情報を読み取ることにはなかった。

ふと、視界の隅にあった建物の窓が、ひとりでに開いた。物音に気付いた2Bはすぐさま警戒態勢を取り、体の向きを変え、音を立てながら開いた窓を睨みつける。未だしゃがんでる9Sも同様に警戒し、

ゆつくりと立ち上がり、慎重に窓のところまで移動。なにか動きがあれば、もしくは9Sを襲うかもしれないなにかが現れた時に備え、静かにポッド042へ射撃の準備をさせる2B。

物音を立てず、無音の移動を心がける9Sはそつと、開かれた窓の中をのぞく。街の色よりも純粋な白で塗りつぶされ、なにもない室内がとても殺風景に見えた。予測でしかないが、おそらくこの部屋の外に無造作に捨てられたベッドや機械は、元々中であつたものだろう。なぜ投げ出されてしまったのかは疑問に思えるが、原因を知ることはないだろう。

部屋をあらかた確認した9Sの視線は、部屋の中央に置かれた鳥籠に留まつた。中には囚われた鳥もなければ、カギとなるアイテムもない。どういった目的でここにあるかも分からず、しかし意味を感じさせる配置に9Sは思わず沈黙に陥るも、無意識に疑問を口にした。

「どういう意味だ…?」

「不明。予測・敵の罠。もしくはアカネに関する情報。推奨・奥への探索」

「……ああ。そうしよう」

これは、僕たちですら知らない、アカネさんの記憶の一部。それを再現したほんの一部だ。あの殺風景な部屋といい、外に放り出された機械や透明な筒も、味気のないものばかり。

記憶がなく、外の世界を新しい発見とする発言、敵味方誰に対しても警戒心が皆無のように接する……かつての人類にながあつたのかは、知らない。けど、あまりにも無垢なアカネさんはきつと、普通の生活を送つてはいなかっただろう。病院生活、あるいは研究施設で保護されていた、異常な暮らし。

考え得る可能性は、この二つ。どちらかが正解かは知らない。答えを得るには、前に進むほかない。後方で待機している2Bに視線を向けると、同意するかのように頷いてくれた。

「では、行きましょう」

きつとこのさきに、アダムが待ち構えている。アカネさんも、きつとそこにいるのだろう。彼女が傷を負わず、無傷でいてくれることを

願うが……卑劣なアダムが、アカネさんを傷つかずにいることは考えにくい。もしも目の前で彼女を傷つけたら、その時は――  
迷わず破壊してやる。

――すぎさつていくとき

狭くて、暗くて、冷たい空間。

ここはどこなのか。

なぜここにいるのか。

いつからここにいるのか。

理由を知ることはありませんでした。

――見つけた宝物

時折見かける機械や透明な筒、白衣であろう衣類を視界に入れながらも続いていく道を慎重に進み、ついに二人は最奥へと辿り着いた。建物に囲まれた広場のような空間、正面の時計塔に似た建物の二階にはテラスのような場所があり、設置されたテーブルの前には――  
――紛れもなく、2Bたちが探していたアカネ本人の姿があった。

「アカネさんっ!」

反応を見せることなく、気絶してるのか、ぐったりと動くことのない彼女を発見した9Sは前へと駆けるが、転がってきたブロックに道を阻まれ、急停止するほかなかった。

「9S!!!」

「なっ…!?!」

突然2Bに引つ張られた9Sは状況を掴めずに後退させられ、一体なにが?と疑問に思った瞬間、ブロックが意思を持ったかのように分裂し、9Sがつい先ほどまでに立っていた場所を攻撃した。一秒でも判断が遅く、回避していなければ、間違いなく深手を負っていただろう。ポッド153から「警告:ヨルハ機体9S、バイタル低下」という音声が流れるが、ようやく自身に迫る危機を把握した9Sは堪らず渴いた笑いを漏らし、体温が低下してる錯覚さえあった。

危機的状况に置かれてるにも関わらず、9Sの脳内をよぎったの



は、人類が残した『冷や汗をかいた』という言葉。いくら人間に似てるとは言え、機械でできたアンドロイドにはそんな機能など存在せず、あくまでも疑似的な感覚。だがたしかに、そういった感覚を味わった。

攻撃に失敗したブロックは転がりながら散っていき、いつの間にか姿を現したアダムの元へと戻っていく。アダムを視界に入れた2Bたちは直ちに体勢を立て直し、手に馴染んだ白の契約白き刀と黒の誓約黒き刀を握り締め、敵の動きを捉えながら近づいていく。警戒しながら接近してきた二人を目の当たりに、ゆるりと右足を下げて膝を曲げ、右手で左肩に触れ、屈む動作をしながらも2Bたちを視界に捉えた。

貴族もどきのお辞儀を実行して見せたアダムを前に、アンドロイド達の反応はない。今すぐにも切り捨ててやりたい、全身から発している気配に察知したアダムは、なおも愉快でならない、不敵な笑みを見せている。

「ようこそ……わが街へ」

人類に興味があるんだ。そう語り始めたのは、機械生命体である彼らがどれほど人類に興味を持ち、どこまで人類を理解し、記録を読み解いてるだけで、その複雑さに魅了される。今2Bたちとアダムが存在しているこの場所街も、人類への渴望が生み出した場所の一つと述べた。それだけではない。この街にはたった一人の人類、大地に残された人間彼女の一部の記憶をも再現した場所でもあると。

無垢で、哀れで、狭い世界しか知らぬ可哀そうな人類、アカネ。忘却の彼方になり、しかし健気にも残酷な真実を思い出そうとする姿……記録にあった、欲にまみれた人類とは正反対で、あまりにも純潔だ。だが、彼女にも生きる渴望があった。過去を忘れようと、今がどれだけ過酷だろうと、未来がどれほど絶望に満ちようと、我々機械にはない『生』への渴望を持っている。

「実に、実に美しく、儂い……まさに崇高そのものだろうか？」

だが、私は気づいた。人類の本質は闘争……戦い、奪い、殺し合う。それが人間だ！たとえアカネ本人がどれだけそれを拒み、否定しようが、『生』への渴望、執着がある限り、根深く刻まれた本質を変えるこ

となどでできない！人間とは、そういう醜い生き物だ!!!

「その口で、人類を……アカネを語るなッ！」

「貴様に、アカネさんを語る資格なんかないッ！」

未だ演説を続けようとするアダムに斬撃を行うも、突如と出現したバリアに弾かれ、二人はやむを得ず後方へと飛び退くしかなかった。話を阻まれたアダムだったが、攻撃を受けたことでさらに上機嫌になり、宙に浮くブロックで反撃し始めた。

「崇拜する人類を、敬愛する彼女を悪く言われて気を悪くしたか？」

一撃、また一撃と、止めどない攻撃を仕掛けてくるアダムは未だ口を閉じる気配はなく、集中攻撃を受け、防御に専念している9Sは顔を歪ませ、歯を食いしばりながら睨みつける。

「黙れ、これ以上アカネさんを語るなッ！」

隠すことなくむき出しになった殺気をぶつけられ、タカラモノ<sup>憎悪</sup>を見せつけられ、狂喜にも似た感情を覚えたアダムは狂ったような笑いを上げた。同時に9Sの防御の体勢を崩し、一撃を入れようと拳を上げる——が、2Bの動きを勘づき、瞬時に9Sを突き放し、その反動を利用して2Bの刃を避けた。

咄嗟に受け身を取った9Sは片手で地面を押して宙を舞い、アダムから距離を取りずつ、着地したと同時に片膝をつく体勢になった。だがさきほどの衝撃で、しばらくは立ち上がれそうにない。9Sの状態を悟った2Bは即時に彼を庇い、アダムとの隔たり<sup>な</sup>を成した。

アダムの言葉に釣られ、怒りで目がくらんでしまったが、戦闘に特化した自分とは違い、9Sはハッキングを得意とするタイプの機体。無暗に前へ出ては、殺<sup>破壊</sup>されに行くようなもの。彼女を救いたい気持ち<sup>は</sup>分かるが、被害を最小限に控える方法を取るなら、積極的な攻撃ではなく、後方支援に回った方がよさそうだ。

「9S、後方支援を頼む」

「でも……」

「無理に接近戦に持ち込まなくていい、危険を感じたら援護射撃をしてくれて構わない」

「……分かりました」

視線をアダムに定めたまま、9 Sが立ち上がるまでアダムと対峙を続けていた2 Bは刀を構え直し、攻撃のタイミングを見計らう。再びアダムの元へ集うブロックの動きを警戒し、後方で動き出した9 Sの信号を捉え、注意を引くため、先制攻撃を仕掛けた。

地面を蹴り、アダムに向けて一直線に走り出した2 Bを援護するため、後方で控えている9 Sはポッド153に援護射撃の命令を下す。眼前に迫る2 B、左右の退路を塞ぐ9 Sの援護射撃。上へ飛んでも叩き落され、迎撃してもただでは済まない。

ヨルハ機体の二人による攻撃は確実にアダムを追い込み、反撃の余地すら与えない。が、簡単に阻止されるアダムではない。アダムの目前まで到達した2 Bが刀を振り下ろしたのと同時に、光の繭がアダムを包み込み、刃の衝撃で地面から細かな破片が飛び散る。

予測できない行動に呆気を取られた2 Bだが、マンモス団地でも同じ状況に遭遇していた彼女と9 Sは瞬時にアダムの狙いに気づき、回避行動に移る。走り出した2 Bと9 Sを追うかのように光の柱が出現し、挟まれた地面から破片が飛び出すも、凹みを作ることはなかった。数秒も経たずに追跡攻撃は停止し、急停止した2 Bは再出現したアダムの位置を確認すると、もう一度攻撃を仕掛けた。

「——無限に続くデータに、生の実感はない。死の概念を理解するには、命を懸けて戦う必要がある」

激しい攻防が繰り返される中、途中から再開されたアダムの語りを耳にした2 Bと9 Sは不意に立ち止まり、アダムの周囲に浮かぶブロックが同時に地に落ちる様を目撃する。やつは、機械生命体とのネットワークを切り離したのだと、理解した。今のやつには無限に続くデータは<sup>命</sup>なく、致命的な一撃さえ与えれば、容易に破壊<sup>殺せ</sup>できる。

だが、なぜだ。なぜそうまでして死の概念を理解しようとする。あれほどアカネに執着しておいて、なぜ今になって死を求める。

「さあ、殺し合おう！」

なぜ……命<sup>魂</sup>もないのに、人類を模倣する。

―― 辿り着いたモノ

命とはなにか、機械と自動人形の分別ぶんべつは一体何なのか。アカネのために戦う自身は、どういう存在なのか。生死を分かち合いの最中でも、数えきれないほどの疑問が頭を埋め尽くした。

頭にある疑問の数々を振り払おうと、無心に猛攻を続け、ついにはアダムの余裕を崩し、怯んで隙を見せた。その一瞬を、2Bは見逃さなかった。

「はあああああ!!!」

これで、すべてが終わる。特別個体、アダムを完全に排除できる。アカネを攫った張本人、地球を廃墟へと化したエイリアン仇の産物を消せる。殺意が籠った感情を胸に、刀を握り締め、突きの構えを取る2Bは一直線にアダムへと突っ込み――

「……」

生々しい感触が、伝わってくる。ジワリと、濡れた液体が刃先を赤く染めていく。

「……っ、……だ……。お……ねが……い……」

赤が、広がっていく。鉄の匂いが、漂い始める。か細い声が、耳に届く。正面を向けているのは、痛みで苦しむ表情を見せる彼女。

小さな体を貫いたのは、人間を守るはずだった、人形の刃。2Bは、仕えるべき人類を、守るべきヒトを、傷つけてしまった。眼前の光景を信じられずにいた2Bと、後方にいる9Sは体内に鳴り響く警告音すら聞こえず、呆然としている。

本来その身で刃を受けるはずだった敵は突き飛ばされ、尻もちをついて、己の代わりに致命傷を負った模倣対象カノシを見ていた。

己の体内に流れる液血に似たなにかとは違い、その液体こそが自分生命の流れが求めているモノ、死の概念の一部、人類が生に執着する要因の一つ。ああ、そうだ。これが、これこそが私の求めていたモノ。間近で観測できるとは、なんと運のいいことか。実体験を阻止され、拳句は唯一のサンプル

ルを失うのは好ましくないが、君には感謝してもしきれないようだ。だが、なぜだ。なぜヨロコビよりも、締め付けられるような、おかしな感覚が私を襲うのだ。なんだ、なんなんだこれは。一体何なのだ！

人間の本質は闘争、醜いカタマリ。欲望にまみれた人類に、純白な部分など存在しない。命を投げ捨ててまで、己以外の存在を……違う命にかを救うなど、ありえるはずがない。ましてや、望んで死のうとした私を、君を攫った、人類の天敵を。

体の向きを変えず、辛うじて後ろへと振り返ったアカネは口の端から流れる血も、真つ青になった顔も気にせず、アダムに目を向ける。彼女の命が、魂が、消えていく。流れていく血が、彼女に残された時間を削っていく。それを一番理解してるのは彼女自身だというのに、恐れもせず、ひたすら己を攫ったアダムを庇った。

安堵を覚えた眼差しをアダムに向け、一度瞬いてから、再び2Bたちに視線を戻す。瞳の中に秘められたのは、懇願の意。祈るような気持ちを含めたもの。

「彼、をつ……アダム……を、ころさな……で……？」

貫かれた体は力を失くし、ずるりと抜けていく刃から解放されたアカネは倒れていく。地面に衝突させてはならない。無意識に考えたアダムは両手を広げ、咄嗟に彼女を受け止める。隙を見せてはいけない、ましてや警戒しなければならぬ相手に、腕の中にいる彼女は、ぐったりと弱り切った体を完全に己に委ねてる。

このままにもせず放っておけば、間違いなく死ぬ。直接触れてるアダムには、その事実をよく理解していた。一刻も早く血を止め、適切な治療を施さなければ、彼女は死ぬ。己の腕の中で、苦しみながら死んでいく。本来ならば、喜ぶべき貴重な観察となるが……『死』の概念を別の方法ルートで知ってしまったアダムにとって、アカネの死は必要なくなった。

彼女が絶望に満ち、未知で溢れたこの世界でどのように生きるか、観察したい。今のアダムに必要なのは、もはや死の概念ではなく、彼女の生き様と、彼女の命の軌跡。

一刻も争う事態の中、唯一動き出してるのは他の誰でもなく、敵だったアダムと、アカネをサポートするポッド255だった。

「チツ：応急手当だ、道具を出せ」

「了解」

人類の様々な記録を読み解いたと言えど、実際に人間の治療に当たるのは初めてのはず。なのにその手つきは初めてとは思えないほど熟練されたもので、最先端の技術を有するヨルハ機体である二人でも到底真似できないものだった。

状況を把握しきったのか、ようやく反応を見せた2Bはアカネを引つ張り出そうと、手を伸ばす。が、気づいたアダムが睨みつけたことにより、ぎこちなく止まってしまう。予想だにできなかったアダムの反応にぎよつとしたが、敵である彼がアカネの身柄を拘束してる以上、救出するべきだ。だが彼女が重傷を負ってる隙に、とどめを刺すことも考えられるゆえ、衝動に任せて動くのも禁物だ。

「なんのつもりだ」

「見ての通り、アカネの命を繋ぎ止めてるが？」

「……なんで、助けるような、真似を」

「人類を理解……いや。<sup>アカネ</sup>ヒトを理解するためだ」

所詮人間の本質は、彼女の本質とは限らない。生に執着し、死を恐れず、絶望に怯えずとも真実へと向かう彼女の意志。実に興味深く、果実のごとく甘美な存在。こんなところで死なせては、惜しいものだな。

隠しもせず、己の欲望をさらけ出すも、ぐったりとしているアカネの体を優しく抱き上げる動作を、2Bたちの目にはとても矛盾に見えた。人間を傷つけようとした手が、人間を守っている。アダムの中でどのような変化があったか、二人には分からないし、分かりたくもない。こいつの手からアカネを解放するべきだが、今は、彼女を救うことの先決だ。

この状況から察するに、やつは間違いなくレジスタンスキャンプに向かうつもりだろう。こちら側の一方的な決断だが、さきにアネモネにメッセージを送った方がよさそうだ。メッセージを出すように



かかっちゃ——ザザッ』

ポット153による独断で通信を切断され、最後に聞こえた9Sの焦った声は、間違いなく2Bがアダムと揉め事を起こしてる事を指してるのだろう。なぜ二人がアダム達と一時的な停戦協定を結んだのか、なぜアダムがこちらに向かっているのか、なぜ……

ああ！考えれば考えるほど訳が分からなくなってくる！ヨルハ機体は謎が多く、昔の二号と同じくヨルハ機体とは思えないほど神秘的な集団になったが、やはりなにを考えてるのかわからん！

「はあ……心労が増えるとは、このことだろうか」

片手で額を覆い、やれやれと頭を横に振りながら、ため息を吐く姿は苦労人のソレだった。間違って停戦協定を結んだ相手を攻撃したりしないためにも、仲間達にこのことを伝えましょう。あの双子にも、色々と準備してもらおう必要がある。

「みんな、聞いてくれ！今から——」



# I Fの話 R a i n

今日の地球は、土砂降りの雨だ。夜こそなくなったが、最近になつて、この<sup>地上</sup>の天気の変化もようやく普通に戻つたらしい。晴天になり、曇りもなり、雨も降るようになった。降り立つ人形と機械以外、小さな生命に満ち溢れた地上に、また一層、生気が戻っていく。シャーシャーと降り注ぐ雨の音が鳴り響く、廃墟都市のみならず、地上全体が雨に打たれてるような音だった。久しぶりの変化に、アンドロイドたちは慌ててテントの中に戻り、外へ出ようとした者も逆戻りした。無論、2Bや9Sも例外ではない。

しかし、静かに歩み出す者がいた。長い襟が下がった黒いシルクコート、白いシャツ、ブラウンの短パンに短ブーツ。見知った格好をしていたその者は、そう遠くない過去に発見した、この地上で唯一生き残った人類だ。コートのボタンも留めず、傘も差さず、空の下に晒された広場に踏み出し、ずぶ濡れになつていく。

黒い髪が濡れていく、僅かに露出した白い肌が濡れていく、コートもシャツも、なにもかも濡れていく。なのにその瞳は、感情が籠つてなかつた。口には、笑みがなかつた。

「…アカネ？」

いつもと様子がまったく違う彼女を目の当たりにして、2Bは眉を顰める。普段は優しく、柔らかい雰囲気を滲み出す彼女がなぜ？それが、<sup>2Bと9S</sup>アンドロイドの考へてることだ。だが次に考へたのは、風邪を引いてしまうかもしれないアカネを連れ戻す。データによると、人類は長らく雨に打たれると、病にかかってしまう。それだけじゃない、熱すぎたり、寒すぎたりしても、人間は簡単に病んでしまうのだ。

繊細で、華奢で、弱々しい人間<sup>ヒト</sup>。だから、守らなければならない、大事で大事でならない、彼らの大切なヒト<sup>創造主</sup>を。

雨に構わず、外へ出た彼女に走り寄って行き、アカネの肩に手を置く。ビクツと体が跳ね、ゆつくりと2Bの方に振り返る彼女の顔に

は、僅かな困惑が見られた。ああ、よかった、少しだけいつもの彼女に戻ってる。2Bはそつと、自分の胸を撫で下ろす。

「風邪を引くから、戻ろう?」

2Bの言葉に、彼女の唇は薄く開かれる、思考に陥って数秒、喉から這い上がりかけた言葉を飲み込むように、口を固く閉ざす。ぐるりと、隣に立つ2Bから視線を逸らし、またじつと、空を見上げる。珍しく自分の意見を主張する…:ような反応をした彼女を見て、驚きを隠せない2Bだった。普段ならば、ニコリと、柔らかい微笑みを浮かべながら頷き、ゆつたりとした歩幅で自分のあとについてくるのに、今日は全く逆の反応が返された。

いわば、少しだけショックを受けてる。

ぎこちない動きで、未だテントの下で雨宿りしてる9Sに救援の視線を向ける。ハツと意識が戻ったように、2Bの視線に気づいた直後、小走りで二人のところへ駆け寄った。微かに荒い息遣いを整い、頭を傾げて困ったような口調で言葉を紡ぐ。

「どうしたの、アカネさん?ひとまず、雨宿りしませんか?このままだと、病気になっちゃいますよ…」

彼女を憂う気持ちを伝えても、今度は反応などまったくなく、依然と空を眺めている。表情はなく、感情もなく、無に等しい顔。二人は、違和感を感じたのだ。雫が滴る彼女の横顔は、どこか、遠い所を見ていた。雨に濡れた彼女の横顔は、寂しそうに見えた。洗われていく彼女の横顔は、悲しく見えた。

ねえ、アカネ。あなたは、一体、なにを思ってるの?どうして、そんな風に空を眺めるの?どうして、そんな悲しい顔をするの?どうして、なにも話さないの?」

じつと見つめられた彼女は、目蓋を閉じ、薄い笑みを浮かべる。嬉しいからではない、楽しいからではない、むしろ、悲しいゆえに、現れた笑みのようだ。見とれてしまった二人の疑問に答え、彼女は、今度こそ口を開いた。

「雨は、好きなの。体も、心もきれいになっていく…:だって」

悲しみも、全部攫ってくれるから。

彼女らしくない発言は、二人のブラックボックスを動かした。地球で唯一の生き残り、地上で唯一の生き残り。それを意味するのは……

一人ぼっちの人間  
永遠の孤独。

「……ごめんね、変な話して。あつ、濡れちゃった、はやく戻ろう?」

「え? ああ、はい!」

「滑らないように気をつけて。それと、さきに風呂を用意する、私が服を乾かしてあげる」

「ありがとう、2B」

「じゃあ僕が髪を乾かしてあげますね! こういうの得意ですよ!」

「うん、9Sに任せるね」

何気ない会話を交わしてるが、本当は、<sup>2Bと9S</sup> 彼らは考えてるのだ。

私たちは人<sup>人間</sup>にはなれないけど、せめて、あなたのそばに居続ける人<sup>人形</sup>でいよう。あなたが寂しさに、悲しみに押し潰されないように。

ヨルハ部隊所属…？

「2B！9S！ねえねえ、これ見て！」

「どうした、の……」

「…2B？どうしたんで、す…かあ…？」

「じゃじゃーん！お揃いだよ！」

レジスタンスキャンプの中に、新たなヨルハ部隊隊員が誕生したのだった…：…ではなく、アカネが、なぜかヨルハ部隊の標準戦闘服を着ていた、それも男性型の戦闘服。黒い生地で出来てるのではなく、あえて白の生地で作られた戦闘服は、9Sが身に着けてるものとデザインこそ変わらないが、全体が白であるかゆえに、雰囲気はまったく違う。白い隊服に、白い手袋に、白いハーフパンツ、黒いハイソックス、白いブーツ。色違い以外どこからどう見ても、ヨルハ部隊の者に見える。

「…ん？」

そこで異様を察知した9Sは、デザインの違いに気づく。長かった袖のほが、彼女が身に着けてる服は短い袖になっている。彼女がいつも身に着けている白いシャツも、確か、袖が短かったはずだ。この服装も彼女を考慮して、造られたとしたら、つまり、つまり…：

「アカネさん、それ、もしかして…オーダーメイド、ですか？」

未だフリーズ<sup>驚</sup>状態から抜けてない2Bはじつと彼女を見つめ、疑問を耳にしたアカネはやはり嬉しそうに満面笑顔になりながら「そうだよ！司令官さんが送ってくれたの！」と語っていた。司令官さん、それはヨルハ部隊の最高責任者で、バンカーを率いる、あの司令官のことを示してるだろうか？そもそも、司令官はバンカーにいて、連絡を渡すときもご本人ではなく、オペレーターさん経由で届いてるのに、直接司令官とやり取りなんてできないはず。ましてや、面識もない、彼女<sup>アカネ</sup>と連絡なんてするはずがない。

だが、9Sの思考を見抜いたように、アカネは続いて驚くべき事実を伝える。

「実は、この前まで司令官さんとメールのやり取りをしていたの！お

近づきの印について、プレゼントをもらったの」

あのクールで真面目な司令官が、人知れず、彼女とやり取りを：？しかも言葉を聴く限りだと、何度も、メールを送りあった仲まで？今までにない衝撃な情報を手に入れた9Sは、ただただ、できるだけ口を大きく開く事しかできなかった。予想外どころではない、むしろ、今世紀の大発見：と言わんばかりに固まった9Sを見て、パチパチと目を瞬かせながら頭を傾げるアカネだった。

黒く長い髪に、純白の隊服、僅かに染めた頬と小さく微笑みを浮かべるアカネ：ああ、かわいい、なんてかわいいんだ。いつもの服も似合ってるけど、ヨルハ部隊の隊服もすごく似合ってるよアカネさん。司令官、お見事ですっ…！

脳内で言葉が混雑してる9Sは、依然固まってる。脳部のデバイスが高速で回転してはいるが、体は固まってる。それに気づいてないアカネは、改めて2Bに視線を向ける。あちらも丁度気を引き戻してきたところなので、会話は可能かもしれない。

「似合ってるよ、すごく：ううん、とても似合ってる」

反応が遅れたように、少しだけ考え込んだ素振りを見せ、普段しない柔らかな笑みが、彼女の顔に。表情をあまり見せない2Bの珍しい笑みが見れて、花を咲くような笑顔になったアカネは一層機嫌が良くなつたらしく、さらに頬を染めて、ありがとう、と礼を言った。すると、隣から『カシャリ』という音が響いた。2Bとアカネも同時に音が発した方向に振り向く。何気ない様子で浮いてるポッド042が、またシャッターを押して『カシャリ』という効果音を鳴らす。

言われるまでもなく、写真を撮っていた。勝手な行動を取った彼に怒ったように、2Bは声を荒げて問い詰める。怒ってるように見えるが、本当はひっそりとポッドに感謝してるのだ。可愛らしい反応を見せたアカネの一瞬を、記録に残したいと思ったのだから。人間の言葉を借りると、心が通じ合った、というべきだろう。

「うーん、プレゼントは嬉しいけど、司令官さんになにをお返しすればいいんだろう？」

それなら心配ないよ、アカネ。あなたの隊服姿を記録に収めて送

れば、それ以上はない、素敵なお返しになると思う。2Bと9Sは、親衛隊 途端に真顔になって、行動に移したのだった。

その頃、バンカーでは……

「し、司令官？どうなさいました、か……って、司令官!?大丈夫ですか、心拍数が恐ろしいことになってますよ!いい、一度検査しましょう!」

「いや、大丈夫だ……すまないが、自室で少しだけ休ませてもらう、あとのことは任せただぞ」

「あ、はい!分かりました、くれぐれも無理しないでくださいね……」

「……………今回ばかりは、あ2Bと9Sの二人に感謝しないとな……」

もう一人の親衛隊隊員 ヨルハ部隊司令官が、アカネ 人類の隊服姿に撃沈されたとか、されてないとか……

アンドロイドはダンスマカブルの夢を見るか？

手袋を無くした手に、濡れた感触が伝わる。わずかに露出した肌に、見知らぬ液体が纏わり付いている。戦闘用ゴーグルが外された視界が、見渡す限りの赤に占領されている。朦朧とした視界に映る赤は、自分の体に飛び散ってる。足も、手も、腕も、体も、頬も、髪も、体の隅々まで、水のように飛び散ってる。

これは、なに？

匂いがする。鉄を思い出させるような匂い。指についたそれを、味覚機能で確かめる。赤がついた指先が、舌に触れた瞬間、甘くて、生臭い味が口の中に広がる。ぬるりと、粘液と少し似てる赤いもの、だけど、その生臭い甘さは、癖になってしまいそうなほど甘美だった。

これは、なに？

すぐ近く、すぐそこに、私の前に、同じく赤が飛び散った物体があった。アンドロイドと同じ構造、人間を模して造られたアンドロイドから、赤が流れ出してる。アレは、アンドロイドが使う燃料、人間のソレとよく似た色で造られた液体。ソレを失えば、私たちはろくに動けなくなり、機能が停止してしまう事態になる。流れが止まらないアレから、嗅ぎ慣れた匂いが漂ってくる。そのはずだった。

甘い、生臭い、アマイ、かオリが…？ 熟れたカジツの、甘い、ニオイ。

「…、あ………？」

雲に遮られた光が、ソレに降り注ぐ。光を反射する赤、照らされた髪は黒真珠みたいな黒、赤い血管がよく見える白い肌、赤に染められた顔に、今でも閉じてしまいそうな目蓋の裏には、黒曜石のような瞳。見知った容姿、見知った瞳、見知らぬ赤い液体。

これハ、ナニ？

「…カ、ネ？あ、あ……………」

近づく。近づく。靴が赤の溜まりに踏む。片膝を着き、ソックスが赤に染まっていく。赤まみれになった素手で、横に向いたまま地面に倒れたソレ<sup>物体</sup>の腕を掴む。力を加え、押す。ぐるり、ソレ<sup>体</sup>が仰向けになる。

コレは、なに？

華奢な体、柔らかい肌、ぬるりとした赤が付着してる。手によって遮られた部分が、腹部に大きな染みができてる。赤の中心には、細長いなにかに貫かれた形跡がくつきりと残されていた。丸く、小さくて、深い傷口の穴。赤はそこから止めどなく溢れ出ている。白いシャツが赤に染まっていく、肌が蒼くなっていく、温度が下がっていく。

キミハ…ダレ？

髪を侵食する赤、顔に付着する赤、体に広がる赤、唇の角<sup>すみ</sup>から流れ出す赤。震える目蓋の裏に、焦点が定まらない瞳が、私に向けた。徐々に震え出す体、蒼くなっていく唇が動いた。

「…とうー、びっ？」

かすれた声、弱々しい声。今にでも消えてしまいそうな、あの愛しい声。どうして、どうして、どうしてどうしてどうして！あ、ああ！い、あ、いやだ……………血…？どうして、なんで、あなたが、どうして。

「あか、ね…？」

私の、愛しい……………愛しいヒト。<sup>アカネ</sup>

「ああ、やつぱり…2Bだっ…」

「…アカネッ！」

混乱するシステム、アラームが鳴り響く脳内を無視し、急いで彼女の傷口を手で覆い、残された左腕で彼女の背中を支えて起こす。どんどん衰弱していく彼女を見つめ、私は、なにも考えられなかった。今までずっと、ずっと守ってきた彼女が、今まで無事だった彼女が、どうしてこんな格好<sup>傷だらけ</sup>になったかなんて、分からない。どうなってるかも、考えられない。だって、あんなに暖かかった彼女が、氷のように冷たくなってる。



「警告：アカネの心拍数下降。原因：大量出血」

「そんな事は知ってるッ！」

声を荒げてしまった。これでは、アカネが怯えてしまう。ああ、ごめんなさい。ごめんなさいアカネ……！私が、私が守ってあげられて、約束したのに……ごめんなさい、私が、もつと……もつとしつかりしていれば……

「……2、B？こつち、を、見て……ねえ、よく、見えない……の……」

「わ、分かった！私は、ここだ、ここにいる……！あなたの、そばに……！」「ふふ、ありがと……あたた、かい……ずっと、このままで、いたい……」

彼女の頬に触れれば、腕の中にいる彼女は縋りつくように、気持ちよさそうに目蓋を閉じながら呟いた。温度が、下がっていく。冷たい。まるで、まるで……

帰<sup>死</sup>らぬ<sup>体</sup>者のようだ。

違う！彼女は、ならない！ならない……そんな、ちがう……だって、この前まで、あんなに、元気だったのに！帰らない、なんて……ありえない!!!彼女は、アカネは、きつと、きつと少し眠くなっただけだ……！そう、きつと、そうなんだ……ねえ、そうでしょ？ねえ、アカネ……？

ふと、腕の中にいる彼女が、止まった。

「……アカネ？」

目蓋は、固く閉じた。少し開かれた唇は、動かない。弱い呼吸を繰り返した体が、止まった。最悪の考えが、頭を過ぎる。私は、彼女に触れていた手で、知らぬ間に震える手で、彼女の鼻に当てる。息はない。呼吸……してない？

「アカ、ネ……？」

もう一度呼んでも、あなたは、起きてくれない。アカネ。今度も、起きない。眠ってるの？今度も、答えてくれない。

「……ねえ、起きて、アカネ」

どれだけ繰り返しても、あなたは目覚めてくれない。流れ出る血

が止まったのに、あなたはまだ眠ってる。顔についた血を拭いても、あなたはまだ夢を見ている。世界は、静寂に呑まれた。鮮明な赤と、単調なモノクロのみ映ってる。

ギシ、ギシ、ギシ。

遠くから、機械の軋む音が鳴る。その機械の手には、眩い赤が付けられていた。それだけじゃない、あそこに群がってる機械共の武器が、全部、赤がつけられていた。

ああ、分かった。あれだ。あれが、そうだ。あなたをコロシタのは、アイツらなんだな。分かってる、ミナゴロシにすれば、いいよね？任せて、まかせて、マカセテ。あなたのために、コロシテあげる。「アカネ、マカセテ…あなたのために…」

「報告：当該対象であるアンドロイドは殺戮行為を継続し、機械生命体のみならず、アンドロイドの殺害もいとわない」

レジスタンスキャンプにて、9Sはポッドの報告を聞きながら、深刻な顔をしていた。司令官から連絡が届き、地上で敵味方関係なく殺しかかってくるアンドロイドがいる、という情報を受けた。例のアンドロイドを見つけ出して、処分して欲しいとも言われた。

そういえば、2Bはここ最近どこに行つたんだ？単独任務に出たつきり、全然帰ってこないし、一体どうしたんだろう？今回は2Bの協力なしか…これは、厄介になりそうだ。そう思った9Sは顎に手を当て、思考する。

「他に詳しい情報は？」

「当該アンドロイド、戦闘タイプに属し、地上で長く活動していた。とある任務にて対象を死亡させ、今回の事態を引き起こした」

「…？もつと詳しく」

「…：報告：9Sの同行対象に該当する」

同行対象に該当って、まさか…？

「ヨルハ二号B型、通称2B。単独任務を遂行、失敗に終え、アカネの

保護対象

死亡後に地上での殺戮行為を始めた」

「……え？」

僕の中で、最悪の予感が当たってしまった。心なしか、遠くから2Bの声が耳に届いた気がする。違う、それだけじゃない……2Bが、レジスタンスキャンプに入ってきたんだ。

「…ぜんぶ、コロシテしまえば……」

見知ったアンドロイドは、血まみれになった姿で僕らを襲った。ぶつぶつと何度もその言葉を繰り返し、赤に染まった白の契約約を手にして、地面に倒れて動かなくなつたレジスタンスを何度も何度も叩き切つた。その動きに規則などない、その瞳に生氣などない。彼女は間違ひなく、狂ってしまった。アカネを失くした痛みには耐え切れず、アカネの死を受け入れず……2Bは、狂つた。

「みて、アカネ…あなたのために、こんなにコロシテあげたよ……」

恍惚とした笑みを浮かべ、まるで僕が眼中にないように、2Bは僕を対象として外したみたいに、他のアンドロイドを切りかかつていく。何人も、何回も、どれだけその刀を振るつたかも分からないほど、切り続けた。あの姿は、まるで…

死の舞踏。

彼女は、アカネの死死を直面して、恐怖を感じて踊り殺続けているのだと、理解してしまった。その踊りから、微かな……アカネのために踊殺つてるような感覚さえ覚えた。僕も長らく、2Bとアカネと一緒に行動を共にしてきた、だから、少なからず2Bの気持ちは分かる。

僕だって、アカネを、失つた者だ。だから、だからアカネ、どうか……

「……アカネの、ために……コロソウ」

ボクを、ユルシテ。あなたのために、コロスことを…

## 悪い癖

数日の観察で、彼女：アカネについて、一つ分かったことがある。人間は、誰しもがいくつかの癖を持っており、それは『良い癖』と『悪い癖』の二つに分類される。もちろん『良い癖』のほうが、彼らにとって好ましいが、どうも『悪い癖』のほうが前者を上回る傾向があったらしい。これはデータで表示された、遙か昔の人類に関する記録であつて、実際のところはどうか、分からない。

本題を逸らしてしまつたけど、僕が言いたいののは、彼女の『癖』というものを発見した。それも良いほうではなく、むしろ彼女や僕らにとって、悪いほうの癖だ。

「…？アカネ、怪我したのか？」

丁度彼女のところへ尋ねようと、2Bが近付いた瞬間に、鼻を動かしてからアカネに問いかけた。一体どうしたんだろう？と考えて、もしや本当に怪我でも負つたのか、と疑問と心配が混じり、すぐに2Bの隣に並んでアカネの様子を窺う。そこには、どこかぎこちなさそうに目を逸らし、指を弄るアカネの姿が映つた。だけど、様子が変わるのは、彼女の動きじゃない。注目を惹かれた指から目を逸らし、視線を上へと移る。普段の彼女ならば、苦笑いして、口角を上げてるはずだ。

なのに今回に限って、アカネは、僕たちの前で、唇を噛み締めていた。まるで、口の中になにかを隠すように、固く、しっかりと閉じ込めていた。

スキヤナータイプ

S型の性分なのか、はたまた自分が好奇心に撥られやすいのか、気になった僕はそつと右手を上げ、手袋をしたまま彼女の唇に伸ばした。もうすぐ触れる、残り2cm弱のところ、気づいた彼女は驚いたように一歩下がった。決して僕たちを避けたりしないアカネにしては、とてもおかしな行動だった。ショックを受け、かざした手が、宙に浮かべたままだ。

「あ、かね…さん…？」

「一体どうしたの、アカネ…?」

2Bと共に、名前を呼ばれた彼女はビクツと、ビクツリして肩が跳ねた。焦りと戸惑いを混じり合って、視線があちこちに泳いでいる姿は、とてもいつものアカネには見えない。ふわふわとした雰囲気は消え、代わりに漂っているのは、やはり焦りだった。

一体、いったい、なにが…?

僕たちがショックを受けて固まってるのを感じ、視線を泳がせていた彼女は、恐る恐るという風に、ゆつくりと、非常に困った苦笑いを浮かべた。普段よりも、深く落された眉尻は、まるで彼女の果てしない困惑を表しているようだった。そして、固く閉じられた彼女の口は、小さく開かれた。

「…怪我、とは言えないけど、なんていうか…」  
「…?」

彼女が少し口を開いただけで、どこか鉄臭く、甘ったるい匂いが嗅ぎ取れる。2Bの方に目をやると、どうやら彼女も匂えるらしい。もしかすると、さつきアカネに問いかけたのも、この匂いを嗅いだせいかもしれない。

「えっと、癖なの…気づいたら、唇の裏を噛んでしまう癖」

アカネは自分の唇に指を差し、少し戸惑った末に、指で下唇を裏返り、ドクドクと血が滲み出てる傷口を見せた。いかにも歯で噛み千切って見えるそれは、細長いもの、穴の形状をした傷口もあり、自力で噛んだにしてはやや深く見えるものだった。ブツブツ、またブツリと一滴から一滴の血液が現れ、鉄と甘い匂いがさつきより顕著けんちよになった。加えて、傷口付近はまるで、力強く吸われたかのように、少しばかり腫れている。そこで僕の脳内に、いつしか見たデータにあった単語が過ぎる。

自傷癖。意図的に自分の体を傷つけるが、自殺とは異なる行為。

無意識に己に傷を与える、そんな行為をしたあとの傷口を見せるアカネさんはもしやと思い、自分でも分かるくらいに焦って彼女に問い詰めた。

「な、なんで…こんなに血が出るまで…!」

「ご、ごめん…私も、気づいたら噛んで…」

申し訳なきさそうに、下唇をつまんでいた指を離し、意図的にやったものではないと、彼女は言葉を重ねる。だけど、あの傷の深さ、どうみたってわざとやってるとしか見えない。むしろ、執拗に同じところを噛み、血が出るまで動きを止めなかったように見えた。なのに、彼女は違うと主張してる。本当なのか、それとも僕らを誤魔化そうと嘘を言ってるのか。しかし唯一安心できるのは、その傷口が数日経てば治るもので、命に関わるものでないことのみ。

深いため息を吐き、緊張によって強張った体は幾分か楽になった。またもや指を弄り始めたアカネの手を取り、2Bのほうに声をかける。

「二度傷口を見てみたいので、一旦部屋に戻りましょう、2B」

「…分かった。ポッド、あとで救急箱を」  
「了解」

僕の言葉を瞬時に理解した2Bは、さつそくポッド042に要求を出し、僕はアカネの手を引いたまま、レジスタンスキャンプ内にある部屋へ向かってゆつくりと歩いていく。未だ血甘の匂いを漂わせる彼女を引き、収まらない胸のざわめきをどうにかしようと、なるべく頭の中を空っぽにした。そう試みた。

「…いつか、絶対に直してくださいね」

小さく呟いた僕の声に、あなたは「うん…」と頼りない返事をくれた。ああ、どうか、必ずその癖を直してください。どうか、どうか、お願い…あなたがその匂いに満ちるのが、耐えられない。考えつきたくもない、あなたのソノ姿が、脳内を過ぎる。どうか、現実にならないでください。

存在しない神サマに、僕らは祈る。あなたにソノ姿死が訪れないように、血があなたから遠ざけますように。

## 不吉な象徴

かつてこの星は、お伽話でしか存在しない生物が生息しているという噂と、限られた記録があった。その生物は容姿こそ人類と同じだが、人とは決定的に違う部分がある。性別はすべて女性であり、下半身は魚のそれと全く同じ。これは人類なのか？それとも魚類と分けるべきか？この疑問をめぐって、当時の人々は判断を下せずにいた。だがのちの時代、人でも魚でもない生き物、彼女たちは相応しい名を得た。幻想であり、凶暴でもある生き物の名は——マーマイ<sup>人</sup>ド<sup>魚</sup>。

呆然と記載された過去の資料を目に通し、キラキラと輝く銀色の髪を持つ少年は宙に浮いた半透明の画面を消し、目の前にいる者に目を向ける。海の深さを表し、黒真珠を象徴とするかのように黒く長い髪。しなやかで、曲線美が際立つ柔らかかな体は間違いなく女性のもの。下半身は白く陶器のような肌ではなく、深緑色の尾びれ。この時9Sは確信した、自分の前に現れた生き物こそ、資料で見た古の幻想生物だと。

驚きのあまり、呆然と自分を見つめる人魚と視線を交わし、ひらひらと尾びれを揺らす彼女は小さな微笑みを浮かべて、唇を動かす。「初めまして、ニンゲンさん。君は、なにをお求めかな？」

甘くも柔らかく見える人魚の微笑みは、かつて多くの人類を惑わせたとされている。だけど、9Sは人類ではなく、人類によって作られた機械人形であるため、魅惑の効果も少なからず軽減される。正確に言えば、無に等しい。だが一番重要なのは、そこではない。

人間さん。目の前にいる人魚はたしかに9Sを『人間』と称したのだ。まさか彼女は僕を人間と間違えてるのか？或いは、人類が月に逃げ込んだ事を知らないのか？資料によると、人魚はあまり人間界と関わりを持つとうとしない、物語に登場する幻想生物のように、己の領域でひっそりと暮らす。ならばこの場合だと、後者である可能性が高いだろう。あまりにも特殊な状況を前にして、彼は考えずにはいられない

かった。

顎に手を当てながら考えにふける9Sをじっと観察し、知らず知らず近寄っていった人魚は、相変わらず甘く薄い笑みを浮かべていた。そつと手を伸ばし、黒い布で作られた服の袖を控えめに引つ張る。反射的に俯いていた顔を上げた9Sの視界は、ほとんど人魚の顔で埋め尽くされていた。

思わぬ急接近に、一瞬固まる。思考を遮られた9Sを気にも留めず、人魚はじつと彼の顔を見つめる。黒い布ゴージュルで覆われ、その裏に隠された瞳を見つめるかのように。ふむふむ、となにやら答えを得たかのような反応を見せる。

「あら……とても似てるけど、ニンゲンじゃないんだね！」

どこか嬉しそうに話す人魚は、人間を嫌悪してる気配もなく、ましてや人間にとても似てるアンドロイドの自分を嫌ってる素振りなども一切なかった。思わぬ友好的態度に、驚きを隠せない9Sだった。記録によると、人魚は一族を重んじる種族であり、自分たちを害しかねない人間や他種族に対しては攻撃的だと記されている。

だがこの人魚はどうだ？攻撃的というより、あまりにも無害で、無防備で、世界の汚れた一面など知らずに育ってきた純真な幼子のように、とても資料や記録に載っていた人魚とは思えなかった。

未だ柔らかい雰囲気を放ち、ゆらりと尾びれを動かす人魚を見つめ、9Sはさらなる好意を示すために、口を開く。

「初めまして、人魚さん。僕は9S……あなたの言う通り、人間ではなく、アンドロイドです」

「あんど……ろいど？人工的に作られた、ニンゲンの事？」

「いえ。オートマタ機械人形の方が正しいですよ」

「でも、私にとってはニンゲンさんと違わないよ。君も、立派な『ニンゲン』さんでしょ？」

「そ、それは……」

頑なに己の事を『人間』と称する人魚に対し、ヨルハ機体で随一賢いスキヤナーモデルである9Sも、さすがに返答に困った。どうやら目の前にいる美しい生き物は、天真爛漫なだけでなく、頑固なところ



もあるようだ。その点については、正しく人間らしいと言うべきだろう。

それにしても、人間とあまり関わりを持たない一族にしても、随分と理解力があるようだ。現段階で最新鋭の技術によって作り出された自分たちが『人工的に作られた人間』であることや、オートマタと訂正してもなにより一つ疑問に思わない姿は、こちらの話を理解してるなによりの証。もしかしたら、目の前にいる人魚は人間と同じ……もしくは人間以上に聡明かもしれない。話を理解できず、こちらに合わせず。て会話してる可能性もあるが、その場合だと困惑する表情を表すはず。

嫌な顔をせず、かと言って頭を傾げる等の動作もなくスムーズに会話を継続するかの人魚は、きつと賢い部類に入るのだろうと勝手に決めつけた。もつとも、彼女に関しては『勝手に決めつけた』というよりも、行動そのものがなによりの証拠と言ったほうが妥当かもしれない。

「ごめんね、なんか困らせたみたいだね…」

「どちらかと言うと、初めて言われて、どう反応すればいいか——ああ、これこそ『困ってる』と言うべきでしたね」

「よし、じゃあこの話題はここまでにしよう！うん、それがいい！」

「あはは、助かります」

「うーん、ならばは……そうだ！」

軽いショックで処理能力の処置が遅れてしまい、思わぬ失態にすぐさま口を閉じた。これに気づいたか否か、人魚は気を取り直すべく、追求するのではなく、潔く話題を変えた。合掌と共に次の話題に移ろうと明言する彼女だったが、しばし考えを巡らせてから、またもやにこやかな顔で9Sに視線を向ける。

「9S、君はなにをお求めかな？」

なにを言い出すかと思えば、彼女を発見して間もない頃に聞かれた質問だった。悪意も敵意もなく、あくまでも柔らかい雰囲気です「初めまして」と挨拶してきた彼女の姿を思い出し、続いて今さっきの言葉を口にした事を思い出す。ああ、確かにそんなことを言っていた気が

する。

察するに、彼女と出会った者はなんらかの願望を抱き、それを叶えるがためにわざわざお伽話に出てくる幻想生物を探しにきたのだろう。虱潰ししらみつぶしに当たっても、天文学的な確率でしか見つからない人魚をわざわざ探す……不可解極まりない考えに、9Sは理解できずに頭を傾げる。

「いいですよ、人魚さん。僕の……僕たちの願いは、自分たちで叶います」

「なるほど、私では手に負えないようだね」

この地上に起こる戦闘、戦争行為はすべて月に逃げ延びた人類のため、この星を再び人類の手に戻すべく行われたものである。いくら願いを叶えてくれる人魚さんでも、こればかりは叶えられない。彼女は人魚ではあるが、半分が人間という性質もあり、もし彼女が戦闘に加われば、我々アンドロイドはきつと彼女を守るかのように戦うだろう。そうなれば、効率は下がり、さらには希少種でもある人魚を失うことになる。

半分が魚介類とはいえ、もう半分が人類である彼女を、できれば失いたくない。足手まといなんて直接言ってしまう、彼女が悲しむ。できるだけオブラート、かつ己の願いを伝える言葉を選んで伝えた。彼女は察してるのかは不明だが、しようがない、という風に苦笑いを浮かべる。

「じゃあ……代わりに私をお願い、聞いてくれる？」

尾びれをひらひらさせながら、彼女は小首を傾げてこちらを見上げる。さきほどから陸に上がらず水面に浮いてる彼女が気になるが……水中そちらのほうが居心地がいいのだろうと推測し、彼女の言葉に反応する。

彼女は一体何を望んでるのか、なぜ会って間もない僕にお願いを告げるのか。様々な疑問がグルグルと頭の中を乱す。だが彼女は今の時代では弱き存在、できることならば、協力しても構わないだろう。

「はい」

「ありがとう——私のニンゲンさん」

黒真珠のような瞳は、一瞬にして慈愛（狂気）に染まり、ただただ僕の姿を映す美しい無機物のように変わった。ゾクリと背筋まで凍るような感情に身を蝕まれ、危険だと警告するポットやアームが鳴り響く脳内に反射的に身を引く。視界に映る人魚の白い腕が伸びてきて、これ以上水辺に残るのは危険だと思い知る。

一気に後ろに飛び、一定の距離を保てたおかげで9Sを掴もうとする手は空回りしてしまい、宙に止まった。まさか掴み損ねるとは思えず、人魚はきよんとした表情を9Sに向ける。さきほどと打って変わわり、柔らかい雰囲気を漂わせてる。あまりの変わりように、9Sは恐怖を覚えざるを得なかった。あれが、噂の人魚？美しく、優しい態度で接してきた人魚が、なぜあんなにも恐ろしくなるのだ？

「…残念。今度こそ見つけたと思ったのに」

「なにを、ですか……」

「君だけだよ、私を見ても逃げずに近づいてきたのは。あーあ、今度こそ手に入ると思ったけど、やっぱりだめみたい」

残念でならない悲しい表情に切り替わる彼女ではあったが、瞳は相も変わらず光を失ったままだった。もはやあれは黒真珠などではなく、この世のすべてを蝕む深淵に近い色。人魚は言った、今度こそ見つけたと。人魚は言った、今度こそ手に入ると。今更ながら、9Sはようやく人魚の今までの行動を理解した。

ずっと水辺にいたのも、ずっと水の中に入ってるのも、何気ない会話を続けてるのも——すべては自分を水の中に引きずり込むため。ああ、やはり彼女は真正銘、お伽話（伝説）に登場する生物だと思い知る。

「さようなら、9S——私のニンゲンさん」

最後に悲しい笑みを浮かべた人魚は、水の中に消えていった。同時に、鳴り響くアームの音も、ポッドが警告を告げる言葉も止み、静寂に戻った。やけに無音に思える環境と、シヨックによる思考停止に、9Sは覚束ない足取りで水没都市を去った。

レジスタンスキャンプに戻る道中、9Sはポッドの助言で人魚と接

触した発端や過程、結末などを報告としてまとめ、ヨルハ部隊の最高責任者でもある司令官に直接送った。直後、脳内にあるその報告や記録に複雑な暗号やらパスコードをセットし、さらには記憶領域の最奥に仕舞い込んだ。

そうして彼の脳内に、ただ一つ残された人魚彼女の記録は、去り際に見せた、切なくも儂い笑みをする彼女だった。

## ありえたかもしれない話

― 見知らぬ誰か

僕は知らない間に、機械生命体の頭部に入っていたらしい。

あまりにも不確定で、あやふやな言い方をしたのは、僕自身でも、よく覚えていないからだ。自由だった頃の僕は一体、なにをしていたのか。また、どこの誰だったのかも、まったく覚えていない。記憶喪失にも似た状態の中で、僕は森に似たどこかで目を覚ました。暗い機械の丸い頭部の内部で、誰かの声を聞きながら。

「……キミも、そう思うでしょう？」

頭部の向こう、隔たりの向こうに、誰かの暖かい手が置かれた。頭部と僅かにコネクトしてるせいかな、しっかりと感触が伝わってくる。小さくて、柔らかくて、暖かい誰かの手。機械越しなのに、こんなにもはつきりと感じられたことに、僕は驚くばかりだ。それと同時に、悲しい気持ちになるんだ。

ねえ、君は…あなたは一体、誰なの？ どうして、不安そうな声をしてるの？ 教えてよ……あなたは、誰？

「……」

どれだけ考えても、どれだけあなたに伝えようとしても、僕は言葉になんてできない。口が動かない、声が出ない。あなたの手の温もりを感じ取り、悲しい声を聞き取るだけで、なにもしてあげられない。

あなたが、誰とも知らないのに……どうして僕は、あなたをこんなにも心配してるの？

「同じ○○○○同士、これからよろしくね？」

やけに耳に馴染む誰かあなたの声に、おかしな気持ちになるばかりだ。ノイズで隠されたあの単語、あの言葉は一体何なのか、僕には分からない。とても重要のはずが、どうしても聞こえずにいる。自分の欠けた記憶と関係するかもしれないのに、どうしても聞こえないの？ どうして、ノイズがかかっているの？

僕が、自分のことさえ覚えてないから？ それとも、神さまのイタズラ？

「…じゃあね、またどこかで会おうね?」

またキミと会える日を、楽しみにしてるよ。そんな風に、別れの言葉  
を口にした誰か<sup>あなた</sup>さんは、ほかの仲間といっしょに、この場から離れ  
てしまった。ごろごろと、精一杯の力を使い、やっと外へ出られた時  
には、すでにあなたの姿はなかった。聞き覚えのあるその声は、頭の  
奥底に沈んでいたモノ<sup>記憶</sup>を呼び覚ます…そんな気がした。

「あなたは、いつたい…だれなの?」

どこかも知らない森で、僕はひとり、広い空を眺めた。

遠い過去の事は思い出せないけど、どうしてか、生きていける気が  
してきた。もしかしたら、あなたのおかげかもしれない。声だけ覚え  
ている、顔も姿も、名前も知らないあなたを、生きる目標として。あ  
なたは、○○○<sup>彼</sup>さんじゃないのに、どうしてだろうね。

……?○○○さん…?

「○○○さんって、誰…だっけ?」

またひとつ、思い出せないのに、口に出してしまった言葉が現れた。  
たしかに、はつきりと彼の名前を言ったのに、自分では聞き取れない、  
姿も思い出せない。○○○さんは、僕にとって、大切な存在?それと  
も、最大の敵?

「僕は、誰なの…?」

次々と自分を侵食する疑問に、僕はひどく焦ってしまった。だつ  
て、自分の事なのに、なに一つ思い出せないなんて、おかしいよ。  
だけど、ここで立ち止まっても、分かる事なんてなに一つない。な  
ら今の僕にできる事は、前に進むだけ。いつか、彼女のことを思い出  
せるように、いつか、○○○さんのことを思い出せるように。

「いたたたた…あつ!あなた方は…先日の!」

— 愛しのヒトよ

長く望んでいた人間を、唯一の人間である彼女を手に入れた。アカ  
ネという名を持つ彼女を、ついに手中に収めた。

データにあつた『サンプル』と違い、彼女はとても特別だった。実在していながらも、まるでこことは別の次元にいるかのような、存在そのものがあやふやな人間。さらに、彼女は一般人における『危機感』を持ち合わせていない。いや、正確には、人間の中でも危機感が薄いと言つたほうがいいか。

なにせ、初対面でこの私にハグなどという大胆な行動を取つたくらいだ。

人類を神とみなすアンドロイドのみならず、敵である機械生命体すら友好的な態度を取る彼女は、とてつもなく、人間の神秘に近い。

だからこそ、私は……

彼女を手に入れ、生きたまま、殺し、切り裂いて、息を引き取る瞬間まで、血肉を千切り続けた。なのに、何故だ。手を動かすだけで想像を超える痛みを感じるはずが、何故気にも留めず、私に触れようとする。何故酷な仕打ちをした対象にまで、際限を知らぬ優しさを与えようとする。

何故君は死ぬ直前まで、私に……微笑んでくれた？何故、その血に濡れた顔が、美しく見えるんだ？

美しい。嗚呼。なんと美しく、儂いものか。醜い感情を抱くほかの人類とは違い、君だけは、際立つほど純粹で、無垢で、穢れを知らぬ幼子おとぎなこのように目を惹かれる。もしも私に人間の『魂』が存在するのなら、迷わず君を汚したくなるほど、喉から手が出るほどに、欲しがるだろう。

「……アカ、ネ」

もう一度、その『顔』が見たい。なあ、アカネ。君は、死んだのか？たかが解剖で、死ぬようなヒトではないだろう？なあ、起きてくれ。目を開けてくれ。私がいもう一度殺してやるから、だから……

「もう一度、もう一度だけ……」

……嗚呼。違う。私は本当は、ただ、君が○▲？だけだ。